孝行者ぢや。

官助　私しが無念の心底、御推察下さりませ。

ト ばた〳〵になり、上手の障子屋體より、お園走り出て來り

そのモシ、ちつと爰へ隱して下さりませ〳〵。

ト 屏風の中へ入る。兩人悶りして、

伊太　何ぢや〳〵。

ト これにて官助飛びのき、思ひ入れ。

そのハイ、跡からお泊りなされたお侍ひ樣が、いろ〳〵なてんがうなされまして、逃げても逃がさず、無體な事。また爰へ追ひかけて參りまする。どうぞ隱して下さりませ。

伊太　ムウ、跡から泊つた侍ひが、無體な事……ハテ、誰れが心も違はぬもの。身共も有やうは……マア〳〵、それは格別、爰へ隱れてゐやれ〳〵。

そのハイ〳〵、どうぞお賴み申しまする。

ト 屏風を立て、その中へお園を隱す。

官助　今の樣子を聞かれたかと、悶り致しました。

ト この時上手の障子屋體より、主税、傳六、權藏、鄕內、出て來り

主税　あの女め、どこへ逃げ居つたか。

傳六　たしか爰らへ逃げました。

鄕內　大方、あの屏風の中でござりませう。

主税　成る程、屏風の中に違ひあるまい。引摺り出せ。

三人　畏りました。

ト 屏風へかゝる。

伊太　イヤ、お侍ひ、待たつしやい。手前も武士でござるが、此方で借りうけたる座敷へ、案內もなく踏み込んで、どうさつしやる。

主税　イヤ、手前はこの家の、召仕ひ女を尋ねまして。

伊太　召仕ひの女に用があらば、手を叩いて呼ばつしやい。逃げ歩く女を捕へ、無理無體に、何の御用でお尋ねなさる。

主税　サアそれは……イヤ、斯樣でござる。召仕ひの小女めが、身共へ無禮を致したによつて、云ひ譯なさに、この座敷へ逃げ込んだと見えます。

郷内　なんでもあの屏風の中に、隠れてゐるに違ひござりませぬ。隠し立てなさるゝお侍ひ、屏風の中へとめておいて、強淫でもなさるのか。

權藏　但し此方へ無禮をした女を、引取つて腰押しをなさるのか。

傳六　女にのろいお侍ひ、キリ〳〵爰へお出しなさい。

主税　女なれども侍ひへ、慮外いたした憎くい奴。

伊太　あまり憎うもござるまい。可愛さあまつてこの立腹。

主税　ヤア。

伊太　ハヽヽヽヽ。イヤナニお侍ひ、女子供に致せ、慮外いたせば、武士の表が

主税　立ちませぬ。品によつては刀の手前。

伊太　しかと左樣かな。

主税　知れた事サ。

伊太　然らば身共も刀の手前。お侍ひ、ちよつとお目にかゝりませう。

主税　身共にナ。

伊太　いかにも。

ト合ひ方になり、伊太八、官助を前へ連れ出て來り

この下郎、御存じでござるか。

主税　ヤ。

皆々　それは先刻の

伊太　御存じの通り、疵がつきました。この下郎は身共が家來、女子供ですら、慮外いたさば武士の表立たぬと云はれたお侍ひ。身共も家來に疵つけられ、武士の表が立ちませぬ。女を庇ひ、最屓いたすと云はれた悪名、雪ぐこの疵、女にあらぬ家來の腰押し。サ、無禮くらべ、いま爰で糺さにやならぬ。お侍ひ、さう心得でござらつしやい。

主税　ムウ、そんなら下郎は其許の、家來であつたか。先程金子の扱ひを、知らぬといつて料簡した、氣のよい下郎と思ひの外

傳六　跡で主人へ云ひつけ口、けちな心の野郎だはわえ、

官助　侍ひの家來が、金銀で料簡しては猶々濟まぬ。それゆゑ下郎が堪忍しても

伊太　家來の恥は主人の恥、この伊太八が料簡ならぬ。

主税　ア、、コレ〳〵、あの者へ疵をつけたは、身共ではない、この槍持ちの傳六だ。

郷内　左やう〳〵、家來同志のいさくさを、御主人の知つた事ではございませぬ。

權藏　子供の喧嘩に親が出ると、大人氣ないお侍ひ。

伊太　イヤ、家來の無禮は主人の科、主のこなたが懸り合ひ。サア、家來の喧嘩を主同志が、買つてこの場で

主税　イヤ〳〵〳〵、家來でござらぬ。勘當いたした。

伊太　ヤ。

主税　たつた今、勘當の仕立て。家風に合はぬ下郎ゆゑ、暇をくれました。暇をやれば家來でござらぬ。さすれば身共に懸り合ひはござらぬ筈。サ、勘當ぢやぞ〳〵。

傳六　ハイ〳〵、成る程、御勘當承知いたしました。勘當うくれば槍持ちの浪人、旦那がなければ一本立ち。あの男の疵は、おれが附けたのだ。勘當された槍持ち浪人、外に懸り合ひはねえ。カウ、お侍ひさん……イヤサ、今でこそお侍ひだが、この間まで中間仲間、下馬で一緒に濁酒を、くらつてゐた初平、元は折助だ。出世したと思つて、何も大きな面をする事はねえ。こなたの家來か矢來か知らねえが、喧嘩の相手はおれだ。おれが疵を附けたのだ。それがどうした。どうしたといふのだよ。

ト伊太八の側へ摺りよる。伊太八、物も云はず莨盆にて傳六の頭をくらはせる。これにて疵つく。

うぬ、理不盡な。

ト伊太八へかゝるを、よろしく立廻つて見事に投げのける。主税、權藏、拔きかける。伊太八、白刃を拔き、主税の前へ差しつけ、郷内を引敷き、キツと見得。

伊太　勘當されても相手はこの者、疵を附ければ卽ち五分々々。それともたつてお騷ぎあると、いちいちこの場で刀の相伴。今この下郎が申せし通り、以前は仲間の徒歩中間、出世はしても心は下素輕い命の交易に、どいつどなたの容赦なく、笠の臺無し二合半、切つて切り米ぶッこぬき、お望みならば今爰で、一番相手になりませう。

主税　イヤ、相手にはなりますまい。主用抱へた大事の身、卽ち主人へ不忠といふもの。

權藏　左樣でございます。君子は危ふきに近よらずと、馬鹿者には構はぬがようございます。

伊太　然らば主用にかづけ、この場をコソ〳〵。

主税　逃げは致さぬ。そこが卽ち寛仁大度。

郷内　肝腎かなめの命が大事。

伊太　すりや、家來の疵も此まゝに

主税　勘當したれば構ひはねえ。
權藏　主でないなら家來でなし。
郷内　家來でなければ主でもなし。
主税　いつまで云つても同じ事。
傳六　同じ事なら痛い目を、したゞけ損な心持ちだ。
郷内　それも忠義だ、辛抱しやれ。
傳六　これが卽ち善次は善次、勘當は勘當。
宮助　それでは築地へ歸られまい。
傳六　大きにお世話。
主税　とは云ふものゝ

ト伊太八、刀をヒツシヤリ納め

伊太　云ひ分ござるか。
主税　云ひ分あれども。
傳六　外聞が惡るさに

郷内　當分このまゝ。
權藏　何分これでは
傳六　存分云へない。
主税　隨分よろしう
皆々　さつさとござれや。
主税　エ、、おきやアがれ。

ト合ひ方になり、皆々奥へ入る。

宮助　さて〳〵、よい氣味を致しました。時に旦那樣には、今晩お泊りでござりまするか。
伊太　左樣いたさうか。てまへ達は今夜のうち、小田原宿まで參つてくりやれ。身共は跡より追ひつくであらう。
宮助　左樣ござらば傍輩どもを、殘し置きまして手前一人
伊太　イヤ〳〵、皆同道して行きやれ。
宮助　然らばお先へ、參りまするでござりませう。

ト合ひ方になり、宮助奥へ入る。屏風の中よりお園、おづ〳〵出てくる。

伊太　コリヤ〳〵、女、もうよい〳〵。さて〳〵憎い奴等ぢや。

そのこれはマア、有り難うござります。私しの事から云ひ募つて、どのやうな事にならうかと、屏風の中で、誠に苦勞いたしました。

伊太　なんの〳〵、事を起す程の性根があれば、無法もせぬといふものだ。

トこの時奥より長太出て來り

長太　お園〳〵、わりや爰に何してゐる。あちらのお客様に、お膳もあげようとはせいで、お客のお寢間へ無遠慮な。又しても〳〵小嫌らしい奴ぢや。あなたの所へいちやつきに來たのか。助兵衛女め。

その　どう致して私しが其やうな事を。

長太　どうも斯うもいらぬ。早く奥へ行かぬか。

その　ハイ。

トうぢ〳〵してゐる。

長太　エヽ、きり〳〵とうせろと云ふに。

その　ハイ。

トたちさうにする。

伊太　アヽイヤ、女、待て〳〵……其方はこの家の亭主か。

長太　左様にござります。

伊太　あの女は、只今身共が、少々用事を頼んだので、これに居つたのぢや。其やうにお身が叱ると。却つて身共が氣の毒ぢやて。

長太　へイ、何の御用を仰せつけられました。

伊太　サア、その用は、身共最前より、いまだ腹痛いたし居るゆゑ、少し押してもらうて

長太　左様なら、先刻の按摩を呼びに遣はしませう。

伊太　イヤ〳〵、最前の按摩は強うてならぬ。身共は女の柔らかい手で、押してもらふが、丁度よい心持ちぢやて。

長太　あなたのその格幅で、床の中で女と二人按摩とりとは、これがほんの猫に鰹節。

伊太　然らば身共が、あの女に按摩を頼んだを、其方は怪しく思うて左様申すのか……コリヤ、手前は武士ぢやぞ。みだらな事を致すと思ふか。

長太　イエ、左様では

伊太　但し身共が用を頼んでは、其方が立腹いたす儀でもあるか。
長太　イエサア
伊太　客の用は足させぬ女か。サア、返答いたせ。
　ト嚇してキツと云ふ。
長太　イエ、左様ではござりませぬ。隨分よろしうござります。コレお園、あなたのお氣の晴れるやうに、よく揉んであげ申せ。そして、お療治が濟んだら早く來いよ……ア、、心ならぬ御療治ぢや。
　ト長太、詮方なきこなしにて奥へ入る。お園、いろ〳〵思ひ入れ。
伊太　ハ、、、、、、コレ女、いま亭主が口吻では、其方とどうやら、ねんごろ致して居るやうな樣子に見えるが、左やうか〳〵。
そのエ、、穢らはしい事仰しやります。殺されたとて、あのやうな人と
伊太　よう嘘をゝふ奴ぢや。身共が側で差向ひに居つたのを見て、腹を立つた樣子。どうでもこりや、怪しい〳〵。
そのイエモウ、てんがうにも其やうな事云うて下さりますな。私しは悲しうござります。

伊太　ムウ、其やうに其方が云へば、彼れが心に隨はぬゆゑ、あのやうに邪慳に致すとも思はれる。
そのもう〳〵、邪慳どころか、鬼とも蛇とも
伊太　サア、其やうな内に奉公せずとも、其方が器量では、どこぞへ緣附き、夫婦して、暮らしたらよささうなもの。定めし男も、引く手數多であらうな。
その旦那樣のぢやらくらと、私しのやうなもの、誰れが構うてくれる人が
伊太　イヤ、無いとは云はさぬ、いま目前に、あの侍ひが構うたではないか。
そのそりや鼻の先のいたづら、弄さみものにせうといふお方は、いくらもござりますわいな。
伊太　然らば當座の弄さみでなく、眞實底から世話でも致さうといふ人があれば、身を任す所存か。
そのサア、そこの所は兎も角も、深切なお方があらば、私しが身の上も打明かし、お氣に入らずば妹になりとも、下女になりともこの身の片附き、お賴み申したう思うては居りますれど、世界の男といふものは、みんな浮氣ないたづら者、これぞ力に賴まうといふお人は、マア無いものでござりまする。
伊太　イヤ、あるな。隨分あるぢやて。まづ男振りは、其方の氣に入らぬは知れた事ぢやが、實情のあるところでは、業平にも負けぬ情知りがあるぢやて。

そのそりやマアどこにござります。

伊太　爰に居る。身共ぢやて。

そのエ。

ト伊大八の顔を見る。

伊太　顔に似合はぬ事を申すと思つて、其やうに恂りする事はない。實情のある證據は、云うて聞かさう。まづ先程、爰の門口にて、其方が身共を留めた時、據なく急ぎの主用にて、罷り通る者なれど、其方が器量にツィ引かされ、家來の手前も面目ないゆゑ、作病を起し、この家へ泊つたも主用に替へて其方に逢ひたさ。サ、これ程の實はあるまいが。

その不拙な私しを、お主樣の御用にお替へなされて、泊つて下さりましたは、私しの身にとりまして誠に有り難いと申しませうか、恐れ多いと申しませうか、この上もないあなた樣は

伊太　眞實者か。

その　浮氣者でござります。

伊太　ヤ。

その　蓼喰ふ蟲も好き〳〵と、どこがお目にとまつたやら、そのお心は嬉しうござりまする。また外々

にお目にとまつた者があれば、そこへも矢ッ張りこの通り。移り易いが殿御の癖。ちよつと見て、直ぐに斯うぢやといふやうな、それこそほんの當座のてんがう。

伊太　ハテ、よく理窟をこね廻す女ぢや。其やうに疑ぐるも女の常、尤もながら、そりや町人の若い衆とやらの事。侍ひの申した事は、跡へは引かぬ。また申し出した事は、どこまでも云ひ條立てねばならぬ、とサア、斯樣申して無理に口說かば、矢張り最前の侍ひのやうに、無法な事を致すと思やらうが、何が否でもなし應でもなし、蛇の生殺しの拶拶で、猶々身共氣が揉める。この上は、其方が心に落ちずばこれぎり、また料簡が附いたら返事をしやれ。たゞ白いと黑いの二つの返事サ、否か。

そのエ、。

ト段々摺りより、袖を捕へて思ひ入れ。

ト もぢ〳〵する。

伊太　否でもないか。

そのサア。

伊太　但しは否か。さうか〳〵。

そのサア、私しは

伊太 私しは

そのアノ

伊太 アノ

ト段々抱きよせる。

その否でございます。

ト思ひ切つて云ふ。伊太八、お園顔を見て

伊太 あまり無造作な挨拶で、袖を捕へたこの手の放しやうがない……よいワ、まゝよ。否ぢやと云ふもの、無理にとも云はれまい。畢竟泊らずともよい内へ泊つたも、ほんの無駄事、よしない事に主用の遲滯。ドレ、これから直さま罷り立たう。

ト刀を持ち、素氣なく行かうとする。この時、伊太八、蒲團の上へ、守り袋を忘れて立つ。お園見て思ひ入れ。

そのアヽモシ。

ト氣の毒なる思ひ入れ。伊太八振り返り

伊太 なぜ留める……これサ、なぜ留めるよ。

トまた立歸る。

そのイエ、留めは致しませぬ、

ト伊太八、何の事ぢやといふ思ひ入れあつて

伊太 然らば立たう。

ト行かうとする。お園、右の守りを、よく〳〵見て

そのアヽ、モシ〳〵。

伊太 また呼ぶか。もう今度は歸らぬ。用があらば、そこから申せ。

そのあなた、腹をお立てなされては悪うございます。

伊太 何しに身共が腹を立つものか……併し、あまり心よい事もないわえ。

その私しの申した事、腹をお立てなされずば、もう夜深でもございます、機嫌を直して、お泊りなされては、悪うございますかえ。

伊太 泊りたいは山々……イヤ、泊るまい。侍ひが云ひ出した事、跡へは引かれぬ、矢張り立たう。

そのアヽモシ、この先の松原には、病犬が居りますぞえ。

伊太　病犬は身共大好きだ。
そのイエ〳〵、そして悪い狐が居まして、化しまするぞえ。
伊太　もう爰で半分狐には化されて居る。
そのそんなら私しを、狐ぢやと仰しやるのかえ。
伊太　まづ、それに類したものぢや。
その其やうな事仰しやらずと、泊つてお出でなされませ。但しお否でござりますかえ。
伊太　サア。
ト　もぢ〳〵思ひ入れ。
そのお泊りなされませいな。
伊太　サア
そのどうでもお否かえ。
ト　お園だん〳〵摺りより、裾を捕へる。
伊太　イヤ、身共は
その身共は

伊太　アノ
そのアノ
ト　恥かしきこなしにて、チツと寄りそふ。
伊太　否ぢや。
ト　お園こなしあつて
そのわたしもこの手の放しようが
伊太　イヤ、歸るのは否ぢやといふ事。
ト　碎けてお園を抱く。
そのあなた、先刻に仰しやつた事が御眞實なら、どうぞわたしをアノ
ト　つかへる。
伊太　また否か。
そのイヽエ、女房に持つて下さりませ。
ト　思ひ切つて云ふ。
伊太　大分風が變つて參つたが、爰が今云ふ、狐かも知れぬて。

ト眉毛を濡らす。

そのアレ、又そのな憎い事。

トつめる。

伊太　アイタ、、、、イヤモ、たとへ狐であらうとも、もう斯うなつては、安倍の保名にあらねども堪へられたものではない。

トお園を引寄せる。お園、恥かしきこなしあつて

そのさういふあなたが、矢ッ張りわたしを

伊太　化かし競べは、屏風のうちで

ト唄になり、屏風を引廻す。奥より主税出て來り

主税　先刻の女を、餘ッほどかこつけかゝつたものを、あの侍ひめが邪魔をして、たうとうどこへか玉なしに

ト思ひ入れあつて屏風を窺ふ。奥より釜市出て來り、主税を見て

釜市　牛島さま〳〵。

ト呼んでも、主税聞えぬこなし。

これはしたり、をかしな風をして、これサ〳〵、牛島さま。

ト脊中を叩く。主税浮れて釜市にとりつく。

釜市　何をなされます。

主税　ヤ、、お身は鴈助、變つた形で變つた處に。

釜市　私しよりは牛島さま、今のは何の眞似でござります。

主税　ちつと小胸の惡い事があつて。

釜市　時に牛島さま、よい所でお目にかゝりました。

ト主税を花道の方へ連れて行き

岩藤さまへ、拙者が内通いたしたゆゑ、尾上之助が切り込んでも、文藉さまは安穩、その御褒美に大そうな出世でも、さして下さるかと思へば、その御沙汰は無うて、叶ひもせぬ戀の執持ちした針野灸按へは、褒美のそくたくとして、束雲の名香を預けられ、内通したわしには知らぬ顔。わしも曾我の奴等が目をつけるゆゑ、姿を變へて昨日から、俄按摩でござりまする。

主税　成る程、その述懐は尤もだが、まだ尾上之助が切腹いたしたは昨日の事、そのほとぼりの覺めぬうちは、その沙汰にも及ばれず。身共とても曾我の寶、二品を盗み取つたが、その恩賞さへまだ

無い程だ。併し、岩藤さまへ願つて、御身の身分は立つやうにしてやらう。それにしても、おれは

ト行きにかゝるのを留めて

釜市 ハテ、まだお話しもございます。マア、奥へお出でなされまし。

ト無理に主税を連れて奥へ入る。なまめいたる合ひ方になり、屏風を明けて、両人よろしく思ひ入れあつて

伊太 いま云ひかけた其方の身の上、爰で詳しく。

その サア、世にも果敢ないわたしが身の上、お聞きなされて下さりませ。

ト合ひ方になり

もと私しが母さんは、工藤の御家來、近江の小藤太さまの娘、その腹に出來ました私しは、浦里と申して、小藤太さまの孫でございまする。同じ工藤の御家來に、鶴賀甚内と申すお侍ひ、その御子息の、時次郎さまといふお方と、幼ない時にわたしは云ひ號け。ところにこの時次郎さまが、七つの時に、親御甚内さまはお果てなされ、それより御家内皆ちり〴〵。その後わたしが祖父の小藤太さまもお果てなされ、母さんはわたしを連れ、云ひ號けの時次郎さまに逢はせんと、住み

馴れし伊豆の熱海を立出でて、馴れぬ旅路のお疲れやら、また過ぎ越し方の御辛勞が、一つに募つて病氣となり、わたしの生ひ先御苦勞なされて、病も重り、この家へ泊つたその夜より、歩行も叶はず、藥も屆かず、遂にこの家で母さんは、お果てなされてございまする。それより跡の取り始末も、知る人の無き旅路ゆゑ、どうしてよいか泣いてばつかり。爰の内の御亭主が、初めのうちは深切に、母さんの亡骸も、近所のお寺へ葬むつて、それからわたしはこの家の内へ、水仕奉公同然に、永々世話になるにつけ、以前は正しき侍ひの、その娘たる母さんの、亡骸とても得も知れぬ、寺へ埋めて回向さへ、屆かぬ程の身の成果て。西も東も他人の中。

ト懐より守り袋を出し

力と頼むは云ひ號けの、しるしと云うて幼ない時、取かへ持ちし守り袋、これを朝夕なぐさめ草便りない身をお侍ひ樣、不便と思うて下さりませ。

ト伊太八この話しのうち、一々悔りする思ひ入れ。

伊太 ハテ、思ひがけなき其方が身の上、母御も爰で相果てしとか。南無阿彌陀佛。

ト心のうちにて回向する思ひ入れ。

その 今日といふ今日、あなたのお情うけるからは、行く末長う女房に

伊太　不便をくはへてやりたいが、罷りならぬ。

そのエ、そりや何ゆゑ。

伊太　不貞な女め。コリヤヤイ、知らぬ先ゆゑ、身共が兎やかう申したが、現在云ひ號けの男を、尋ねる身の上でありながら、今日初めて逢うた身共に、帶紐といたいたづら女、女房どころかこの後は、ふつ〳〵其方には愛想が盡きた、物を云ふさへ穢らはしい。

トきつと云ふ。お園こなしあつて

その　成る程、わたしは不義の女、その不義よりもあなたこそ、つれない仕方。現在わたしが身の上をお聞きなされて素知らぬ顔。そりや聞えませぬ、時次郎さま。

伊太　ヤ、どうしてその名を

その　床に殘つたあなたの守り、雪輪錦のこの摸樣、一目見るよりヤレ嬉しや、尋ぬる夫と思へども、お顏も知らず、便りもせず、どういふあなたのお心やら、この守りを肌につけてお出でなさるからは、ちつとは云ひ號けの女房を、思うて下さるかも知れぬと、色に仕掛けて試して見るあなたのお心。否ぢやと云はれた時の嬉しさ。それに引かへ仇つきに、この守りさへ床のうち、忘れる程なつれないお心。今またわたしの身の上を名乘りもせず、却つてわたしを不義者と、恥しめて

この場を拔け、逃げる心でござりませう。そりやあんまりなされ方。云ひ號けの夫に逢はうとこれまで辛い辛抱も、あなたはよもや御存じあるまい。證據の守りを見たゆゑに、肌をゆるして嬉しい逢瀨。ほんのどうした男でも、外へ心を移す程なら、苦勞苦患は致しませぬ。今まで肌を穢さぬわたし、それと知らねばこの家の主、わたしを捕へて無理無體、女房になれの妾にするのと、云ひかけられるその辛さ。それを否めば邪慳にも、山の薪を拾はせて、それをしまへば風呂の水、汲んで火を焚くその後が、飯こしらへて外へ出て、お客を一日五人づゝ、泊めねば夜通し枕を取上げ、蚊帳も吊らせず暗闇に、縛りからげて打ち叩き、親の手許で我まゝに、育つたこの身が馴れぬ業、薪を切るも水汲むも、遲い〳〵とまた苛責。冬は手足も裂け爛れ、流れこぼるゝ血の涙　風呂の煙りに紛らして、泣かぬ顏してこの年月、その辛抱もどうぞして、あなたに逢ひたいばつかりに、神や佛にありたけの、願ひをかけたお庇やら、思ひがけなう今日爰で、お目にかゝつた嬉しやと、思ふ間もなきつれないお心。さては女房であつたかと、一言云うて下さんしても、さのみ恥にもなりますまい。せめて不便と云はずとも、不義な女よ不貞よとは、そりやあんまりぢや〳〵、お胴慾でござりますわいなア。

トなきむせび、いろ〳〵こなし。伊太八、氣の毒なる思ひ入れあつて、

伊太　證據の守りを見たからは、成る程恨みは尤もながら、包み隠したその譯は、どうも添はれぬ因果な緣。それと明かさば猶更に、辛い別れと思ふゆゑ、不便ながらも素知らぬ顏。

その　エヽ、なぜ又添ふに添はれぬとわえ。

伊太　サア、今も其方が物語り、我が母方は曾我の家來、十二の年に母に別れ、それより身共も時次郎の名を改め、曾我のお家に御奉公、初平といふ下郎。其方が小藤太の娘なりや、主人の曾我と敵同士、云ひ號けはしたりとも、今は添はれぬ互ひの惡緣。殊更今の主人といふは、祐信さまの御養子たる尾上之助さま、格別の御恩にて、俄に出世、又ぞろその名も改めて、主人の名を頂戴いたし、尾上伊太八。斯くまで厚き御主人の、敵にあたる工藤の家臣、その血筋たる其方ゆゑに、女房に持つては主人へ立たぬ。それゆゑつれなく申せしも、思ひ切らせん身が心。

その　そんなら親の緣を引けば、敵同志ゆゑ添はれぬ緣。そのお詞は、御尤もではござりますれど、夫婦となれば夫につき、親でも敵にするのが道。殊に親の死んだる上は、

伊太　そりや私し極めの緣者の證據。云ひ號け致せしとて、祝言せねば夫婦でない……さはさりながら今までに、添はれぬ夫と知らずして、千辛萬苦に貞女を立て、尋ねめぐりし不便な心。この世では叶はずとも、一つの功さへ立つなれば、主人へ潔白、未來の緣を

その　そんなら敵の緣ゆゑに、命を捨てゝも一つの功を、立てさへすればわたしの願ひ。

伊太　二世の夫婦となる程の、潔白見たれば兎も角も

その　成る程、さう仰しやればわたしとて、返す詞もなみならぬ

伊太　一つの功を

その　立てたる上では

伊太　身共が女房

その　して又、あなたは

伊太　主用濟んで、歸りにこの家へ。

その　ほんに果敢ない二人の緣。

伊太　それも浮世の

その　忠義と操。

伊太　思へば不便な

トお園、伊太八に寄りそひ、泣き落す。

身の上ぢやなア。

ト愁ひのこなし、よろしく、道具廻る。

本舞臺、元の見世先の道具になり、時の鐘にて道具納まる。

ト奚に傳六、權藏、鄉内、勘次、萬八、いづれも脚絆草鞋など枕許に置き、寐入りゐる。お吉出て來て傳六を起す。傳六目を覺まし

傳六 誰れだ〳〵。

ト咎めるゆゑ、お吉囁く。傳六あちこちと探り見て

もう四つ過ぎだらう。宵から待つてゐたに。

ト こなし。この時奥より主税先に、長太、小田原提灯を提げて出て來り

長太 お立ちでございます〳〵。

主税 來ども〳〵。

ト これを聞き皆々飛び起き、支度する。傳六うろたへ、着物を着ながらお吉を見て

傳六 ヤア、此奴は違つた〳〵。

きち サア、勤めをおくれ〳〵。

傳六 勤めをくれもすさまじい。先刻ちよつと見た女は、粂三に似てゐたから、二百はづまうと思つたが、うぬが勝手で吹替へにうしやアがつて、うぬから此方へ二百取つても氣がねえワ。

皆々 押しの強い奴だ。

主税 さてはわいらはこの女を……物食ひのよい奴等だ。こんな者には構はずと、支度しろ〳〵。

皆々 支度はよろしうございます。サア、お立ちなされませ。

きち やる事は成らぬ〳〵。

ト捕へるを、皆々お吉を踏み倒し、東の口へ入る。傳六は、軒に立てたる官助の槍を、自分の槍と心得、それを持つて附いて入る。お吉、猶も喚くを

長太 エヽ、外聞の惡い。靜かに吐かせ〳〵。

きち サア、お前方、拂つておくれ。

萬勘 おいらは知らぬ〳〵。

ト この時奥より官助出て來り

官助 サア、旦那が先へ小田原まで行けと仰しやる。みんな支度をしろ〳〵。

萬勘 合點だ〳〵。

長太　左様なら、あなた方もお立ちでござりますか。して、旦那様は

官助　旦那は今夜はお泊りなされて、跡からお出でなさる。

長太　エ、あの旦那一人お泊りなされては、そいつは油斷が

官助　どうしたと。

長太　イエ、よろしうござります。隨分御機嫌よう

三人　世話になりました。

きち　コレ、勤めを置いて行かしやんせ。

二人　おいらがそれを知るものか。

ト お吉を踏み倒し、向うへ入る。官助は傳六の槍を知らずに持つて向うへ入る。長太奥へ入る。

きち　エ、、ひどい目にあはせた。

ト 呟やきながら奥へ入る。直ぐに東の口より主税先に、傳六權藏郷内、早足に戻つて來て

皆々　亭主は居らぬか〳〵。

ト 奥より小平次、お霜出て來て

小平　ハイ〳〵、何の御用でござります。

主税　身共の槍が違つた。合ひ宿の侍ひはまだ居るか。

しも　イエ、もうお立ちなされてゞござりまする。

傳六　それは大變。あの侍ひは、上りか下りか。

小平　慥かお上りで、小田原の方へお出でなされた。

郷内　まだ遠くは參りますまい。

主税　急げ〳〵。

ト 花道の方へかゝる。向うより官助、走り出て來り、皆々を見て

官助　これは〳〵、お道具が取變りまして、これまでお戻りなされましたか。私しも道で取つて返しました。夜中の事ゆゑ、ツイ門口で間違ひましたやら。でも、よい所でお目にかゝりましてござります。サア、お道具は元々へ

ト 傳六に槍を渡す。傳六、この槍を引つたくる。

主税　コレヤイ下郎、われは何の役を致して居るのだ。槍は武士の表道具だぞ。間違へたとばかりで濟まうと思ふか。この槍の違つたばかりで、主人の御用が遲刻いたしたら、その分では相濟まぬぞ。

官助　これは〳〵、恐れ入りましてござります。併し、同じ軒へ並べて立てかけて置きましたを、あな

た方の方で先へお立ちなりや、麁相は卽ちあなたの御家來。

傳六　默りやアがれ。槍はそれぐの印しのあるもの。夜中の事ゆゑ間違つたなら、早速追ひかけてくる筈を、うぬも間違へ。持つて行つたではないか。

官助　サア、そこが麁相、互ひの間違ひ。どうぞ只管御料簡なされて、此方の槍を、お返しなされて下さりませ。

しも　あのやうにお詫びなさる事。あなた方も御料簡なされませ。

小平　エヽ、女の癖に、いらざる事を差出るな。

主税　ヤイ、下郎め、槍持ちの役を勤め、それで扶持を取つて居れば、卽ち槍は主人も同然。その主を間違へる大たわけめ。最前はうぬの主人が、理屈らしく身共をやりこめたが、その家來さへ武士の法を知らぬ奴。

傳六　そりやアその筈でございます。この間まで二合半、中間あがりのあの侍ひ、槍持つ術は知つてるやうが、持たせる術は知りますまい。

鄕内　殊に道具も急拵らへ。筋違ひ外で六百も出せば、立派に買へるこの槍だ。

權藏　間違つた振りで、好い道具を取替へ行けといふ、大方主人が云ひつけたのかも知れぬ。

傳六　成る程、こりやアそれに違ひない。

ト官助を引附け

野郎め、お目鏡でおれが持つたあの槍を、間違つた振りで取替へた、云はゞうぬは泥坊だワ。主が云ひつけ泥坊させたか。うぬのやうな奴の手に觸れりやア、お道具が穢れるワ。馬鹿な野郎だ。

ト足蹴にする。

官助　こなたは先刻主人から、暇が出たと云はしつたが、どなたの道具を持つ役だ。

傳六　エ……イヤ、お主の暇は出たにもしろ、槍は卽ち下郎が主人、槍から暇を取りはしねえワ。

官助　そりや此方も同じ事。主人に譬へしその槍を、間違へたのは下郎が不念。拙者が體はどのやうになさるとも、いとひはせねど眼前に、主人をさみする今の詞。

主税　なんだ〳〵、目に角立てゝ、主人の噂を聞いて、腹が立つなら相手になれ。

ト官助無念のこなしあつて、氣を替へ

官助　どう致して拙者めが、お相手なぞとは思ひもよりませぬ。お道具を間違へました、御立腹でございますなら、下郎めをどのやうにも、御存分に遊ばされ、御料簡なされて、手前どもの槍を、お返しなされて下さりませうなれば、有り難うござります。

主税　成る程、涙をこぼし、それ程までに賴む事なら、隨分返してやらう。
傳六　その不肖には今爰で、立派な槍持ちにあやかる爲、おれ樣のお御足を
　　ト官助の肩へ足を踏みかける。
官助　サヽ、いかやうとも存分に
郷内　オヽ、望みならおいらまで、中間仲間の附合ひを
權藏　うぬが五體へしつかりと、覺えるやうに敎へてやらう。
　　ト三人寄つて官助を、さん〳〵に打擲する。
官助　サア、これ程になされたなら、どうぞ拙者がその槍を
主税　いかにも返してやらう。この後きつと間違はぬやうに、印しを附けて返してやらう。
　　ト足にて槍を踏み折り、官助の前へ拋り出す。官助悔りして
官助　ヤヽ、主人より預かりの、槍を眼前この通り。ホヽホイ。
皆々　ハテ、いゝざまだ。ハヽヽヽヽヽ。
しも　ほんにマア、あんまりなあなた方。
小平　コレ、又しても差出るか。

しも　それぢやというて。
小平　コレ、われが口を出すと、此方の懸り合ひになるワ。
主税　ハヽヽヽヽ。これ程に苛なまれても、刀の柄へ手を掛け得ぬ臆病者。主が主なら家來まで、見
　　下げ果てたる大腰抜け
しも　厄病神で敵とやら。
傳六　これで少つとは先刻の意趣が
主税　ハテ、いゝざまだ。
官助　あまりと云へば。
主税　大べら坊め。
　　ト蹴倒し
　　サア、來やれ。
　　ト主税先に、皆々附添ひ、時の鐘にて東の口へ入る。
しも　ほんにマア〳〵、側で見てさへ腹の立つ。あなた、さぞ口惜しうござりませう。體は痛みは致し
　　ませぬか。

トいろ〳〵介抱する。

小平　エヽ、この女は、いらざる所へ氣を揉む奴。よく〳〵惡い事があればこそ、あんなに酷い目にあつても、手出しもしないのサ。思へば〳〵、弱い侍ひだ。

しも　お前までが其やうに。

小平　ハテ、こんな者に構はずと、奥へ來い。

しも　それでもお前

小平　ハテ、來いといふに。

ト小平次、無理にお霜を引立て、奥へ入る。

官助　エヽ、口惜しいなァ。この身に望みあるゆゑに、チツと無念を堪へるも、親への孝行。孝を立つれば主人より、預かり置きし槍を折られ、此まゝ置けば主人へ不忠。未來の孝と現世の忠、こりや官助が一生懸命。ムウ。

ト思案の思ひ入れ。奥より伊太八出て來り

伊太　そこに居るは官助ではないか。まだ參らぬか。

ト官助、思ひ入れあつて

官助　旦那樣、私しにお暇を下さりませ。

伊太　ムウ、思ひ込んだその樣子。最前申した親の敵の、在所でも相知れたか。

官助　イエ、未來の親の敵より、差あたる主人の敵。

伊太　ヤ、なんと申す。

官助　サア、一生にない拙者が麁相。最前の侍ひと、互ひに夜の立ち際ゆゑ、お道具を取違へ、とつて返して詫び致せど、先刻の遺恨を含みまして、此方の槍をこの如く、土足にかけて打折りました槍は武士の表道具、即ち拙者の主人は槍、その槍を折られては、どうもあなたへ申し譯が立ちませぬ。これから直ぐに跡追ひかけ、槍の仕返しを仕りたうございます。

伊太　すりや、最前の遺恨を根に持ち……その侍ひは、上りか、下りか。

官助　藤澤宿へ今夜夜通し。

伊太　ムウ。違くは行くまい。某が

ト急いで行かうとするを、官助とめて

官助　アヽ、イヤ〳〵、あなた樣のお手を下ろさせましては、拙者の役目が立ちませぬ。どうぞ下郎にお暇を

伊太　その願ひ尤もなれど、其方は大事の親の敵、討たねばならぬその命。

官助　サア、その望みゆゑ今までに、ヂッと辛抱いたしましたが、こりや私し事、孝に替へるは即ち忠義。奉公いたせば、拙者が命は主人の物。運に叶つて仕負ふせなば、その後願うて親の敵。まづ差あたる現世の忠義。

伊太　成る程、その心なら、仕負ふせぬ事もあるまい。併し相手は多勢の事。其方は腕に覺えがあるか。

官助　エ……まだこの頃の武家奉公、人切る覺えはなけれども、死物狂ひに働きなば

伊太　ムウ、敵持つ身の性根試しは、これ屈竟のこの仕返し、其方に申しつくる。コリヤ、この刀は、中心は無銘の鈍刀なれど、鍔は鍛へし南蠻鐵、この鍔許にて向うの眉間、打ち碎きなば勝は取れる。コレ、必ず中心を當にするなよ。

ト刀を渡す。

官助　ハッ、お心あり氣なそのお詞、拙者も嗜むこの魂ひ。

伊太　ハテ、一手も知らぬ其方が、名作物を帶せしとて、役には立たぬ。莫耶が劍も持ち手に依る。身が與へたる鈍刀ものでも、鍔を便りに打ち込みなば、先を取るは案の内。其方が刀は身共へ渡せ。

官助　然らば暫時、あなたの刀を

ト兩人取替へ

伊太　必ずともに遲れぬやう、くれ〴〵もその鍔にて

官助　向うの眉間を打ち碎き

伊太　運きはまつて命を落すとも、其方が魂ひ預かりあれば、親の敵はこの刀にて、即ち身共が討つてやる。

官助　ハッ、それ承れば、心に殘る事もなく

伊太　心よく今の仕返し。

官助　命に替へて仕負ふせませう。

伊太　屍は泥土に晒すとも

官助　忠義の美名を

伊太　殘すが肝腎。

官助　旦那樣。

伊太　早く行け。

官助　ハッ。

ト時の鐘になり、官助一散に向うへ入る。伊太八、跡見送り

伊太　ハテ、小者には健氣な奴、一心凝つたる五體は鐵石。多勢なれども高の知れた、相手は愚人。よもやあれでは、ムウ。

ト思ひ入れ。奥より仁太郎、片肌脱ぎにて、團扇を持ちながら出で來り

仁太　ア、、蚤がくつて、さつぱり寢られぬ晩だ。イヤ、あの牛島どのは、おれを出し抜いて立つたと見える。これから鎌倉の、屋敷へ仕掛けてくれべい。

ト これを聞いて伊太八、仁太郎の腕の彫り物を見極め

伊太　合ひ宿のお侍ひは、こなたの連れ衆でござるか。

仁太　左樣サ、連れでもござりませぬが、用があつて、爰まで附いて來ました。先へ立ちましたさうな。

伊太　こなたは侍ひではないか。

仁太　イヽエ、わしは職人でござりやす。

伊太　すりや、いよ〳〵……ハテナア。

ト時の鐘になり、向うより宿役人、平塚宿と書いたる弓張りを持ち、宿帳を提げ、出て來り

役人　ハイ〳〵、お泊りでござりまするか。宿帳を附けまする。御家名は。

伊太　イヤ〳〵、此方は、いま家來を小田原へ先へ遣はし、手前も駕籠が來次第、後から出立いたす者

泊りではない。

役人　エヽ、左樣なら附けるには及びませぬ……モシ〳〵、其方のお若いの、お前は、お上りか、お下りか。

仁太　わしは下りで、所は鎌倉、大工の仁太郎といふ者だ。

ト伊太八思ひ入れ。

役人　アヽ、所は鎌倉、大工仁太郎。

ト帳へ記し

筆墨代四文

ト仁太郎、莫入れより錢を出してやる。

役人　旦那、早うお立ちなされませ。

ト役人、向うへ引返して入る。伊太八、仁太郎を尻目にかけ

伊太　所は鎌倉、職分は大工、蝮の仁太郎。

仁太　エ、旦那はよく御存じだね。

伊太　然らば、いよ〳〵其方が
仁太　アイ、腕の彫り物、これを異名に蝮の仁太郎といふ、大工のごろつきサ。
伊太　ムウ、自身の白狀、遁れはあるまい。
　　ト引附ける。仁太郎悔りして
仁太　ヤ、なんでわしをば
伊太　三祐ケ谷にて大工の棟梁、船越十右衛門を手にかけし大罪人。
仁太　ヤア、それ知られては
　　ト逃げ出すを、伊太八取つて押へ
伊太　うぬ、逃げるとて、逃がさうか。
　　ト下げ緒にて早縄をかける見得。禪のツトメにて、この道具廻る。
　　本舞臺、向う一面の川、小石などを書き割りし張り物、前側蛇籠、上の方に松の立ち樹、同じく吊り枝、下手に馬入川と書きし傍示杙、すべて河原の瀨の道具。禪のツトメにて道具納まる。
　　ト爰に主税、傳六、權藏、郷内、立ちかゝりゐるを、官助とめてゐる。松、又、六、八、以前の雲助

　　にて立ちかゝりゐる。
官助　サア、お侍ひ。最前の槍の返報。その仕返しに今爰で、主從一々首を並べる。覺悟きはめて出さつせえ。
主税　ハヽヽヽヽ、及ばぬうぬが腕立ては、飛んで灯に入る夏の蟲。石を抱いてこの淵へ、その身も共に馬入川、小砂利と共に流れてうせう。
官助　小癪な事を。主人が敎への南蠻鐵、おのれが眞向
　　ト拔討ちに主税に切りつける。額を押へて
主税　者ども、ソリヤ。
皆々　合點だ。
　　ト禪のツトメになり、大勢寄つて官助をしたゝかに打ちのめす。官助、打たれながら、無性に刀を振り廻す。ごつちやの立廻り、官助、手を負ひ、皆々を無暗に切り倒す。主税切つてかゝる。官助危ふき立廻りのうち、伊太八、仁太郎を縛り、これを引ッ立て、走り出て來り
伊太　官助々々。其方が親十右衛門を手にかけしは、それなる牛島主税に相違ない。親の敵だ。取逃がすな。

官助　さてこそ、おのれが

ト又立廻つてとめる。

主税　さういふ聲は先刻の侍ひ。この牛島を、なんで敵と

伊太　今さら包むは卑怯な奴。即ち捕へしおのれが相撲り、蝮の仁太郎殘らず白狀。

主税　ヤ、、、、、。

仁太　モシ〳〵、もう叶ひませぬ。殘らずわしが云つてしまつた。

主税　さう顯はれたら仕方がねえ。助太刀の侍ひもろとも、みな合點か。

皆々　心得ました。

ト これより鳴り物になり、多勢は伊太八に打つてかゝる。伊太八、皆々を切り散らす。仁太郎、縛られたまゝ逃げようとする。

伊太　官助、逃がすな〳〵。

ト 云ひながら大勢と切り結ぶ。官助、仁太郎を引寄せ、「親の敵」と無性に切る。仁太郎苦しみ、縛られしまゝの立廻り。伊太八、皆々を切り散らし、トゞ主税と立廻り、刀を打ち落し、襟髮を捕へて

サア官助、これぞ誠に親の敵、思ひのまゝに、扶れ〳〵。

官助　この年月の千辛萬苦も、皆おのれ等ゆゑ。思へば〳〵恨みの刀、覺えたか〳〵。

ト 腹へ突き立て、扶る。主税もがくを、伊太八押へつけてゐる。トゞ官助、主税に止めをさす。

伊太　出かした〳〵。

官助　これにて下郎が日頃の本望、達しましたも主人のお庇。太刀の一手も知らぬ下郎、鍔にて打てとのお教へは、踏み込まして腹切らせんとのお計らひ。天晴れ鍛へしこの業物。所詮深手のこの官助、侍ひの名聞には、この名作にて、まツこの通り。

ト 腹へ突き立てる。

伊太　ハテ、我が心を、よくも推察。あつたら惜しき若者なれど、望み叶うて切腹なすは、武士の本懷。

官助　ハヽア、斯くまで深き御仁心。弟の二人、幼名は七郎助、末の弟は六三郎、この者どもへお逢ひなさらば、拙者が親の敵討、本望遂けて相果てしと、お知らせなされて下さりませ。

伊太　すりや七郎助、六三郎、兄弟の者にめぐり逢ひなば、よしなに傳へん。心殘さず成佛せよ。

官助　ハッ、有り難い。

ト 向うバタ〳〵になり、小源次、權平、立廻りながら出て來り

小源　ヤヽ、こなたは伊太八さま。御主人樣の一大事。

伊太　ヤ、、尾上之助さまの大事とは。

權平　野郎め、觀念。

ト立廻つてキッとなり

小源　お聞きもあらん岩藤玄蕃、二の宮さまへ戀慕の意趣。主人尾上之助さま、殿中にて草履の笞。その遺恨やむ事なく、旦那樣には岩藤の、屋敷へ仕かけ討ち果さんと、お出でありしが下郎の鴈助内通を致せしゆゑ、却つて主人を押ッ取巻き、それゆゑ是非なく尾上之助さま、彼れが屋敷で御生害。

伊太　ヤ、、、、すりや岩藤は安穩にて、御主人には御生害とな。

小源　あなたばかりか祐信さま、寶の二品失ひし、その申し譯立ち難く、直さまその日に、祐信さまも御切腹。

伊太　ムウ、祐信さまといひ尾上之助さま、現在主人の生害も、敵は即ち岩藤玄蕃、なに安穩で置くべきか。

官助　驚き入つたる曾我家の騷動。下郎は未來の尾上之助さまへ、この由を御注進。

伊太　やがて御無念晴らさせんと、傳へよ官助。

小源　すりや岩藤を、伊太八さま。

伊太　古主の曾我に初平の、手形證文殘る上は、首尾よくこれを申し請け、御主人の暇を取り、その上にては岩藤め、鐵石の洞に隱るゝとも

官助　首尾よう本望。

トこの時後より鄕内は伊太八、權平は小源次へかゝるゆゑ、ちよつと立廻り。

早おさらば。

トがつくり落ち入る。伊太八、小源次、愁ひの思ひ入れ。伊太八、氣をかへ

伊太　おのれ、岩藤。

ト鄕内を投げる。木の頭。伊太八、向うを見込む。小源次、權平を引敷く。キザミにて、よろしく、

幕

（作者　松井幸三）

第一番目　五建目

鳴立澤庵室の場

役名――曾我十郎祐成。曾我五郎時致。母、滿江。大磯の虎御前。劍澤彈正左衛門。坊主、寒心。同、閑坊。鬼王新左衛門。若黨、友八。仲居、お高。同、お秀。幇間、鰐助。同、介八。遣

り手、お爪。下部、初平實ハ尾上伊太八。

本舞臺、正面、藁葺き二間の屋體、左右の庭先き卯の花の生垣、つくばいの手水鉢、鳴立澤と記した る石碑、いつもの所に枝折り戸、この外に虎ケ石あり、幕の内より寒心、頭巾、麻衣にて、旅僧の形。

閉坊、所化の形にて門口に立ちかゝり、お高、赤前垂れ、仲居の拵へにて、竹箒を持ち、庭の掃除を してゐる。すべて東海道鳴立澤の體。雨車、雷の音にて幕明く。

三人 桑原々々々。

ト雷に恐るゝ思ひ入れ。

寒心 雲雷鼓掣電降電澍大雨念彼觀音力。

閉坊 モシ、お師匠樣、また光りました。南無阿彌陀佛々々々々々々々々。

たか この雷さんの鳴るのに、心ない物貰ひ。出たのが無い、通らつしやい〳〵。

寒心 イヤモウ、通りますとも〳〵。愚僧は通りたうてなりませぬ。この雷では一足も行かれぬ。コレ 閉坊、爰の内を頼み、一宿いたさうではないか。

閉坊 それは何よりの思し召し。あの女中を頼み、一宿はどうでござりませう。

寒心 イカサマ、あの女中に一宿を頼んで見やれ。

閉坊 畏まりました。

ト思ひ入れあつて、狂言詞のやうになり

なう〳〵、それなる女性。この所は何と申す里にて候ふ。

たか 爰は鳴立澤の庵でござんすが、仔細あつて祐成さんがお借りなされたゆゑ、虎さんと一緒に、今 日爰へ餘方行きでございます。

寒心 さては音に聞えし鳴立澤。然らばこの所に、虎ケ石といふ石あつて、女の愛に深き者は輕く上が り、また女に緣遠き者は、持ち上げる事ならぬと聞き及ぶ。

閉坊 そいつは奇妙。あの女中が承知して、宿を貸すか、貸さぬか。この石を持ち上げて、見得を見る でござりませう。

ト門口にある石に手をかけ、上がらぬ思ひ入れあつて

なか〳〵私しには持ち上がりませぬ。

寒心 それは何とも悪い見得ぢやが、何にも致せ、一應申して見やれ。

閉坊 合點でございます。……コレ〳〵、お女中樣、我れらは旅の僧でござるが、この夕立に跡へも先

へも行き難し。願はくは一宿をお許し下さるまいか。

たか　お易い事ではござりますが、爰は宿屋ではござりませぬ。これより先に梅澤といふ立場がござんす。これをお頼みなされませ。

寒心　御尤もの事ながら、我れらは木の端か、炭の折れといふやうな坊主、色事の用心なら、氣遣ひはござりませぬ。

たか　イエ〳〵、今時の坊さんと夏の空は、油斷がならぬわいな。

兩人　すりや、どうあつても

たか　脇をお頼みなされませ。

ト門口をピッシャリ締める。

閉坊「おいとしやと奥へ行く。」

ト淨瑠璃を語る。此うちお高、奥へ入る。

寒心　何を申す。

閉坊　とはいへ、つれない。

寒心　コレ、野に臥し、餓に勞れ、難行苦行は佛の行ひ。

閉坊　それは釋尊、これは又

寒心　さしかゝつたるこの難儀、推して頼まば佛意に叶はず。

閉坊　しつこい坊主に旦那がない。

寒心　緣なき衆生は度し難し。雨の晴れ間に

兩人　片時も早く。

ト兩人花道の方へ行きにかゝる。この時、屋體の内にて

鬼王　なう〳〵御出家、お宿いたさう。オゝイ〳〵。

兩人　ヤ、何と云はつしやります。

ト つか〳〵と舞臺へ戻る。此こゝ簾巻きあげる。正面に打敷をかけ、一段高き上に逆澤瀉の鎧を飾り二つの位牌に香華を手向け、長押に長刀掛けてあり、この前に鬼王新左衞門、木綿やつし、風呂敷を前垂れにし、木鉢重箱を取散らし、柏の葉に包みし團子を拵へてゐる。兩人、この體を見て

寒心　おてまへは御庵主と見受けましたが、すりや、いよ〳〵我れ〳〵を

兩人　お泊めなされて下さるか。

鬼王　なにサ、わしは爰の庵主ではない。以前は大名の家老であつたが、いろ〳〵の不仕合せゆゑ、身

性をしまうて、主従一緒に、この鳴立澤に假住居。

寒心　佛前を見ますれば、二つの位牌に香華を手向けてござるが、御命日でござるか。

鬼王　左樣サ、あの位牌はわしが主人、今日が逮夜ゆゑ、團子を拵へます。

寒心　イカサマ、よしある人の果と見えて、床に飾りし鎧一領。

鬼王　長押に掛けしは先祖の讓り、錆びたれども長刀一振り。

閉坊　どうやら佐野の船橋に、似た山坊主の我れ〳〵に

鬼王　馳走は粟の飯ならぬ、柏に包みしこの團子。

閉坊　一つ下さい、お供の愚僧に。

ト重箱へ手をかける。

鬼王　コレ、まだ佛樣へ上げませぬ。

閉坊　ところを一つ。

トまた取りにかゝる。この時、雷烈しく鳴る。鬼王、雷に恐れ、思はず重箱を取落す。閉坊、團子を取りにかゝる。鬼王、寒心、支へる立廻り。トヾ、鬼王、閉坊を毆り倒す。寒心、鬼王、顏見合せ

兩人　ハ、、、、、。

ト思ひ入れ。

寒心　ドリヤ、御回向いたしませう。

ト雷の音になり、簾、バラ〳〵と下りて、この道具廻る。半分頃より百萬遍の鉦、越後甚句にて道具とまる。

本舞臺、三間の間、平舞臺、上の方、一間の障子屋體、下の方、竈、鍋釜、水瓶、その外勝手道具あり、椎の木の鉢植を三つ並べ、いつもの所に門口、よき所に封印したる大革文箱、酒肴を取散らし、爰にお高、お秀は仲居。お爪の遣り手。介八、鰐助、幇間にて、甚句を踊り、祐成、寢卷姿にて百萬遍の音頭を取り、文字野、禿にて、皆々と百萬遍の珠數を繰つてゐる。虎御前、床着の形にて、祐成に寄り添うてゐる。甚句、雷の音、責め念佛にて道具とまる。

皆々　桑原だんぶつ〳〵。

介八　明日は庄屋さんの稻苅りだ。やらかせ〳〵。

つめ　ヤレ〳〵、ひどい雷樣。どうやらちつと靜かになつたやうぢやが

ひで　虎さんは雷嫌ひゆゑ、百萬遍と甚句で、紛らして居りました。
たか　ひよつと太夫さんが、お癪でも起つたら、どうせうとお案じ申しました。
鰐助　雷もやんだ樣子、百萬遍のハネをつけようではござりませぬか。
祐成　コレ〳〵、念佛の音頭は祐成ぢやが、百萬遍のハネをつけるとは、どう致すのぢや。
介八　ハテ知れた事、念佛のハネには、願以主功德がお定まり。
虎　その願以主功德とやらは、色事ならばトゞのしまひ、祐成さんと譯ある仲には氣にかゝる。必ず其やうな事云うて下さんすな。
祐成　また愚痴な事を云やるか。其方とわしが仲は比翼連理、切つても切れぬ深いえにし。鎌倉と違ひこの所に假住居すれば、誰れに遠慮もない。いつまでもわしの側に
虎　わたしもその事を聞いたゆゑ、親方さんに願うて、見舞ひがてらに今日の餘所行き。
祐成　今に始めぬ其方の深切、可愛の者や〳〵。
　　ト思ひ入れ。皆々見て
皆々　イヨお二人樣、出來ました〳〵。
祐成　サア〳〵、これからが、酒ぢや〳〵。

皆々　一つお上がりなされませ。
　　ト合ひ方になり、酒盛りになる。此うち奥より鬼王、團子の重箱を持ち、出て來り
鬼王　これは〳〵、祐成さま、これにござりまするか。虎さまを始め、いづれも御苦勞に存じまする。
　　粗末な物ながら、お茶でも飲んで下さりませ。
　　ト重箱を出す。お爪見て
つめ　オヤ〳〵、わたしの好物なお萩かえ。モシ、鬼王さん、今日の法事はえ。
鬼王　これは、さる佛樣の逮夜、心ばかりを營みます。ゆるりと茶でもあがりませ。
鰐助　それにしても、人も知つたる曾我のお屋敷。どういふ事で、この鳴立澤におゐでゞござりまする。
祐成　成る程、其方衆には合點がゆくまい。曾我の十郎祐成とも云はるゝ者が、斯樣な所に假住居いたすも、親ども河津さま御最期の後は、兄弟二人、祐信さまの養子となつたれど、母滿江さま、祐信さまのお心に叶はず、不緣になつたばつかりに、我れ〳〵兄弟、鬼王もともに、曾我の屋敷を梵天國、それゆゑこの所に借家住居。なんと洒落たものであらうがな。
虎　その噂も聞いたれど、かゝりや繫がるわたしが悲しさ。祐信さまも聞へませぬ。一度養子となさ

れし御兄弟、何の譯かは知らねども、母様もろとも御離縁され、腹變りの御兄弟、禪司坊さまとやら、御出家ありしを呼び戻し、尾上之助さまと名を改め、祐信さまのお跡目にて

鬼王　曾我のお家は立つたれども、岩藤どの、佞姦にて、尾上之助さまは果敢ない御最期。祐信さまもその事をお聞きなされ、お腹を召されたお家の騒動。御勘當は受けたれど、一度主人と頼みしゆゑ、七日の逮夜も心ばかりサ。

ひで　それで法事の譯は知れたれども

つめ　なんでお萩を柏の葉へ、包むのでござんすえ。

鬼王　ハテ、こなた衆も知つてゐる、祐成さまと虎さまの、仲へ出來た千壽丸さま、今年は初の節句ゆゑ、法事のお萩やお團子を、柏の葉へ包んだは、佛事で初の節句をする、なんと好い思ひつきであらうがな。

つめ　流石は曾我の御家老樣。

鰐助　イヤハヤ、感心いたしました、

虎　一兩日顔も見ませぬが、千壽はどれに居りますえ。

鬼王　奥の別間で滿さまと……イヤ、滿江さまではない、お乳の人が、お守り申して居りまする。

祐成　コレ〳〵鬼王、乳母は食物が大事と聞けば、入用に構はず、鯛をたんと取つて遣はせ。

鬼王　滅法界な事を。

祐成　必ず儉約いたすな。今日は若が初の節句。皆の者へ祝儀を取らせい。

鬼王　モシ〳〵、祝儀どころが、晩に炊く米がござりませぬ。

祐成　コレ、氣のきかぬ事を申すな。早く金奉行へ申しつけ、祝儀を取らせい。

鬼王　それぢやと申して。

祐成　コレ、あたりへ心を

ト思ひ入れ。

鬼王　見まりました……ドリヤ、伊勢甚を呼びにやらうか。

ト雨車、遠雷の音、双盤の入つたる合ひ方になり、鬼玉奥へ入る。皆々捨ぜりふにて酒盛りになる。

此うち向うより伊太八、中間の形、赤合羽にて、竹笠をかむり、一升入りの油樽を持ち、思案の體にて出て來り、花道にて舞臺の樣子を見て

伊太　大分内が賑やかだが、ハヽア、今日は御主人方のお逮夜ゆゑ、百萬遍か。南無阿彌陀佛。

ト門口へ來り、内を見て

何の事だ。念佛と思ひの外、虎どのを始め廓の衆。ハテ、思ひがけない。

虎 お前は初平どの、お使ひに行かしやんしたかえ。

伊太 旦那様、只今戻りましてござりまする。

祐成 其方は大分遲く戻つたが、今まで何をして居つた。

伊太 油を買ひに參りましたが、久しくお拂ひをなされぬゆゑ、先で油を寄越しませぬ。

祐成 コレ、廓の者も聞いて居る。滅多な事を申すな。油の買ひがゝりは、金奉行へ申しつけ、殘らず拂つて遣はせ。

伊太 その金がある位なら、云ひ分はござりませぬ。まだ蚊帳の損料も

祐成 まだ吐かすか。主人の使ひに參り、何ゆゑ斯樣に遲刻いたした。おのれ、どこへか穴入りして居つたな。

伊太 イエ〳〵、全く以て。

祐成 申すなおのれ、どこのたほと、ちん〳〵鴨を致して居つた。

伊太 なか〳〵左樣な事ではござりませぬが、遲刻と仰しやれば、申し譯もない仕合せ。御意に叶はぬ下郎なら、是非がござりませぬ、何時なりともお暇を下さりませ。

祐成 イヤ〳〵、その儀は罷りならぬ。使ひに出せば遲く歸り、嘘ばかりつく奉公人。其やうな勤め方では、いよ〳〵目をかけて使はねば相成らぬ。

伊太 それは迷惑な儀でござります。下郎めも、何がな不埒を致し、首尾よくお暇が出たなれば、古主の無念を散ぜんと……イヤサ、最前のお役、遲刻の段は、眞平御免下さりませう。

虎 あのやうに云はんすからは、もう堪忍してあげなさんせ。

祐成 外ならぬ虎が挨拶ゆゑ、今日のところは差ゆるす。以後をきつと嗜み居らう。

伊太 すりや、御堪忍下さりますか。ハテ、有り難迷惑な。

ト鉢植を見て

見ますれば、お物好きなるこの鉢植、曾我のお家にとりましては、見るもいぶせき椎の木三本、こりや何方よりの御到來でござりまする。

虎 輕少ながらその品は、わたしが手土産、佛前へ。

伊太 ハテ、心有り氣なこの鉢植……イヤモウ、種がはりのこのお持たせ、河津さまを初めとして、未來でさぞやお喜びでござりませう。

虎 喜びといへば、お前は尾上之助さまの御家來であつたれど、何やら首尾がよろしうて、出世なさ

んしたと聞きましたが、それに引替へ、その姿は。

伊太 成る程、一度直參に取立てられ、旦那の家名を其まゝに、尾上伊太八と改名いたし、大小差す身になつたれど、誠にそれも一夜撿校、尾上之助さまの事を思へば、どうして侍ひになつて居られませう。一つ間違へば命道具。アヽ、恐ろしの侍ひ奉公。川だちは川とやらで、矢ッ張りもつさう飯が身に相應。それゆゑ、滿江さまや御兄弟方にお願ひ申し、元の李阿彌、下郎の奉公。

つめ そりやお前の好い思し召し。ハテ、なぜと云ひなさんせ、鎌倉第一のお羽利き、岩藤さまに楯をついたばつかりに、尾上之助さまは身の破滅。

たか これはしたり、御兄弟の祐さんの前で、滅多な事を。

祐成 その心配は無用々々。成る程、其方が申す通り、腹替りの兄弟なれど、尾上之助は不料簡。侍ひの道を守り、思ひがけない身の破滅。それを思へば此やうに、虎が側に居て世を樂しむは、喜見城ではあるまいか。

伊太 ハテナ、同じ古主といふ内にも、下郎が親は鶴賀甚内と申して、祐安さま御親子には、大恩を受けし者、その悴の私しゆゑ、何卒主人の妄執を、晴らさんにも、螳螂が斧。

祐成 そりや何を申す。母滿江を始め、曾我の屋敷を追ひ出され、赤の他人の祐信さま、今日の逮夜は

營めども、ゆかり無ければこの通り、廓の者を呼び寄せて、佛前にて魚肉の酒もり。其方も一つ飲む氣はないか。どうぢやく。

伊太 イヤく、私しは酒は不調法でございます。まして魚肉は古主の逮夜、七里けつぱいく。

祐成 ハテ、武張つた事を申す奴。ところを我れら一向に構はぬ。子までなした虎を側に、一日の樂しみは百年の齢ひ。親子揃うてめでたいく。コレ、千壽をこれへ、連れて參れく。

鬼王 ハイく、畏まりました。

ト合ひ方になり、奥より滿江、跳らへの形、抱子を懐へ入れ、鬼王閉坊附いて出て來り、赤子啼くを、鬼王見て

オヽ、おむづかるな。

閉坊 この子の啼くも、腹がへつたのでござらう。わしもどうやら腹の加減が

鬼王 モシく、若樣がおむづかりなら、お前のしなびを、しやぶらせてはどうでござります。

滿江 オヽ、いんの子く。

ト思ひ入れあつて

世の盛衰は是非もない。河津どの御存生にてあるなれば、初孫の初節句、相應の飾りもあるべき

に、甲斐なき婆が懐を、玉の臺に寢顔の和子。血筋とはいひながら、斯うまでよう似た

ト祐成を見て思ひ入れ。祐成、こなしあつて

祐成　サア〳〵、爰にも一人、石部屋のお金と申す、婆が一人見えられた。

ひで　そんならお前は、千壽さまのお乳母どのかえ。

たか　モシ〳〵、お針さん、そのお子を爰へ連れて來て、お前も一つおあがりでないか。

伊太　コレ〳〵、滅多な事を云はつしやりますな。あなたは曾我さまの

滿江　アヽコレ、わしは滿江とやらではない。和子樣のお守り役、お針も兼ねる乳母でござるわいなう。

虎　そんならお前は……ハテナア。賤しからざるお年寄り、その面ざしも祐さんに……もしや、あなたは

滿江　コレ〳〵嫁女……イヤサ、廓のお女中、わしは其やうな者ではござらぬ。滿江とやらなれば、なんで此やうな麁服を着て居りませう。矢ッ張り乳母でござるわいなう。

虎　ハテ、お人柄のお守り役、隨分千壽を、可愛がつて下さりませ……コレ、お爪どん、あの婆さんへ、お土產をあげて下さんせ。

つめ　ハイ〳〵、畏まりました。

ト巾着より金を一分出し、紙に包み

サア、婆アどん、太夫さんがお前へ御祝儀。

ト出す。滿江、件の金を取り、押戴き、思ひ入れあつて

滿江　これは〳〵、馴染でもないお女中樣、有り難う存じます。

ト思ひ入れ。伊太八、鬼王見て

伊太　モシ、あなたはそれを取らつしやりますか。

滿江　ハテ、人樣の志し、有り難う頂戴いたしますわいの。

伊太　移れば變る世の成行き、人知らぬこそ幸ひに

鬼王　それと云はれぬ身のほつれ、鳴立澤の夏ながら

虎　かをりゆかしく吹く風も、近き箱根の山おろし。

滿江　肌ばかりか心まで、寒さ身に浸む憂き世界。

祐成　これを思へば世の中に

鬼王　四百四病の病より

滿鬼　貧ほどつらい

祐成　オット待つたり、今時分其やうな事を申すは、夏過ぎの筍に食傷するやうなもの。何事も取措いて、わつさりと、酒にせい〳〵。

介八　それがよろしうございませう。併し、髮であがりましては、氣が變りますまい。

鰐助　虎さんと御同道で、廓で飲み直しはどうでございませう。

祐成　太夫を連れて跡から行く。鬼王も先へ參り、いつもの藝子どもを、合點か。

鬼王　ハイ〳〵、畏まりました……旦那からの御祝儀は、この鬼王が呑みこみました。

閉坊　わしにもどうぞお夜食を。

鬼王　萬事は胸に

皆々　有り難うございます。

伊太　御養父の逮夜も構はず、あなたは矢ッ張り大磯へ

祐成　オ、、行くとも〳〵。若いが二度は無いと申せば

滿江　人間不定芭蕉葉の、露と消えゆく赤澤を

鬼王　思ひ出せば、この椎の木、奥へ直して

虎　せめて佛間で

閉坊　愚僧が囘向を

滿江　そんなら嫁女。

虎　エ。

滿江　ドリヤ、看經しませうか。

ト唄になり、滿江は子を抱へ、跡より閉坊、椎の木を持つて奥へ入る。鬼王先に幇間仲居皆々向うへ入る。あと合ひ方になり、祐成、虎、伊太八殘る。

祐成　イヤモウ、大勢來をつたで、心遣ひの所爲かして、いかう肩が凝つて來たワ。アイタ、、、、。

伊太　左樣なら私しが、無作法ながら捻つてあげませうか。

祐成　それはよからう。賴む〳〵。

虎　其うちわたしや爪先へ、逆上を下げる傘灸。ほんに禿も行きやつた。わたしが手づから

ト艾を出して、ほこす。

伊太　祐成さまの張りつめた、お肩をちよつと、ドリヤ、揉んであげませうか。

ト相の山になり、伊太八は祐成の肩を揉む。虎は手づから爪先きへ灸をすゑる。この時向うより彈正、

着流し、一本差し、一文字の編笠にて、胡弓を磨つて出て來り、門口に彳む。伊太八思ひ入れあつて

これは幸ひ、虎さまの灸するゐに、門口へ來た物貰ひよ、祐成さまと花魁か、廓でしつぽり相の山末はめでたう御夫婦に

虎　女夫になつたその當座は、定めし花見遊山には、度々行くでござんせうが、取分けわたしや其うちに、芝居見に行きたうござんす。

伊太　成る程、芝居見物はよろしうござります。その時は私しもお供いたして

ト云ひながら揉む。

祐成　ア、、初平は、芝居が好きか。

伊太　イヤモウ、飯より好きでござりまする。歌舞伎芝居のうちでも、あの八百屋お七の狂言に、灸すゐの所へ、相の山が來まする。丁度此やうな仕組みでござりますが、まづ差づめ私しが、八百屋のお七、大和屋氣取りで此やうに……打てば打たるゝ櫓の太鼓。

ト聲色を使ふ思ひ入れ。

虎　ホ、、、、、、こりや面白うござんすわいなア。

伊太　イヤ、お前の前では、ちと厚かましいやつサ。ハ、、、、、……イヤモシ、祐成さま、世話狂言ではお七は貞女。御覽じませ、娘の身で櫓へ上り、太鼓を打ちましたが、打てば打たるゝ櫓の太鼓。虎さま、お前、打たつしやりますか。

虎　そりや打つわいな。親夫の爲ぢやもの。太鼓はおろか、何によらず打つわいなア。

ト思ひ入れ。

祐成　イヤ、そこを打たぬぢや。

虎　アノ、祐さんは。

祐成　決して打たぬ。そこを、打たぬが誠の貞女、なぜと云やれ、いたづらに我が戀を、叶へん爲に打ちたる太鼓、それゆゐにこそ捕へられ、親兄弟に嘆きをかけ、その身も遂に淺ましい。

ト思ひ入れあつて

それも娘の小心を、綴りし狂言。

伊太　イエ〳〵〳〵、そりや思し召しが違ひます。道を道に立てまするその時は、お七が太鼓はおろかな事、親の敵も打たねばならぬ身を以て、色に耽つて延び〳〵に。その年月も十八年、討たずにござるは武士でない。申さば御未練。

トこの時祐成ふり返り、顔見合せ

祐成　ヤ。

伊太　これはしたり、話しにかゝつてウカ〳〵と、お七に敵は無いもせぬものを。ハヽヽヽヽ。

トまぎらす思ひ入れ。

祐成　然らば祐成、あの太鼓を

伊太　サ、父御へ大孝……イヤ、太鼓を打つべき祐成さまも

虎　打たぬはこれも

ト思ひ入れあり

わたしも灸の約まりは、山を見るとはいふものゝ、してマアどこの

祐成　山は富士ケ根、裾野の露を

虎　エ。

祐成　消ゆる間近き

ト三人顔見合せ

ア、、浮世ぢやなア。

ト思ひ入れ。笑にて唄切れる。

伊太　折も折とて門口へ、耳かしましき相の山。

祐成　遣つて去なしやれ。

伊太　左様いたしませう。

トひねり錢か持ちゆき

袖乞ひどの、通つて下さい。

ト差出す。彈正取つて

彈正　これはお志し、有り難うござります。

ト内を窺ひ見て

して、この御別荘は、曾我の御老母滿江さまの

伊太　さうサ。それがどうした。

彈正　母御がこれにござるなら、兄弟二人も

ト思ひ入れあつて窺ふ。虎、こなしあつて

虎　ヤ、お前は爰へ。

ト立上がる事。

祐成　オヽ、其方、近附きか。

虎　イヽエ、存ぜぬ相の山。

彈正　錢は一錢二世かけし、虎が深間の

伊太　ヤ。

彈正　ハイ、忝うござります。

ト合ひ方、時の鐘になる。彈正、心を殘し、下手へ入る。跡に三人、各自思ひ入れあつて

祐成　イヤモウ、初平が按摩の所爲か、大きに肩が柔らいで來た。次手に久しぶりで

ト虎に戯むれる。

虎　これはしたり、また惡い事しなさんす。初平どのが見てぢやわいな。

祐成　アヽ、この者が居ては惡いか。然らば遠ざけませう。コリヤ〳〵、初平、われはどこぞに、用事は無いか〳〵。

伊太　イエ〳〵、爰もとには用事もございますが、外には決して用事はございませぬ。

祐成　ハテサテ、それは困つたものぢやが、左樣なら祐成が、用事を拵へてやらう。待ちやれ〳〵。

ト大き所より大きなる文箱を出し

コレ〳〵、われはこれを持參して、ちよつと使ひに行て參れ。

伊太　ヘイ〳〵、畏まりました。この文箱を持ちましてか。

祐成　サア〳〵、早う行け〳〵。

ト文箱を持つたる伊太八を、無理に門口へ突き出す。伊太八、外へ出て

伊太　ヘイ〳〵、參ります〳〵。參りは參りますが、して、御用先は、どちらでございます。

祐成　それを、わしが存じてよいものか。

伊太　イヤ、これは怪しからぬお使ひだ。

祐成　イカサマ、其方、先の當が欲しくば、アヽ、いつそてまへの、勝手のよい所へ持つて行てくれ。

伊太　モシ〳〵、左樣ではございませうが、私しが勝手な所へのお使ひは、御免なされませ。參りませぬ〳〵。

ト歸つてくる。

祐成　コリヤ〳〵初平、わりや切腹した尾上之助が、存生で居つたなら、詞は返すまいが、こりや古主の祐成ゆゑ、阿房に致すのか〳〵。

伊太　イエ〳〵、左様ではござりませぬが。
祐成　イヤ〳〵、わしが云ふ事を辨まへぬと、其方に暇をやらぬぞ、暇をやる事はならぬぞ〳〵。
伊太　左様なら、參ります〳〵。
ト文箱を持ち、不請々々に門口へ出る。虎、送つて出て
虎　お前、先の知れぬお使ひに行きなさんすのかえ。
伊太　左様サ、行かねばわしの願ひが叶ひませぬから。
虎　いつそお前、持つて行きなさんす文の宛名を見さんしたら、先のお方の
伊太　サア、さうも思ひますが、封が附いてござるから、滅多に切つては
祐成　封印切つても大事ない。行く心なら、われには許す。宛名をしかと。
伊太　さう仰しやれば、お許しうけて
ト封印を切り、蓋を明ける。中には件の草履の片足と、請け狀、外に祐成宛ての手紙出る。伊太八、取上げ見て
この書狀は親甚内、祐安さまへ有りつきし、奉公手形のその外に、祐成さまとばかりにて、送りし人の名も無き手紙、手跡は正しく祐信さまの

ト云はんとする。
祐成　アイヤ、曾我どのとは縁なき兄弟、赤の他人の祐成へ、祐信どのより送りしは、草履に添へしその書狀、養子たる尾上之助の、無念を晴らしくれよとある。其方への頼み。
伊太　すりや、私しへ祐信さま、いまはの際の送り狀。
祐成　添へたる手形は其方が親、悴を連れて我が父なる、祐安どのへ譜代の奉公。
伊太　請け人鬼王庄司左衛門、これを只今下されしは
祐成　河津の家の縁切つて、當時の主人へ忠義を立てい。
伊太　その御主人は尾上さま。
祐成　河津にあつては下郎の初平。
伊太　帶刀いたさば侍ひ分、また改めて尾上伊太八。
祐成　家名の尾上が存念を
伊太　晴らさせくれよと祐信さま
祐成　宛名も憚かる今際のお頼み、それゆゑ手形は
伊太　下し置かるゝ御恩のほど

祐成　縁は切れても一人の母親

伊太　すりや、御兄弟には

祐成　母に先立つ不孝の兄弟。

虎　その不孝には誰れがさす。みんなわたしの

ト思ひ入れあり

側で見る目の

伊太　アヽモシ、合せ物なら

虎　離るゝ習ひ。離れ〴〵の

伊太　片足の草履、御無念晴らさす時節も近く

祐成　尾上之助の恨みは其方が

虎　殊には曾我にて失なふ二品。

伊太　所持する岩藤、館へ首尾よく忍び入り

祐成　二品首尾よう

伊太　取返したるその上にて、主人の恨み

ときつとなる。

祐成　コリヤ……暇を遣はす。いづれへなりと。

伊太　すりや、お暇の出ました奴、お主が無ければ一本立ち、御恩のお暇、祐成さま。

祐成　初平。

伊太　おのれ岩藤。

ト向うへきつと思ひ入れ。

虎　エ。

祐成　勝手に致せ。

ト唄になり、伊太八思ひ入れあつて、件の品々を持ち、向うへ走り入る。

虎　何か仔細のありさうな、事とは見ても女子のわたし、殊に勤めのこの身の上。

祐成　身あがりしやつてわしへの心中、そこへ長居のあの初平、遠ざけた跡は其方と

ト虎へしなだれ寄る。

虎　ぢやというて、今にも廓の迎ひの者が

祐成　見えぬ其うち

虎　アヽモシ、わたしや今宵は
祐成　ハテ、野暮を云はずと
ト引寄せる。虎、振切つて逃げるとて、思はず髷落ちる。祐成見て
ヤヽ、其方の髪は
虎　ア、これは
トつかへる。祐成、髷を取上げ
祐成　人も知つたる祐成が、深間といふは虎御前、それに女郎の附け髪を
虎　アイ、是非なうわたしや
祐成　ヤ。
虎　髪切つたのも有やうは
祐成　すりや祐成と深う見せ、外に語らふ
虎　お客へ餘儀なう
祐成　して、その客は
虎　サ、そればかりは

ト思ひ入れあり
云はれぬわいなア。
トこなし。暮れ六つの鐘。向うバタ〳〵になり、鬼王引返し來り
鬼王　申し、祐成さま、只今この庵へ、大層な供廻り、合點のゆかぬは廓の者も、打交つて參ります。
アレ〳〵向うへ、あの提灯。
トいろ〳〵向うを見るうち、時の太鼓になり、向うより庵に木瓜の箱提灯二張り、中間先に、跡より鉄打ちの女乘り物一挺吊らせ、友八、菖蒲革の侍ひにて、挾み箱、長刀持ち。駕籠脇にはお高、お秀附添ひ、供廻り大勢附き、足早に出て來り
友八　虎御前さま
皆々　お迎ひ。
ト扣へる。虎、思ひ入れ。祐成、こなしあつて
祐成　ヤヽ、打ち物とても持たせし同勢、見れば廓の女子も交り
ひで　武家の迎ひの事ゆゑに、祐成さんの御不審も
たか　あらうと存じて廓のわたし等、その證人にこの附添ひ、こちの花魁、虎さまを

兩人　お渡しなされて下さりませ。

鬼王　イヤ〳〵〳〵、どうも合點がゆかねえ。これには、定めし深い樣子が

ト急いて云ふ。虎、思ひ入れあつて

虎　用意の品は。

皆々　ハアヽ。

虎　早う持ちや。

ト合ひ方になり、挾み箱より友八、襠裃を出し、女形兩人これを虎に着せる。祐成猶々心得ぬ思ひ入れにて、フツト心附き、笑を含んで

祐成　コレ、虎御前、迎ひの者の提灯は、庵に木瓜。アヽ、こりやア聞えた。こりや祐成の紋どころ。美々しく見せしは太夫の趣向か。

鬼王　こりやア出來ました〳〵。

友八　ヤア、趣向なぞとは緩怠至極。迎ひの身共は工藤の陪臣、御紋は卽ち、祐經さまより迎ひの爲。

鬼王　ハテナ、祐經さまより虎さまを、迎ひといふには、何ぞ仔細が

祐成　コレ〳〵、虎、其方は樣子を知つてゐやるか。

ト急いて云ふ。此うち柴垣の蔭にて

彈正　その仔細、拙者が詳しく云ひ聞かさう。

ト合ひ方になり、彈正、鉢かづら、上下大小に着替へ、ツカ〳〵と出て、祐成を突きのけ、思ひ入れ

祐成　心得ぬお待ひ、して、其許は。

彈正　最前門へ袖乞ひの、襤褸に隱せし相の山、誠は虎が實の兄、折よく妹は工藤の根引、その手蔓にて立身なし、今日より左衞門祐經の、近習を勤むる劍澤彈正、虎を伴ひ今日より、裾野の假屋へ誘ふ役目。祐成、膽が潰れたか。

祐成　ヤヽヽヽ、さては疾より祐成に、愛想つかせし虎御前。

鬼王　心變りもあるうちに、敵同士なる祐經に

祐成　根引さるゝを、ようマアこれまで

ト立ちかゝるを、彈正引附け

彈正　祐經さまのお部屋樣、虎に向つてその振舞ひ、指でもさしたら、ぶッ放すぞ。

祐成　でも、これまでに誓ひし詞。

ときつとなる。虎、思ひ入れあつて

虎　それもお前の心がら。現在父御の仇敵、それさへ討たぬ大腰抜け。よい客あらばと思ふうち、祐經さまが有り難い、身請けなされて廓の苦界、殊に流浪の兄上まで、お取立ての大恩に、ほだされしゆゑ身を任せ、お前と縁を切りやんす、證據は先刻に渡した切り髪。マア、さう思うて下さんせ。

祐成　すりやこれまでの誓ひも斷ち切り、この祐成を、工藤に見代へて。

虎　アイ、見代へまする。たかゞお前は部屋住みの、敵持つ身の素浪人、祐經さまは大々名、身請けさるればお妾、お部屋。見らるゝ通り鉄乘り物、殿の格式あやかつて、連れる時には千騎二千騎連れざる時も百騎二百騎。身貧なお方に心中立て、人に笑はれ暮らすより、出世するのがこりや當世。襟許女郎と云はれても、名も取る上に得もあり、それゆゑ虎は假屋へお伽、必ずこの上わたしが事、祐さん、構うておくれなえ。

ト嘲笑うて思ひ入れ。

祐成　エヽ、おのれはなア。

ト立ちかゝる。彈正隔て

彈正　これまで妹が勤めのうち、貧乏神のせぶり取り、紋日物日の身あがりまで、のめ〳〵とさせ居つたな。それゆゑ現在兄ながら、笄一本心よく、貸さぬもわれがあるゆゑだ。思へば〳〵

ト祐成を引附け、打擲して

イケ業晒しな十郎祐成。妹、わりやアこの體裁を見ても、悲しくは思はぬか。

虎　今まで深閨の男でも、緣を切つたる證據には、主と二人がその仲に、出來たあの子は男ゆゑ、殘して行くが世の大法。お前の手しほで育てゝやらんせ。

鬼王　エヽ、鬼とも蛇とも、譬へやうなき道知らず……エヽ、お前樣はなア〳〵。

彈正　祐成、貴樣は口惜しくないか。

祐成　決して存ぜぬ。アヽ、心任せに。

彈正　エヽ、張合ひのない、腰抜けめ。

ト突き放す。

虎　今も云つたる千壽丸、お前育てゝ、のち〳〵樂しみ。

彈正　それも要ちざる人の世話。其やうな事捨ておいて、彈正附添ひ富士ヶ根へ、妹を同道。家來、乘り物。

皆々　ハツ。

ト友八、乘り物を開く。虎、悠々と乘り移る。

彈正　直さま、これより。

虎　そんならわたしや

ト祐成の方へ思ひ入れあつて、彈正を見て

此まゝ爰を

ト乘り物舁きあげる。この時柴垣に窺ふ時致、編笠を脱ぎすて、ツカ〳〵と寄つて

時致　紋は庵に木瓜の……工藤の身寄りの

ト駕籠の棒をキッと留め、虎と顔見合せ

ヤ、駕籠の内には

虎　お前は弟御。

祐成　時致、來てか。

彈正　ヤ、ナニ時致が

時致　樣子はあれにて……憎くき虎が

ト寄るを、彈正はじめ皆々隔て、乘り物は花道の方へ行く。虎、顔を出し、思ひ入れあつて

虎　ア、思へば〳〵……有爲轉變の

祐成　定めぬ水の流れの習ひ。

虎　それもうつろふ飛鳥川、曇らぬ胸の鏡さへ

祐成　實に七人の子はなすとも

鬼王　あくまで腐つた

祐成　ハテ、逢ふは別れの

虎　はかないえにし。

ト皆々を見て

乘り物、やりや。

ト戸を閉す。

皆々　ハア、。

ト唄、時の鐘になり、皆々向うへ入る。三人殘る●

時致　心の腐つた虎御前、跡追ッかけて

ト走り行かうとする。

祐成　ヤレ待て時致、いはゞ浮れ女、さもありなん。虎は今よりフツツリと

時致　思ひ切る氣か、兄者人。

祐成　仇なる戀は思ひ切り、たゞ忘れぬは父の仇。

ト思ひ入れ。

時致　さすればこれまで放埒の、色に耽つて現在の

祐成　父の仇には、共に天を戴かぬ道理。されども世上を憚つて

鬼王　柔弱非力とこの年月

祐成　多くの人にうとまれしも

時致　すりや弟のわしにまで、明かさで包む御胸中。

祐成　父の仇討なさんずと、千々に心を碎くわやい。

時致　さすれば近きに庵を立出で

祐成　それも母人滿江さまに

時致　不興のお詫びを

ト思ひ入れ。この時奥にて幼な子の聲する。

鬼王　ありや千壽丸さま。

祐成　せわるも道理。母も見捨てゝ

時致　子を捨つる藪の虎御前。

祐成　ハテ、虎ぢやもの、いはゞ畜類。

時致　ヤ。

祐成　捨てゝ置きやいの。

ト思ひ入れ。唄、時の鐘にて道具鷹揚に廻る。

本舞臺、正面大和葺き、二間の屋體、此うち少し小高き所に逆澤瀉の鎧を飾り、二つの位牌を香華を手向け、長押に鞘をはめたる長刀をかけ、よき所に以前の椎の木の鉢植ゑ並べあり、庭先の左右、卯の花垣、つくばひの手水鉢、鳴立澤と記したる石の碑、いつもの所に枝折り戸、この外に虎ヶ石あり、すべて庵の體、時の鐘、合ひ方にて道具とまる。

ト以前の閉坊、木綿蒲團をかぶり、枕許の石火鉢へ蚊やりを仕掛け、あふりながら

閉坊　ヤレ〳〵、素敵な蚊だ。燻しを仕掛けにやア、寢る事はならぬわえ。

ト小言いひ〳〵蚊遣りをあふりゐる。時の鐘、合ひ方。向うより寒心先に友八出て來り、門口を窺ひ、寒心、小石を取つて合圖する。閉坊聞きつけ、門口へ來り

合圖の礫は……友八さまか。

友八　寒心の案内で、裏口へ廻つたが、怪しき樣子もあるか。

閉坊　心得ませぬは二人の奴等。いよ〳〵敵と左衞門さまを

友八　討つべき胸中相違ない。それゆゑ何か氣遣はしく、窺ひ來るこの友八。寒心、閉坊も樣子を窺ひ

閉坊　二人の奴等をぶッ放し

祐經さまの枕を高う

友八　閉坊とても油斷なく

寒心　懷劍用意し、人知れず

友八　油斷いたすな。

兩人　心得ました。

ト思ひ入れ。奥にて物音するゆゑ、友八と寒心は門口の柴垣へ、閉坊は蒲團をかむり、下の方へ隱れる。よき程に奥より時致走り出るを、滿江、撞木振りあげ追うて出る。跡より祐成支へ出てくる。屋

體の内よき所に屏風を引廻し、幼な子を寢かしある體。

滿江　ヤア、母が詞を用ひぬおのれ、箱根を下山しその上に、男なりせし五郎時致、誰れが許して目通り近う……母が答に

ト撞木振りあげる。祐成縋つてとめる。

時致　箱王出家とげざる上は、勘當御免なされませぬか。

滿江　それもおのれが心に問へ。實の親たる祐安どの、義理ある養父の祐信どのは、寶の紛失、それゆゑ切腹。緣は切れても後の親、それにおのれは、出家いたさぬ不孝者。目通り叶はぬ。祐成、早う追ひ出しや〳〵。

祐成　でも御勘氣をお詫びの時致

時致　出家いたさぬ其うちは、母のお怒り中々に……然らば時致、この場に於て、出家堅固に勤むる證據

ト刀を拔き、髻を拂ひ、目通りへ差置き

これにて何卒御勘當。

祐成　出かした弟、然らば兄もこの年月、虎に心を奪はれて、初めて女に誠なき、その心底を存じた祐

成、弟と共に

ト同じく髪を切つて

よもや、これでは

ト髷をよき程切つて差出す。

滿江 こりや二人とも髻拂うて、二人が二人出家して

祐成 過ぎ去り給ふ河津さまへ、この祐成は仕へる心底。

時致 後の親ぞと頼みたる、祐信さまの菩提の爲

滿江 出かした兄弟、それでこそ母が子よ。今こそ勘當

兩人 お免しあるか。

滿江 よう息才でコレ箱王、成長してくれたなア。

ト替つた合ひ方、時致に縋つて思ひ入れ。

時致 そのお詞を聞く上は、片時も早うこの場より

祐成 兄弟揃うて。

ト思ひ入れ。

滿江 して、二人は何れへ。

時致 養父の御墓、その上に、同じ血筋の尾上之助、廟所へ詣ずる我れ〳〵兩人。

滿江 優しき其方の志し、然らばこれにて出家せよ。母が手づから剃刀あて、位牌の前にて香剃りせん。

時致 すりや、この上に、この場にて

祐成 お心背かば、不孝の上塗り。

滿江 儻りならぬ心もあらば、コレ

ト あたりに飾りし二つの位牌を持ち來り

幽岸院殿學樹無等大居士、俗名河津の三郎祐安。いま一つは

ト思ひ入れあり

壽光院殿本阿普門大居士、俗名曾我太郎祐信……二人の親の、菩提の爲。

時致 出家堅固のこの箱王、二つの位牌の御前に於て

祐成 母の手づから

滿江 我が子の剃髪……ア、これも浮世の

ト思ひ入れあつて

ドリヤ、香剃刀を

ト獨吟になり、盥に水を汲み入れ、これを持ち來り、よき所へ差置く。滿江、剃刀と砥石を出し、手合せする。時致、手燭を取つて盥の側に置き、前髪をしめす。滿江、剃刀を持ち、立ちかゝつて、前髪を段々剃り落す思ひ入れ。時致の顏、盥の水にうつるを見て思ひ入れ。此うち唄一くさり切れる。

滿江、こなしあつて

アレ〳〵、水に寫りし面影は

兩人 親子三人あり〳〵と

滿江 いやとよ、寫りし影は四人の水の面。

時致 してこの外に一人の、影は何人

祐成 何者の

ト思ひ入れ。

滿江 水に寫るは河津どの。いま時致の面影は、過ぎ去り給ふ祐安どのに、これ程までも

ト涙ぐむ。

時致 すりや、時致が面差は、祐安さまに

ト盥に取りつき、よく〳〵見て

おなつかしうござりまする。

ト思ひ入れ。

滿江 主は一人、影は二人の親と子が、それも今より佛の御弟子、卽身成佛。

ト又も剃刀をあてんとする。祐成、早手く盥を打ち返す。この水、手燭にかゝり、灯消える。

ヤヽ、まだ剃刀も

祐成 殘りしうちに思はざる、覆水盆に返らぬ繰り言。闇夜となれば母上に、祐成代つて剃刀を

滿江 然らば母はあたりなる、夫の恨み三本の、椎の木の枝切つて、蚊遣りとなして

時致 すりや、若葉なる三本の

滿江 その三本の三ケの莊、椎の茂みが我が夫の、御運の末の時雨月、それゆゑ爰で

兩人 切つて蚊遣りと

滿江 オヽ、さうぢや。

トまた唄になり、滿江、肌脫ぎかけ、探り〳〵、かけたる長刀を取つて目釘を拔き、白刃を取つて、

寢入りゐる幼な子を抱きあげ、よき所へ來る。この時、閉坊窺ひ寄つて、時致に切りつける。ちよつと立廻つて、刃物を奪ひ取り、見事に閉坊を切り倒す。「ウン」と倒れる。この途端に滿江、長刀にて、赤子の胸先を貫かんとする事よろしく、赤子の聲。兩人聞き耳立て、思ひ入れ、爰にて唄切れる。

祐成　今のは慥か幼な子の

滿江　蟲がおびやす泣き聲も……また物音も

ト怪しむ。

時致　アイヤ、別に仔細も

ト死骸を蹴飛ばし

泣き出す幼な子、慥かに蟲の

滿江　これが泣かずに

ト白刃にて幼な子を突く。一聲あげる。その口押へて

す、、いんの子〳〵。

ト泣き聲にていぶりつける。また唄になり、時致は閉坊の死骸へ蒲團をかけ、隱す思ひ入れ。祐成は時致に、爰を逃げてト仕方にて敎へる。滿江、幼な子の血を、あたりなるひさくを取つて此うちに移す事。祐成時致は懷より書置を出し、二つの位牌の前に持ちゆき、椎の木の枝に兩人とも結びつけ、暗がりにて暇乞ひの思ひ入れ。よろしく唄切れる。

兩人　母上樣、最早お暇仕ります。

ト行かうとする。

滿江　もう行きやるか。せめてこれにて剃髮の、あの箱王が出家なり。

時致　サ、それは

トつかへる。祐成、思ひ入れあつて、閉坊の死骸を捕へ

祐成　母者人。お手ざはりにて出家堅固の、弟が姿を

滿江　それが何より

ト祐成、閉坊の頭を滿江に探らせる。

ヤ、、誠に出家のこの姿。これにて母も安堵しました。その出家せし兄弟へ

ト鎧櫃の中より蝶千鳥の直垂二つを取出し、こなしあつて

尼ともならばと、たしなむ三衣は二人へ形見……イヤ、肩にかけさす出家の門出。

兩人　然らばこれより御寺へ持參し

滿江　沙門の門出。

ト思ひ入れあつて

東南西北の敵をたやすく

ト諷ひながら、白刃にて乳の下を突き、こなしあつて

亡ぼせり。

ト此うち兩人聞き耳立て

時致　御經にあらぬ諧のお聲も

祐成　狂ふ調子は

ト立ちよるを

滿江　コレ。

ト側なる團扇にてあたりを打つ。この風あたつて蚊遣り火燃え立ち、三人顔見合せ

時致　ヤ、、何ゆゑの御生害。

祐成　殊に幼な子、泣き聲とめしは

滿江　門出の血祭り。

兩人　ヤ、、さては可哀や

滿江　健氣な二人へ送りし三衣は

祐成　千鳥小蝶を染めあげし

時致　物好きありしも、それと云はずに

祐成　狩場へ赴むく覺悟の書置、位牌の前へ殘し置き

滿江　二人の曠れ着を渡せしも

祐成　殊に千壽をお手討に、その上又も母上の

時致　自殺も正しく兄弟に、氣遣ひさせじと思し召す

祐成　母上のお心なるか。

滿江　さとくも察せし二人の者。母も孫めもあの世の旅路。それも河津と曾我どのを、夫に持ちし武士の妻、いはゞ二人へ引添うて、夫の敵と思へども、女子のこの身、老の果て。孫と妾が血汐を湛へ、二人が五臟に納めたなら、四人連れ立ち敵討ち。コレ、助太刀させて、たもいなう。

時致　御尤もなるそのお詞、これにて血汐を頂戴なし

祐成　同氣同性合體なさば、母の願ひも

トひさくの血汐をのんで差出す。時致のんで

時致　これにて親子四人の門出。

満江　世に亡き二人の御位牌へ、回向なすべき満江は、子に引かされてこの自殺。祐安どのへは義理立てど、祐信どのへ申し譯、お赦しなされて下さりませ。

ト思ひ入れあつて

さるにても時致は、誰れにか劣らん大力無双。案じらるゝは非力の祐成。

祐成　イヤ、お氣遣ひ下さりますな。弟が大力その上に、兄も力量勝れたる、噂あつては敵に聞え、迂濶に心許すまじと、柔弱非力と見せたれども

時致　兄者人には計略にて。

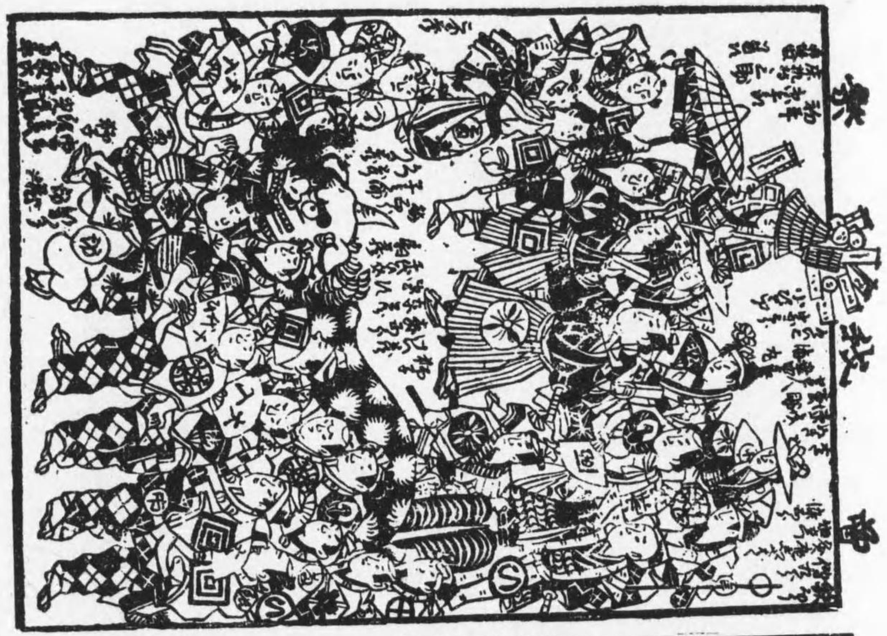
満江　母も出家を望みしは、敵に油斷させんが爲、勇氣を隱せし

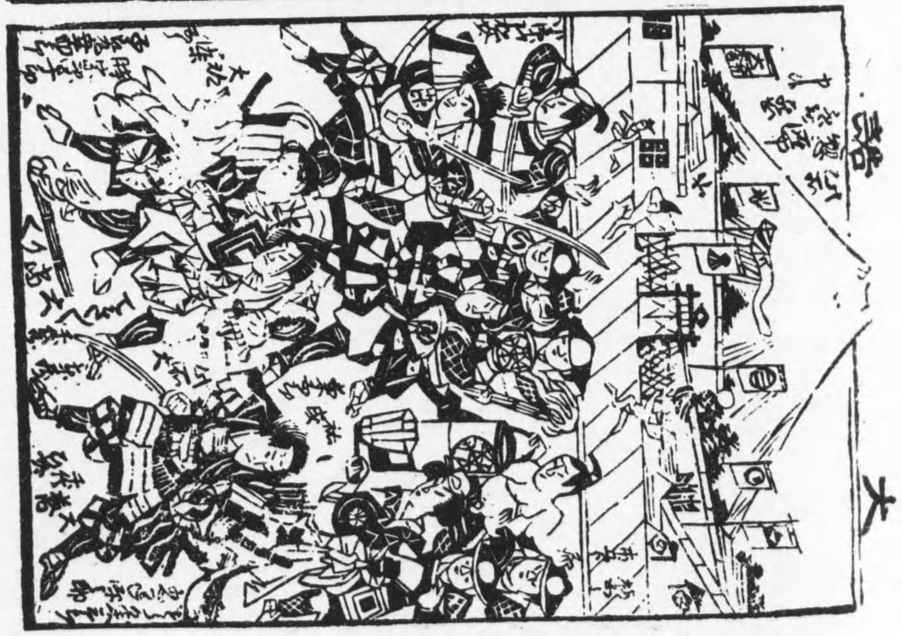
祐成　非力のこの身も、これより狩場へ

時致　兄弟揃うて敵討ち。

満江　門出祝うて、とく〳〵兩人。

時致　でも母上の御有樣、見捨てゝこれが





ト思ひ入れ。門口に窺ひゐたる寒心、友八、入り

兩人 さてこそ工藤を覘ふ兩人。

ト寒心は時致にかゝるを引敷く。友八は祐成にかゝるを、在あふ虎ケ石を取つて頭を打つ。これにて友八、頭を五體に打ちこまるゝ仕掛け。

祐成 おのれ祐經。

滿江 天晴れ勇力。

時致 見事。

祐成 へゝ……心地よやなア。

ト友八を押へしまゝにて撞と座すを木の頭。滿江落ち入る。祐成見て、駈けよらんとして、氣をかへ虎ケ石をグツと踏む。これにて石は段々と大地に沈む體。よろしく、ひやうし、　幕

（作者　鶴屋南北）

第一番目　大詰

夜討曾我本望の場

役名——曾我十郎祐成。曾我五郎時致。仁田四郎忠常。御所五郎丸重宗。加藤大部。尾上之助

下郎、小源次。大磯の虎御前。

本舞臺、正面狩場の木戸口、左右柵矢來。突棒又は刺叉を立てかけ、篝を焚き、爰に三婦六、彌藏、野吉、胴丸の上へ柿の子持ち筋の袖無し羽織にて勢子のこしらへ、德利酒を呑みゐる。山颪し、捨て鐘にて幕明く。

彌藏　サア〳〵、三婦六、ついでくれ〳〵。

三婦　コレ〳〵、彌藏、われば かり呑むが、ちつとは外へも、廻せ〳〵。

野吉　さうだ〳〵、ちつとはおいらにも呑ませろ。うぬばかりとち喰ふは

彌藏　コレ、うぬばかりとは何の事だ。喰ひたくば、ソレ喰へ。

ト茶碗を打ちつける。

野吉　この野郎め、なぜ投打ちをしやアがるのだ。

三婦　ハテ、あんな奴に構ふものではない。捨てゝ置け〳〵。

彌藏　イヤ、おとなしくしねえぞ。しなかかつたら、どうする〳〵。

ト野吉へかゝる。三婦六押へる。三人よろしく捨ぜりふにて立廻り。時の太鼓になり、向うより勢子

三人、提灯を持ち、出てくる。跡より大部、胴丸、むかはぎ、刺貫、附け太刀、重れ草鞋、大仰なる狩倉の形。陣笠の勢子三人、割り竹を持つて出て來り、この體を見て

大部　ヤイ〳〵、狩場口にて尾籠の爭ひ。靜まらぬか〳〵。

ト三人は下に扣へ

彌藏　光員さまには狩場の見廻り

皆々　御苦勞に存じまする。

大部　分けて今宵は、雨を催ふすあの雲立ち。篝しめらば通路の妨げ。油斷いたさず出入りを改め、必ず番を怠るな。

皆々　心得ました。

大部　わいらは殘つて、代る〴〵に番をいたせ。

勢子　ハツ。

大部　者ども、參れ。

ト時の太鼓になり、大部先に人數入る。三人の外に、勢子一人殘る。

三婦　サア〳〵、これから篝を焚きつけ

彌藏　木戸を固めて

ト籌を焚きつける。一人の勢子は木戸の方を窺ひ、彌藏が持つた拍子木を引ッたくる。これにて驚き

ヤ、われが代るか。

ト寄るを搏はず、ありあふ番手桶にて水を焚火へ打ちかける。籌消える。

三人　ヤ、なんで籌を

ト寄るを、ちよつと當てる。この時、陣笠落ちる。この勢子は小源次にて、三人見事にかへる。小源次キッと思ひ入れ。雨車にて、この道具廻る。

本舞臺、正面、緣側附きの祐經狩屋、軒端には庵に木瓜の幕を張り、雨戸締め切り、上の方に誂らへの手水鉢、杉の大樹、好みの道具に納まる。

ト直ぐに唄淨瑠璃。

〽既に建久四つの年、空定めなき五月雨の、思ひの胸も晴れ間なき、その名雲井の時鳥。

ト切れる。直ぐに

〽名殘りおしかの狩衣〳〵。たつかや限りなるらん。

ト謠切れる。大小、早鼓、誂らへの鳴り物になり、向うより祐成、懸け烏帽子、素袍、好みの形、藁簑、竹笠、松明を持ち出て、直ぐに舞臺へ來る。早笛、誂らへの鳴り物になり、時致、好みの形、松明を持ち、一散に出て舞臺へ來り、キッとなる。衿の合ひ方に寸

祐成　實にや三千年に一度花咲き實るなる、彼の西王母が園の桃。優曇華よりも珍らしや。

時致　その優曇華を拜みて手折れといふなれば、それに譬ふる敵左衞門、一二の太刀の拜み討、急がせ給へ十郎どの。

祐成　逸るは理り、さりながら、女數多あるべきぞ。太刀の振り廻しに心得候へ。後日の沙汰も憚りあり。

時致　云ふにや及び給ふべき。いざ諸ともに

ト祐成、時致の顏を見て

祐成　いかに時致、今宵最期と極めし上は、なか〳〵に心安けれど、年月離れぬ兄弟の、あかぬ顏見る事も、これがこの世の別れぞや。

ト時致もこなしあつて、松明をかゝげ、祐成の顏を見て

時致　敵に逢うては刹那の隙もあるまじければ、これこそ最期の見参よ。兄と見奉らんも今ばかりなる思ひなれ。我れも乙にて血のあまり、これ母方のいつくしみ。御身は正に嫡子にて、父の形見の御顔。

祐成　五つや三つの頃なれば、覺えぬながら子は親に、似るなるものを松山の

時致　はしをり鏡と聞くならは、在すが如き親の面影。

祐成　今見る心地、弟

時致　兄者人十郎どの。

ト兩人、手を取りかはし

兩人　おなつかしうござります。

ト祐成思ひ入れあつて

祐成　無用の涙に時移る。畠山が寸志の和歌、色づく山のもみぢ葉は、その夕暮れを待ちて見よかし、待ち設けたる今日今宵。

時致　十八年の天津風、いま吹き返す時を得て、御身も我れも母上より、下し賜はる蝶千鳥、この狩衣が彼の世へ贐れ着。

祐成　末世に殘す名こそ惜しけれ。

時致　勇み進んで

兩人　今宵ぞ本望。

ときつとなる。この時、狩屋の上の方の雨戸、さつと明く。兩人驚き、持つたる松明を捨て、灯を踏み消し、下手に窺ふ。件の狩屋より虎、しごき帶、寢卷の形にて、手燭を持ち出てくる。此うち好みの合ひ方、時の鐘。件の松明、消え殘りし體にて、少し燃えてゐる。虎、手水鉢にて手を洗はんとして、消え殘りし松明に目を附け、思ひ入れ。

虎　篝火ならぬ二つの松の火……もしやお二人

ト さてはト思ひ入れあつて

塒さまよふ浦千鳥、浪にゆらるゝ沖津船、しるべの山は此方ぞや。そことも知れぬ夜の浪、風を便りの湊入り、心附かずや闇の空。

ト この時、空にて時鳥の聲。

名乘りかけたる冥土の鳥。啼く音血を吐くト こなしあつて鼻紙をくはへ、手燭を持ち、狩屋の内へ、案内の心にて、心を殘し、涙を隱し、狩屋

の内へ入る。祐成時致囁き合ひ、窺ひ〳〵忍び込む。時の鐘になり、向うより軍兵頭に勢子二人附っき、拍子木を持ち、出てくる。上手より同じく軍兵頭に勢子二人附添ひ、出て來り、兩方行きあひ

軍甲　これはお役目御苦勞に存じまする。

軍乙　最早深更に及びましたれば、猶更大切でござる。

軍甲　左やう〳〵、その上先刻も怪しき者ども、紛れ込みし樣子。

軍乙　御領の狩屋が大事でござるな。

軍甲　オヽ、狩屋と申せば、工藤どの、俄に今宵狩屋を取り替へしは、何か仔細のござる儀を相見えまする。

軍乙　我れ〳〵も不審に存じます。

ト雨戸明きしを見附け

御覽なされ。雨戸が引明けてござるワ。

軍甲　イカサマ、慥かに大磯喜瀨川なぞの、遊君が仕業と相見えまする。引立てゝ置かつしやい。

勢子　心得ました。

ト雨戸を閉める。

軍乙　然らばこれにてお別れ申す。

軍甲　御大儀でござる。

ト双方目禮して兩方へ別れ入る。時の鐘、好みの合ひ方。好き程に太刀音して、狩屋の内、バタ〳〵になり、これにて一時に正面雨戸を、バラ〳〵と蹴放し、内より祐成、拔刀にて、書置を咬へし虎が首を持ち、時致、同じく拔刀にて、御敎書を咬へし祐經が首を抱へ出て、舞臺へ下り、兩人思ひ入れあつて

祐成　時致なるか。

時致　十郎どの、多年の本望。されども祐經が口に咬へし、三ケの莊のこの御敎書、兄弟二人に討たれし上、返し與へん健氣な覺悟。

祐成　殊に我れを騙かりし、憎くき女と思ひしも、敵へ手引きの苦肉の手段、女ながらも健氣な心底。

時致　虎は死して皮をとゞむと、死後の貞節。人は死して名を殘すと、これ我れ〳〵が本懷にて、即ち取り得し御敎書は、末の弟の尾上之助へ送りやらんも先達て、死したる上は、ハテ何者にか。

トこの時、小源次窺ひ出て

小源　それこそ幸ひ下郎めが、尾上の下郎初平方へ。

時致　汝は宇佐美が下郎の小源次。

祐成　然らば其方持參して、我れ〳〵二人が本望を、達せし事を語り聞かせよ。

時致　彼れが手より、尾上の身寄りへ。

ト御教書を渡す。

小源　慥かに下郎が持參せん。

祐成　いそふれ小源次。

時致　はや行け。

小源　ハアヽ。

ト早めドン〳〵にて、小源次、書き物を持ち、一散に向うへ入る。兩人見送り

時致　御教書渡し遣はす上は

祐成　この世に思ひ置く事なし。今ぞ最期の門出の杯。

時致　兄弟別れの

祐成　その杯は

ト思ひ入れ。篠入りの合ひ方になり、祐成、烏帽子を取つて、狩屋の軒より滴る雨雫を烏帽子に受けせめて軒端の雨雫、受けて弟へ水杯。

ト一口飲んで差出す。時致取つて飲み

時致　いかに十郎どの、今こそ最期の際なれば、心靜かに互ひの念誦。

祐成　實に尤もなるその詞。御身はこれまで暫くも、箱根にあつて諸經も覺え、その功力もあるべけれ我れは殊更、末來の苦患も思はるゝ。いざ〳〵これにて諸ともに

ト兩人手を合はし、よろしくあつて

時致　臨終の佛たち、我れ〳〵過去の宿業にや、一念の心意に依り、敵味方と隔たるなり。

祐成　懺悔の力にもろ〳〵の、罪障今や消滅し

時致　因果の輪廻を盡せし上は、一つ蓮の緣となし

祐成　父のましますその御國へ

時致　迎へ取らせてたび給へ。

兩人　南無阿彌陀佛。

ト兩人合掌し、愁ひのこなし。この時狩屋の内より大藤内、丸裸の形、行燈を提げ、出て來り、兩

人を見て、そろ〳〵と下へ下り

大藤　ヤア、さてはわいらは曾我兄弟、祐經どのを討つたる樣子。御領の狩屋へ。

ト行きかゝるを、時致、手早く大藤内の首を捕へ

時致　あの世へ先がけ。

祐成　この世の暇。

トよろしく時致、大藤内を見事に切り、こなしあつて

時致『十づゝに、當の敵を討ちし跡、四十の男子四つになりけり』。

祐成　よくも仕つたり。今際の秀歌、時致集とも召されなん。

ト兩人顏見合せ

兩人　ムハヽヽヽヽヽ。

時致　いでこの上は、思ひ置く事更に無し。兄弟名乘つて潔く

祐成　然らば名乘つて討たれんもの。

ト狩屋へ向ひ

遠からん人は音にも聞け、近くば寄つて目にも見よ。伊豆の國の住人、伊東次郎祐親が孫、曾我

の十郎祐成。

時致　同じく五郎時致が、君の狩屋の御前にて

祐成　一家の工藤左衞門の尉、祐經を討取つたり。

時致　我れと思はん人々は、討ちとめて高名せよや。

兩人　兄弟相手に、なり申さん。

ト高聲に呼ばる。これにてドシ〳〵、早めになり、勢子大勢と、大部出て來り

大部　さてこそ兄弟これにあり。

皆々　討取れ〳〵。

ト一度に拔きつれて討つてかゝる。祐成、大部を相手に立廻りながら下手へ入る。殘りの人數は時致にかゝり、よろしく誂らへの鳴り物になり、時致、皆々を相手に大立廻りよろしく、この人數を下座へ追ひ込む。この時、雨車、時の鐘にて、知らせあつて舞臺へ黑幕を振り落す。

直ぐに山颪し、時の鐘、ゴン〳〵なり、小源次は軍兵二人と立廻りながら出て來り、よろしくあつて

軍一　最前より窺ふところ、正しくおのれは尾上之助が小者。

軍二　今宵夜討ちの兄弟に、ゆかりの奴等であらうがな。
小源　オヽ、推量の上は隠すに及ばぬ。尾上之助さまの家來小源次、大切の役目蒙むりし上は、妨げな
さば容赦は無いぞ。
軍一　それなれば猶以て
軍二　見遁しならねえ
兩人　覺悟なせ。
小源　小癪な雜人、手には足らねど當の敵。
軍一　面倒な。ぬかり召さるな。
軍二　野郎め、觀念。
ト兩人打つてかゝる。いろ〳〵立廻りあつて、兩人をポン〳〵と切り
小源　片時も早く、初平どのへ。
ト一散に向うへ入る。この時、下座の方、物音して
○　ヤア〳〵何れも、狩場へ夜討の入つたるぞ。御油斷あるな。出合へ〳〵。
ト高聲に呼び立てる。直ぐに「アリヤ〳〵」の聲、早太鼓、ドン〳〵にて、下座より、立烏帽子、手

甲、いづれも裸身へ具足を附けし體、うろたへ立騒ぎながら、松明など振り立て出で來り
皆々　夜討が參つた〳〵。
同　御油斷なさるな。
同　夜討ぢや〳〵。
ト矢張りドン〳〵、「アリヤ〳〵」の聲、この人數入り亂れて上下へ入る。直ぐに黒幕切つて落す。
本舞臺、向う黑幕、よき所に狩屋の軒口を見せ、陣幕張つてあり、前通り誂らへの柴組み、右の道具
に納まる。
ト、矢張り右の鳴り物にて、下座より祐成、大童の體にて出て、ホツと思ひ入れ。下座より三階惣出
の人數、軍兵にて出て祐成にかゝる。祐成、皆々を相手に立廻り、追ひ散らす。この時袖より大部出
かゝり、祐成と立廻りあつて、大部を見事に首討ち落す。
祐成　最期は兄弟諸ともにと、約せし上は、いで時致に
ト行かんとする。この時上手より仁田四郎忠常、凛々しき好みの形にて走り出て、祐成をキツと留め
て

露光量違いの為重複撮影

忠常　狩屋を騒がす曾我兄弟、いま某が討取りくれん。覺悟いたせよ、曾我祐成。

祐成　ヤア、烏許がましきその一言。側杖させん。

ト切つてゆく。立廻りあつて祐成手を負ふ事。忠常キッと見て

忠常　深手なるぞ十郎祐成、とく〳〵生害仕れ。

祐成　ナニ小ざかしや。して其方は何者なるぞ。

忠常　問はれて名乘る我が姓名。相手に不足とも思ふらん、伊豆の國の住人、仁田の四郎忠常なるワ。

祐成　ヤヽヽヽ、さては御身が忠常どの、望むところの相手なり。イザ立寄つて、首刎ねられよ。

忠常　すりや忠常に、討たれ召さるゝ心底よな。

祐成　首取らるゝは今際の本望。イザ〳〵介錯頼み入る。

忠常　然らば鈍き手の内にて、

祐成　苦痛を助けよ、忠常どの。

忠常　頼みに任せ、貴殿の介錯。

祐成　いで〳〵頭を

忠常　ア、忠孝全き

露光量違いの為重複撮影

忠常　狩屋を驚かす曾我兄弟、いま某が討取りくれん。覺悟いたせよ、曾我祐成。

祐成　ヤア、烏許がましさその一言。側杖させん。

ト切つてゆく。立廻りあつて祐成手を負ふ事。忠常キッと見て

忠常　深手なるぞ十郎祐成、とく〳〵生害仕れ。

祐成　ナニ小ざかしや。して其方は何者なるぞ。

忠常　問はれて名乗る我が姓名。相手に不足とも思ふらん、伊豆の國の住人、仁田の四郎忠常なるワ。

祐成　ヤ、、、、、、さては御身が忠常どの、望むところの相手なり。イザ立寄つて、首刎ねふれよ。

忠常　すりや忠常に、討たれ召さるゝ心底よな。

祐成　首取らるゝは今際の本望。イザ〳〵介錯頼み入る。

忠常　然らば鈍き手の内にて、

祐成　苦痛を助けよ、忠常どの。

忠常　頼みに任せ、貴殿の介錯。

祐成　いで〳〵頭を

忠常　ア、忠孝全き

ト思ひ入れ。

祐成　猶豫めさるは後れしか。

忠常　臨終稱念。

ト白刃を振り上げる。祐成は腹へ突き立て、首さしのべて思ひ入れ。忠常、切らんとせしが、氣後れしてホロリとする。この時下座にて「アリヤ〳〵」の聲、ドン〳〵早目に打つ。忠常、氣を替へ、キッとなる。祐成、引廻す思ひ入れ。この見得、ドン〳〵、「アリヤ〳〵」の聲にて道具廻る。

本舞臺、向う打抜き、狩屋の大遠見、篝火松明を照らし、よき所に緣側附きの狩屋。この上に時致、大童になり、松の小枝を咬へ、いかにも莫大なる大太刀を振りあげ、三階稲荷町殘らず、いづれも素肌武者、思ひ〳〵の形にて、手負ひの見得。ドン〳〵にて道具納まる。

ト本雨降ってくる。皆々かゝるを、切り立て薙ぎ立て、キッとなる。この時下座にて

忠常　ヤア〳〵、狩場の面々承れ。曾我の十郎祐成を、仁田の四郎が討取つたり。各々御安堵候へ。

大勢　エイ〳〵オウ。

ト早太鼓打ち立てる。

時致　ヤヽヽヽヽ、さては祐成御最期とや。斯くなる上は時致一人、目ざすは祖父伊東の仇、御領の狩屋へ切り入つて、鎌倉どのゝ御首を賜はらん。オヽ、さうぢや。

皆々　やらぬワ。

トかゝるを、切り立て〳〵向うへかゝる。揚げ幕より白絹かつぎし黒革の鎧、本行の五郎丸の形にてよろしく窺ひ〳〵出て來り、時致に向ふ。時致、女と心得、除けて行くを、立ちふさがつて思ひ入れ。此うちドン〳〵、鼓の合ひ方、よろしく立廻りあつて、時致、かきのけんとする。よきキツカケに時致を押し戻し來り、本舞臺にて立廻り、時致を支へ、キツとなる。この時初めて薄衣を脱ぎすて、赤塗りの五郎丸、顔を現はす。時致、緣先に片足踏みかけ、振り切つて

時致　ヤヽ、女にあらぬ、さては汝は

ト白刃を振りあげる。五郎丸キツとなる。トゞ五郎丸、時致を組みとめたる畫面の見得にて木の頭。カケリ、早めドン〳〵〳〵「アリヤ〳〵」の聲にて　めでたく引附けると打込みになり、二番目呼び。

幕

（作者　鶴屋南北）

第二番目

曾我兩社祭禮の場

奥庭仕返しの場

浄瑠璃「嬶三人色の地走」清元連中

役名――岩藤女蕃之丞、尾上伊太八前名初平。本町の綱五郎。お祭り佐七。三日月お扇。醫者針野灸按。宇田五郎。若黨、畑右衞門。祭の世話人、警固、手古舞、大勢。

本舞臺、正面、高積みせし虎屋の蒸籠、この進物札本町綱五郎様、お祭佐七様、三日月お扇様、曾我中村若い者中と書いたるを貼り、すべて駿州厚原、兩社祭禮の體、屋體囃子にて幕明く。

ト髮に鐵棒曳き、裁附けの形。警固二人、花笠。忠太夫は烏帽子狩衣、神職の形にて、烏帽子の上へ鉢卷して、醉うたる體。これを手古舞ひ十五人、いづれも揃ひの絆纏、股引、あふり附きの獅子を舞うてゐる見得。獅子の太鼓にて、皆々あふり散らし、伊織、蹴倒されし體。

鐵棒　コレ〳〵、神主さん、お前、何をごてつきなさるのだえ。

忠太　ヤイ〳〵、若い者、お祭はめでたいが、神職たる舌切忠太夫を、なぜ獅子のあふりで轉ばしたのだ。神主が立たぬぞ〳〵。勇むも程があるものだ。

手古　成る程、こりやァ神主さんの、熱くなさるのも尤もだわえ。

問　併し、なんぼめでたい祭だといつて、神主の癖にお前、朝から呑みなすつたの。

同　さうだ〳〵、神主樣が、舌の廻らぬほど呑みなすつたの。

同　ナニ舌が廻らぬ。そいつは大方、糊でも嘗めたのかも知れねえ。

同　ハテ、糊を嘗めれば、舌を切られるは當り前だワ。

同　そこで舌切忠太夫だな。

同　どうしても雀に縁があるわえ。

警固　これサ、雀々と、澤山さうに云はねえものだワ。

同　雀海中に入つて蛤といふ事を知らないか。

手古　馬鹿を云へ。雀は海中に入つて生栗になるワ。

同　これはしたり、生栗か搗栗か、いつまで云つても同じ事だワ。

同　腹も立たうが神主さん、めでたいお祭だ、不請しなさい〳〵。

同　わしらも挨拶に入りませう。

同　せりふの屆かぬところは、わし等に免じて

同　御料簡なされませ。

警固　成る程、こりやア若い衆の云はれるが尤もだ。神主が朝から醉つては、氏子へ濟むまい。今日は

この厚原で、曾我兄弟の衆を、荒人神と勸請して

同　毎年五月の二十八日、この中村での御祭禮、おいらも世話役に頼まれたのサ。

鐵棒　コレ、神主さん、機嫌直して、一つ〆めなさい〳〵。

忠太　さう云はつしやると、神主返す詞もござらぬ。然らば一つ〆めませう。

皆々　ア、、ヨイ〳〵〳〵。

警固　それで物が極つたといふものだが、併し、お祭の支度はよいかの。

忠太　隨分ようござるて。この神職が指圖して渡しかけませう。

ト下座の方に向ひ

支度がよくばお先の面々、急いで祭を渡してよからう。

ト下座にて「ハア」と聲する。ドン〳〵カ、カと吉例の鳴り物。猿田彦、裝束にて先達、續いて榊、四神、白張烏帽子の大勢、麻上下の花警固大勢、跡に附いて花道へかゝり、中の間の歩みより東へかかり、元の下座へ入る。よき時分より渡り拍子になり、向うより前髪の若衆、祭の形。赤坂奴二人、一人は長柄を擔ぎ、一人は疊み床几を持ち、これに世話人、袴の形。肌脱ぎの手古舞二人附き、足早に出て來り、本舞臺へ來て

世話　これはどなたも、お待遠でござりませう。

鐵棒　なにサ親方、お早うござりました。
警固　今やう〳〵榊が通りました。
肌脫　イヤモウ、祭といふものは、さて忙しいものだの。
同　わしらも昨夜から、まんじりともしねえの。
若衆　それに善六が醉つてゐるから、長柄を幾度か、わしが頭へ
赤坂　當てましたか〳〵。古いやつだが、當るといふのは、祭の出面にめでたいね。
同　善六さん、ちつと氣を附けて歩きねえな。
鐵棒　下戸の癖に、あんまり飲むからよ。
警固　時に親方、お内の練り物は、あらかた揃ひましたかえ。
世話　わしの方はよいが、地走りに出たいと頼んで寄越した、あの醫者の灸按が、こみあふ中で、どこへ入つたやら。
肌脫　あの醫者樣も、餘ッぽど間抜けだわえ。
同　エ、、灸按かえ。イヤ、人らぢしな醫者だぞ。
鐵棒　モシ〳〵親方、このお子のお支度も奇妙に出來やした。めでたく一つ〴〵めやせう。

皆々　〴〵めませう〳〵
ト皆々手を打つ。矢張り此うち祭の鳴り物。向うより灸按、練り物の拵らへにて、駈けて出てくる。跡より畑右衞門、足輕の形にて、海鼠の袴、高股立ちにて、狀箱を持ち、追ひかけ出て來り、灸按をあちこちと追ひ廻す事。大勢の中を潛りて逃げる。畑右衞門、追ひかけ〳〵、灸按を捕へ
畑右　ドツコイ〳〵、逃がしはせぬぞ〳〵。
警固　コレ〳〵。お屋敷さんも、祭り中へ泥坊を見附けたやうに
皆々　何を騷がつしやる〳〵。
畑右　コレ〳〵、若い衆、騷がつしやるな、泥坊ではござらぬ。わしは醫者を追ひかけて來た。
金棒　ナニ醫者だ。そんなら、この頭を冠つてゐるは
ト皆々立寄り、鐵棒、灸按の大頭を取る。灸按、顏を出して
灸按　これは面目次第もござらぬ。
鐵棒　ア、、そんならお前は
皆々　祭に出た灸按さんか。
畑右　サ、、その灸按に用事ござつて、身共は當時出頭の、岩藤玄蕃之丞さまの屋敷から參つた。

灸按　コレ〳〵、お使ひ。御川もござらうが、見らるゝ通り、愚老只今祭に出かゝり、取込んでござれば、いづれお跡より御挨拶仕る。サヽ、お歸りなされ〳〵。

畑右　イエ〳〵、持つて參つたこの御狀、拜見の上、返事を下され〳〵。

灸按　これはしたり、このマア中で他聞もござる。見るには及ばぬ〳〵。

畑右　イヤ〳〵、見せねば屋敷へ歸られぬ。見て下さい〳〵。

ト兩人爭ふ。

肌脫　モシ〳〵、灸按さん、お使ひもあのやうに仰しやるから、ちよつとマア手紙を見て、返事を云つてやりなさいな。

灸按　イエ〳〵、この人込みの中で、申す儀ではござらぬ。愚老、手紙を讀む間がござらぬ。サヽ、歸つて下さい〳〵。

畑右　イヤ〳〵、どうしても讀ませねば、拙者歸つて申し譯が無い。讀まつしやれ〳〵。

灸按　ハテ、この通り取込んで居ると申すに。

ト迷惑なる思ひ入れ。

肌脫　アヽ、モシ〳〵、お使ひもあのやうに云はつしやる。お前、取込みなら、わしが讀んで聞かせませうか。

畑右　アヽ、さうして下さい〳〵。

灸按　ハテ、いらぬ左平次を。讀むには及ばぬ〳〵。

皆々　讀んでやるがよい〳〵。

ト口々に云ふゆゑ、灸按、切なき思ひ入れ。其うち肌脫ぎの手古舞、手紙を開き

肌脫　ナニ〳〵「飛札を以て申し越し候ふ。先達て其方へ預け置き候ふ東雲の名香、急ぎ今日中に持參いたさるべく候ふ。面談の上、其方願ひの一儀、相違なく相渡すべきものなり。月日。醫者灸按へ、岩藤玄蕃判」。

ト讀む。灸按、苦しきこなし。

世話　アヽ、そんなら專ら評判の、祐信さまのお屋敷で

肌脫　失せた寶の二品は

警固　岩藤玄蕃のお屋敷に。

肌脫　兄の佐七がお出入り屋敷、曾我のお家の退轉も、その品出なば以前の如く、それを仇する岩藤さま。

鐵棒　今時分の大名に、誠にこいつは

皆々　油斷がならぬ。

ト何心なう口々に云ふ。灸按、氣の毒なる思ひ入れ、此うちよき時分より、編笠かむりし、がら〳〵賣りの世話商人、下座より出かゝりゐて、肌脱ぎの手古舞が讀むのを聞いて思ひ入れ。

灸按　それだによつて、爰で讀んでは悪いといふに。

畑右　その品寄越すか。いづれ返事を

ト差寄る。灸按、術なき思ひ入れにて

灸按　エヽ、これ程云ふに

ト畑右衞門を突きとばし、大頭なかむり、下座へ逃げて入る。畑右衞門うろたへ、件の手紙を持つて

畑右　コレ、返事はどうする〳〵。

ト追うて入る。件の商人、後にて立聞きゐたりしが、思ひ入れあつて、二人が跡を追ひかける心にて、一散に下座へ入る。此うち矢張り祭の鳴り物。

皆々　イヤ、使ひの急くのも尤もだ。

トこの時頭取、祭の形にて、觸れ書を持ち、出て來り

頭取　これは親方、おめでたうございます……卽ちこれが、祭り淨瑠璃の番附でございます。

ト渡す。世話人見て、爰にて淨瑠璃觸れを讀む事あつて

世話　成る程、これであらう。

皆々　〆めませう。

ト手を打ち

エヽ、おめでたうございます。

ト鳴り物になり、この人數下座へ入る。直ぐにこの鳴り物にて、向うより早乙女八人、いづれも高からげ、田植ゑの拵らへ、浴衣一つ着、前を端折り、素足跣にて、皐月の花を附けし女菅笠、めい〳〵苗を持ち出て來り、早乙女の振りよろしくあつて

皆々　渡した。

ト鳴り物になり、下座へ入る。爰にて下座へ取り、「雀踊りが所望ぢやが合點か」。向う揚げ幕の内にて

八人　オヽさて合點ぢや。

ト渡り拍子になり、雀踊り八人、揃ひの拵らへにて出て來り「駱駝でせい」「神事舞」その外、振りよろしくあつて、渡り拍子になり、下座へ入る。この鳴り物にて道具廻る。

本舞臺、誂らへ花車の飾りつけ。件の手古舞皆々出て、木遣りあつて、屋體囃子になる。清元連中出て床几にかゝる。前彈きあつて

〜花菖蒲、幟もかほる荒人神の、祭り賑はふ提灯を、月を見立てゝ時鳥、名をも雲井に揚げ障子、屋體囃子の音につれて、見にくる人も俠者かな。

ト屋體囃子になり、正面の幕を切つて落す。眞中に天津乙女、羽衣の人形、上の方に日本武尊の人形。下手に龍神の人形、大口の形。各々花車の見得よろしく、舞臺よき所まで押し出す。

〜勇ましや、正に和合の天地神、造り花だし花や咲く、げに花かつら色めくは、春のしるしの面白や、空ならで、爰も妙なり天津風、雲の通ひ路吹きとぢよ、乙女の姿しばしとて、てんととめたる舞ひの袖〜地に又入れば下界にて、和田の原なる緣の色も、うつる海原、沖ゆくばかり、月の御船の佐保の河原へ、浮み出でたる龍神の、玉の冠りも傾むけば、ところ春日の三笠山、雲にのぼり地に入りて、飛火の野守りも出て見よや〜さて又人は日の貢ぎ十二代なる景行天皇、日本武の御尊、東夷退治の御いさほし、頃は木枯し時雨月、關の東や富士ケ根の、氷柱に鋭き百草千草、荒き夷をもろともに、切り靡かせし御佩刀、それより名けて草薙の、御劍の威德泰平の、御代を壽く神いさめ、天の羽衣、龍神の、波瀾の神よ千早

振る、神は人なりとりまぜて、これ天地人三本の、見立てを玆に。

トこれにて三人引抜き、天人は三日月お扇、龍神はお祭佐七、日本武尊は本町綱五郎、いづれも祭の形。よろしくあつて

〜來ても見よかし花の江戸、祭に揃ふ定紋は、牡丹に狂ふ扇獅子、重ね扇の雄獅子の中へ、雌獅子をまぜて三つ扇、風もかほりて美しき、夏の夕暮れ賑はしや。

ト三人よろしく振りあつて

佐七　時に、男二人の中へ、美しい女が一人

綱五　嬲るといふ字に讀むとやら。

せん　ほんに、綱五郎さんに佐七さん、お前方の口では、なぶられさうな事ぢやわいなア。

佐七　ナニなぶるものか。ほんに地金だ。

綱五　幸ひ石町の太夫さん、この子がすつぱり靡くやうに

佐七　口說きを一番お賴み申しやす。

〜君は山谷の三日月樣よ、宵にちらりと思はせぶりか、藝者といへば三味線を、引く手數多のぬしなればとて、梅にもいつか鶯の、高くとまつてくれずとも、本音を出したせうがには

〰女房孝行に朝起きて、龍宮見世の生肴、鰹々初鰹、鰈や大鰈、肩に負うての商ひも、お氣に入らずば精進物で、今朝はお茶漬、お口に合ふもの、煮豆はり〳〵、菜づけ〳〵、いひなづけとはちと地大根、太い願ひか知らねども、夫婦丸麩になりたいと、氣を揉み瓜の露の身は、いつでもすいではないかいな〰さう云はんすりやお前一人が眞實で、わたしや世間の皆様に、憎まれ草も氣の毒な、役にさゝれた天乙女、藝者は憂の酌をなし、浮いた顔して勤めてゐれど、可愛い男をよそへ唄、ちらとその影三保ケ崎、月清見潟富士の雪、解けて逢ふ夜を樂しみに、のろけざ惚れたが解るまい。

ト綱五郎前へ出て

〰エ、畜生め、浮れ女の、實と頻伽の雄鳥を、見たは初めて珍らしい、樣は天人とんとろりとろり〳〵と紅鐵漿つけて、男たらしの化粧坂、少々癪にさはり山、曾我祭だけ今爰で、一番五郎を出さうかと、思へど野暮な嫌らしい、女の方に食合ひは、嫌味ぎらひの神氣性、爰らが酒落のやまと武。

ト、お扇前へ出て

〰挺でもきかぬ氣强さを、引いて見たさの手古舞は、女ながらも家の株　キヤリ〰やんれ引け〳〵よい戀しかけてゐんやらサ、やつと抱きしめ床の中から、小夜着蒲團をなぐりかけ、なんでも此方を向かしやんせ、ヨウイ〳〵よい仲同士の、戀いさかひなら、痴話と口舌は、今夜もせい、東雲の明の鐘、ゴンと鳴るので仲直りすんました。

トこの木遣りのしまひに、三人振りにて手を打ち

〰えんやりよう。

ト屋體囃子になり、向うより嵩の者二人、一人は獅子の頭を持ち、一人は後足にて、走り出て花道へとまる。下座のはやし長唄連中、底拔けの前へ出る。地へ取り

長唄

〰駈けくる獅子の勢ひは、向う鉢卷き手拭に、牡丹の英、匂ひみち〳〵、群集の祭、おのがさま〴〵蝶小蝶、足を千鳥に狂ふ獅子、ちら〳〵〳〵。

ト狂ひの合ひ方になり、兩人狂ひよろしくあつて手踊りになる。

清元

〰見渡せば、素顔見せたる夏の富士、裾には雪の白一文字、外八文字の道中に、禿は二つ瓶子とも、また三つ巴ながしめに、大一大萬大吉の、首尾の松皮見合せて、大淵流しも儘ならぬ、ゆるさぬ人の四つ目結ひ、重ねて扇と月星を、指折り烏帽子かんならず、輪違ひまいとの約束は、詞の花菱花うつほ、雌龍雄龍の女夫竹、竹に雀や松に鶴、牡丹に狂ふ獅子の曲、

勇ましや。

長唄 獅子とらでんの舞樂のみきん〳〵、樂も神樂もおしなべて、浮かれ立つたる神いさめ、打てや囃せや會我祭、外に類も荒人神の、その功を末の世に、歌舞伎の花と賑はへり。

トこの散らしの中へ灸按、以前の形にて出て、無性に踊る。鳶の者兩人、あちこち突き返す。

綱五 コレ〳〵、貴樣の屋體は、此方ぢやアねえ〳〵。

灸按 どこでも構はぬ。無性に踊る。

佐七 とんだ交ぜッ返しだ。

せん ほんに、をかしな形ぢやわいな。

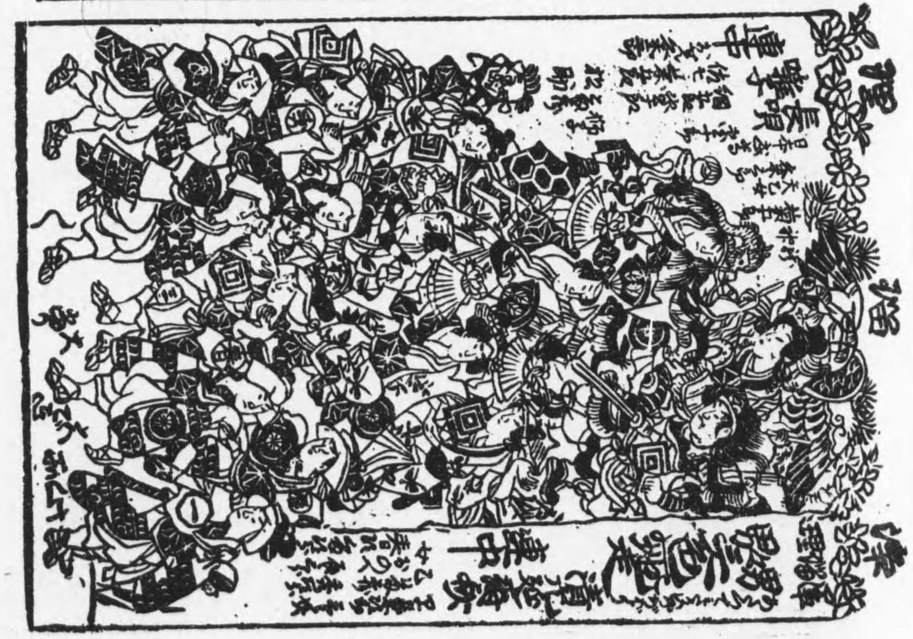
ト綱五郎、灸按を捕へて

綱五 これが卽ち俄の始まり。

佐七 なんだ〳〵。

綱五 しのぶ賣り見て我が振り直せ。

トこれふり頭取、拍子木にて、俄の思ひつき、いろ〳〵あつ皆々る。灸按殘り、一人で踊つてゐる。爰へ畑右衞門出て來て



畑右　ヤ、妥に居たな〳〵、見附けた〳〵。

ト捕まへる。

炙按　ア、、コレ〳〵、また貴樣が來たか。愚老は俄で大取込み。御返事は、此方からやる〳〵。

畑右　イヤ〳〵、手紙の返事が出來ぬなら、殿よりこなたが預かつたその品を、おれに渡しやれ〳〵。

炙按　ハテ、この人は。コレ、一體愚老が二の宮といふ女を執持ち、その褒美の屬托同然、預かつたその一品、よし二の宮が死んだにもせよ、骨を折らした褒美を寄越さぬ其うちは、滅多にこの品遣られぬ〳〵。

畑右　そんなら殿から遣はされし、この御狀の御返事を下さい。

炙按　ハテ、この人は聞き譯の惡い。お返事はこの通り、岩藤さまへ申し上げさつしやいな。

畑右　イヤ〳〵、その位な事では屋敷へ歸り、御前へ申し譯がない。岩藤さまの屋敷へ、同道いたさうござれ〳〵。

ト手紙を持つたるまゝ、炙按を引ツ張る。このあたりに件の商人、荷をかたげ出かゝり、岩藤々々と云ふを聞いて思ひ入れ。

炙按　これはしたり、手紙の返事は此方から仕ると、岩藤さまへ云はつしやいよ。

畑右　イヽヤ、屋敷へ連れてゆく〳〵。

ト爭ふ。この時、件の商人走り寄つて、密事の書狀を引ッたくつて、花道の方へ行かうとする。

ヤ、大事の御狀を

トかゝるを、持つたる荷を畑右衞門に打ちつけ、狀を持つて向うへ入る。畑右衞門うろたへ

おのれ、泥坊の泥坊〳〵。

トこの跡を追うて入る。灸按殘り

灸按　〆めたぞ〳〵。彼奴さへ歸つてしまへば、もう樂ぢや。さて〳〵、うるさや〳〵。

ト懷より香包みを出し

併し、又うせまいものでもない。ドリヤ、氣の附かぬ所へ。

ト若い者中の提灯を見附け、その中へ隱し思ひ入れ。此うち佐七、後に出て窺ひゐる。

これでよし〳〵。あゝして置いて、褒美の來ぬうちは、滅多に渡す事ではない。

ト云つてゐるうち佐七、件の提灯の中を見て、一品あるゆゑ、思ひ入れあつて、これを持ち、行かうとする。灸按見附けて

コレ〳〵、この人は、どこへ持つて行く、滅法界な。

佐七　何が滅法界だ。この提灯は、おいら達が拵らへた揃ひの提灯だ。それがどうした。

灸按　ナニ揃ひの提灯だ。コレ、それなれば、おれも連中だから、灯させてくれ〳〵。

佐七　ナニ連中だ。コレ、誰れに斷つて醫者の貴樣が、若い者附合ひをするのだ。おいらは知らねえ。

エヽ、おへねえ慈姑の化け物だ。

灸按　イヤ〳〵、慈姑の化け物でも何でも、こりやァおれが、灯すワ〳〵。

佐七　エヽ、イケふざけた。放しやァがれ。

ト引合ふはずみに中より香包み出る。佐七手早く取上げ

これこそ紛ふ方なき東雲の名香。

灸按　それを

トかゝるを引附け

佐七　伊太八さまが詮議の一品、こりや好い物が手に入つたわえ。

ト灸按を投げてキッと見得。屋體囃子にて、よろしく

右の鳴り物にてツナギ、引返し。

幕

本舞臺、向う打拔き、遠見に見たる奥座敷、障子たてきり、浮繪心に飾り、前通り築山、皐月の盛り石燈籠。よき所に樋の口、泉水に花あやめ、柳の吊り枝、上の方に枝折り戸、庭井戸。すべて岩藤玄蕃屋敷奥庭の體。よろしく、蛙の聲、螢多數飛び廻り、時の鐘、琴唄にて幕明く。

ト雨車にて向うより宇田五郎、袴着流し、大小、下駄にて、路次笠をかざし、畑右衛門引添ひ出て來て。

五郎　ハテ、それは珍事が出來いたしたな。

畑右　イヤモウ、申し譯なき事ども。何分よろしくお願ひ申しまする。

ト舞臺へ來り、五郎、枝折り門に寄り

五郎　岩藤どの、召連れましてござる。

岩藤　承つた。只今それへ。

ト合ひ方になり、岩藤玄蕃之丞、袴着流し、大小にて、蛇の目傘をさし、庭下駄にて、手燭を持ち出て來る。

五郎　玄蕃之丞どの、折角今宵懇望の、名香の儀も

岩藤　ヤイ、畑右衛門、客來あるゆゑ、今宵に限るあの名香、持參いたせよと申し附けしに、遲刻いたせしその上に、又もやその品は。

畑右　ヘイ〳〵、申し譯なき事ながら、彼の灸按に尋ね合せ、御狀を拜見いたせよと申せども、なかなかに聞き入れず、御褒美を戴かぬそのうちは、相渡さぬとの强情者。然らば御狀の文言を、やうやう見するも祭の場所、込みあふ中にその一通、失ひましてござりまする。申し譯もなき仕合せ。

岩藤　ヤヽ、すりや名香も受取り參らず、あまつさへ、予が方より遣はせし彼の書狀を……ハテ、心がかりな。

ト思ひ入れ。五郎、懷より香爐を出し

五郎　其許の指圖にて、この香爐に件の名香、くゆらし見るは今宵ぞと、所持いたしある香爐も、名香いまだ手に入らずば

ト香爐を岩藤に渡す。

岩藤　折角今宵各々方を、招きよせしも名香の、不思議を試さん心にて、今宵の會合いたせしに、密事の書類を失ひしとは、この身の大事。

五郎　然らば奥へ通行の、門々固めて嚴しく出入りを、身共が參つて

岩藤　御苦勞ながら。

五郎　心得ました。

ト合ひ方、蛙の聲、五郎は足早に向うへ入る。

岩藤　さるにても、心がゝりはあの書類。名木の樣子認めあれば、外手へ渡らばあの文言、もしや手づるを。

畑右　下郎も左樣存ずれど、致し方なき無調法。

岩藤　それと申すも、予が見極めし使ひの下部。悔んで詮なき予が誤まり。チエヽ、腹の立つ。

ト立腹の見得にて、思はず拔討ちに畑右衞門を切る。畑右衞門、見事にかへる。この時。時の鐘の頭を打つ。蛙の聲、一度にやむ。この途端、樋の口を明け、伊太八、好みの拵らへにて窺ふ。岩藤、死骸を踏み飛ばし、思ひ入れ。伊太八、ツカ〳〵と出る。岩藤、窺ひ見て

岩藤　それに居るは何者だ。

伊太　ヘイ、私しでござります。

岩藤　ナニ、私しとは。

伊太　尾上之助が召使ひ、盛り切り奴の、初平でござります。

岩藤　すりや、おのれめが。

伊太　ヘイ。

岩藤　予は犬かと存じた。ハヽヽヽヽヽ……さりながら、用心堅固のこの館、誰れが許して、目通り近くうせたのだ。

伊太　イヤ、お許しはござらねど、今日思はず途中にて、手に入りまする密事の狀、その文言に紛失の名木香爐二品は、あなたが御所持と存じつき、憚り多くもお館の、御寢所間近きお庭先、犬つくばいに奴めが、わざ〳〵推參いたしてござります。

岩藤　默れ、下郎め。尾上之助が屋敷にて、紛失なしたる二品の在所、なんで身共が存じ居らう。併しそれには證據があるか。

伊太　證據は卽ちこの書狀、醫者灸按へあなたより、名香渡せと內意の御狀。祭の場所で不思議にも、手に入りましたは奴が存意、屆いたところ、岩藤さま、お覺えござらばその二品、キリ〳〵奴に下さりませ。

ト件の書狀を出し、キツと思ひ入れ。

岩藤　證據とあれば、その狀これへ。

伊太　イヤ、この狀は

岩藤　予に見せざるは、怪しき書狀。

伊太　然らばそれにて

ト差出す。岩藤見て

岩藤　似ても似つかぬ僞書の文言、證據にならうか。痴けた奴の。

ト手燭の灯にて件の狀を燒き捨てる。伊太八驚き

伊太　ヤヽ、折角手に入るその書翰、火中なされて

岩藤　證據はあるまい。

ト よき時分、懷中の香爐を、ソツと傘の中へ隱すこと。

伊太　成る程それでは差あたる、寶の手がゝり、證據の品も

岩藤　切れたであらうな。

伊太　いかにも左樣。併し證據の一通は、灰になつてもまだ外に、奴が平常懷中に、離さず所持する御守り、一度はあなたに拜ませたく、守り奉ぜし盛り切りが、所持の守りを岩藤さま、拜まつしやつて下さりませ。

岩藤　すりや、汝が所持する守りを。して、その守りと吐かすのは

伊太　卽ちこれに。

ト片足の草履を示す。岩藤見て

岩藤　こりや尾上めを意見の節、打擲なしたる草履の片足。それがどうした。

伊太　この草履ゆゑ主人の生害、家斷絶も岩藤さま、あなたの苦が遺恨の始まり。寶の詮議にお屋敷へ參り合せし今宵こそ、吉祥日とも奴めが、存ずるゆゑに持參した、いはゞ女の役廻り、初で致さば御贔屓の、大和屋流の杜若、あやめにも似ぬ花菖蒲、女形にあらぬお馴染の、下手もお江戸の走り茄子。成田奴が差出たも、尾上が遺恨晴らしに來た。女蕃之丞さま、岩藤さま、二品渡したその上に、御不請ながら初平に、ぶたれさしつて下さりませ。

岩藤　小差出たその腮、おのれが主の尾上之助、うろたへ武士ゆゑ草履の折檻。その仕返しとは緩忘千萬。殊更夜陰に予が館、忍び入りしは盜賊同然。察するところ尾上が小悴、餓鬼を育む盜人夜盜か。さすれば餓鬼も云はずと同類。細首刎ねるが世上へ見せしめ。

伊太　なんで其やうなさもしい根性、この身にとつて

岩藤　然らば何ゆゑ忍んでこれへ。

伊太　寶の詮議をしようが爲。
岩藤　二品あつたか。
伊太　サアそれは。
岩藤　餓鬼を尋ねて、首ぶたうか。
伊太　サアそれは。
兩人　サア〳〵〳〵。
ト岩藤、伊太八を引附け
岩藤　おのれ下郎の身を以て、勿體なくも賴家公の、お覺えめでたき岩藤女蕃、御當地根生ひの某が、お江戸は勿論京大阪、經巡り廻つた憎まれ者、强惡人と評判の、鑑定の附いた敵形へ、嘴青き青二才、うぬらが及ぶところでねえ。主の尾上が追善に、草履の回向を、カウ〳〵〳〵
ト草履にて伊太八をしたゝかに打ち
なんと骨身にこたへたか。
ト伊太八、無念の思ひ入れにて
伊太　證據の一通火中なし、殊に又ぞろ奴めを、草履を以て

岩藤　ぶつた、叩いた。ぶちのめした。まだその上に、眼前これにて息の根とめて
ト拔いて切りつける。伊太八立廻つて、ありあふ傘にて、しやんと白刃を受ける。この時傘の中より
件の香爐落ちる。伊太八取つて
伊太　ヤヽ、これぞ正しく失せたる香爐。
岩藤　南無三それを
ト切つて行くを、立廻りよろしく
伊太　香爐は思はず手に入つたれど、いま一品のあの名香。
岩藤　揃はぬうちは、願ひは叶はぬ。うぬはこの場で
ト切りつける。伊太八、立廻つてキツと留め
伊太　二品揃はぬ其うちはと、思つてゐれどこの如く、やむ事を得ぬ岩藤女蕃。爰で奴が敵討。
岩藤　うぬ、その高言を
ト切りつける。これより琴の六段、誂らへの鳴り物にて、兩人、傘を使ひ、大タテあつて、岩藤手を負ひ、撞となる。この時、向うバタ〳〵にて、佐七、件の名香を持ち、駈け來るを、宇田五郎支へる立廻りにて、兩人出て來り、この體を見て

佐七　ヤア、初平どのか。こなたが尋ぬる東雲の名香。

伊太　ヤヽ、手に入つたるか、二品揃へば岩藤玄蕃

岩藤　なに、やみ〳〵と

　　トかゝるを伊太八、岩藤を取つて押へ

伊太　主人の敵、覺えたか〳〵。

　　ト草履にて打つ。この時五郎、佐七にかゝるを、見事に引敷き

佐七　二品揃ふ上からは、お家の再興。

伊太　これにて本望。

佐七　出來た〳〵。

　　トこの時、ドン〳〵になり、菖蒲革の侍ひ大勢、弓張り、十手を持ち、出て來り、兩人を取卷き

侍　動くな。

兩人　なんと。

伊太　まづ今日はこれぎり。

　　めでたく　打出し

（作者　鶴屋南北）

陽蓬萊曲機

陬蓬萊曾我

三建目

相州杜戸明神の場

役名――頼朝息女、大姫。曾我の二の宮。腰元、舞鶴。同、龜菊。手越の少將。梶原三太郎景茂。同源太景季。竹の下孫八左衛門。近藤七郎國平。新貝荒次郎。吉備津の大藤内成景。近江彌太夫成國。和田の家來、片琴勇之進。馬士、刎ね罠の彌藏。曾我の禪司坊。工藏犬坊丸祐友。小林の朝比奈。曾我の家臣、團三郎。

三建目口上役人觸れ濟むと、通り神樂になり、幕の外へ、花道と幕の引附けより、思ひ〳〵の旅人、馬士、六部、順禮などの仕出し大分出る。この仕出しの中へ禪司坊、いが栗かづら、脚絆草鞋の形にて、千ケ寺葛籠に菅笠を附け、杖を突き、病人の體にて、修行しながら出てくる。仕出し、これに錢をやつて入る。此うち跡より國平、大小、股引、草鞋、ぶッ裂き羽織の形にて出でくる。跡より紺看板の

供一人附き出て來て、國平、仕出しを一人々々窺ふ事あつて、トゞ禪司坊を呼びとめ

國平　ヤイ〳〵、坊主め、待て〳〵。

禪司　ハイ〳〵、私しが事でござりまするか。

國平　知れた事だ。見れば、旅疲れにやつれた樣ぢやが、いづれよりいづれへ通る者ぢや。往來手形でも持つてゐるか、眞直に申せ。

禪司　ハイ〳〵、私しは、越後の國から罷り出ました者でござります。

國平　越後が生國と申すのか。して、住居いたして居つた寺は、何と申す。

禪司　ヘイ、その儀は、越後と申しましても、西越後、東越後、廣い事でござりまして、寺院も諸所方方にござりまする。

國平　ヤイ〳〵、默れ。此奴いよ〳〵怪しい奴。外の寺院を尋ねるのではない、われが住居いたして居つた寺は、何と申す、それを吐かせ。

禪司　ハイ、ソノ、私しが住居いたして居りました寺は、高田の善道寺。

國平　ナニ

禪司　イエ〳〵、それではござりませぬ。彼の親鸞上人の

國平　ヤア、此奴胡亂者。われが住居を申さぬに於ては、僞はり者、引ッ縛つて召しつれる。腕廻せ。ト引据ゑる。禪司坊、苦しき思ひ入れにて

禪司　アヽ、モシ〳〵、御免なされませ〳〵。左樣なれば申し上げませう。何を隱しませう、私しは、久上寺の所化でござりまする。

國平　ナニ、久上寺の所化と申すのか。

禪司　左樣でござりまする。はる〴〵參りましたも、この度祐經さまへ、お願ひの筋ございまして、國を出ましたところ、越後路より信濃路へかけまして、殊の外の大雪、その道より斯樣に病づきまして、誠に杖を力に、やう〳〵これまで參りましてござりまする。斯樣に申し上げまするうちも、息が切れまして、アヽ、術なうござります。

ト云ひながら、苦しき思ひ入れ。國平これを見て

國平　成る程、左樣承れば、怪しい者とも見えぬ。ほのかに聞けば、先達て久上寺修覆の金子、紛失との取り沙汰。その儀を祐經どのへ訴へに參つたと、いふやうな儀であらう。相違もあるまい。身は近藤七郎國平と申す者。この程鎌倉より三島の間に徘徊いたす、關の畑右衞門と申す浪人者。その以前は京都の生れと聞きしが、此奴、手にあまる護摩の灰、詮議いたせと北條どのより、指し

圖を以て斯くの如く、往來の者を吟味いたす。わいらもこれまで參るうち、もし宿屋などにて左樣な者を、見聞いたした事はないか。包まず申せ。

禪司　イエ〳〵、仕合せと、左樣な者には、出合ひませぬやうにござりまする。

國平　よし〳〵。然らばこの上は、濱邊傳ひに杜戸の近邊を詮議いたさん。家來參れ。

侍ひ　ハア、。

ト通り神樂になり、國平、供を連れ、幕の內へ入る。禪司坊思ひ入れあつて

禪司　ヤレ〳〵、搗て〻加へて、心惡いに今の詮議、思はず大きに心を使うた。その上、久上寺の寄附の金子紛失の事、今の侍ひが詞の端々。すりや、もう此方へ訴へがあつたか……これといふも養父祐信さま、お上より預かりありし、逆澤瀉の鎧、鬼王にお預けありしを。兄祐成の放埒に、質入れありて祐信さまには、和田さまへお預けの身と、聞けば聞くほど親身の悲しさ。どうぞせめては露より程も、曾我の貧苦が助けたいと、思ひ思うてあらう事か、出家にあるまい恐ろしい……所詮命は明晒しと、思ひ詰めたる禪司坊、と云うて曾我の屋敷へ尋ねても行かれず。どうぞ折よく鬼王兄弟の、在所を尋ねて、

ト思ひ入れ。この時、幕の內、ドンチヤン、勢子の聲する。禪司坊惚りして

か〻、あれは慥か道々に、噂のあつた祐經の若殿、富士の御狩の下稽古であらう。ヤレ〳〵、よしない事を問はず語り、思へばいと〻病の障り。ドリヤ、氣を取直して修行しながら、もう少つと歩きませうか。

ト通り神樂になり、禪司坊、切なき思ひ入れにて、杖に縋り、幕の內へ入る。

本舞臺、三間の間、正面二重の石坂、上に松林、これに笹龍膽の紋の附いたる幕を張り、この坂の中段に、景茂、素袍、大肌脫ぎにて、石を引ッ抱へて立ち身。坂の上に竹の下孫八、新貝荒次郎、素袍烏帽子にて扣へゐる。舞臺上の方に大藤內成景、麻上下、湯釋をかけ、奉納の木太刀をかけし額を持つてゐる。舞臺眞中に犬坊丸、騎射の形にて與市の見得。下の方に宇佐美小文次、鷹狩絆纏、股引、草鞋の形にて、腰に鞭を差し、犬坊丸の竹笠を持つて扣へゐる。左右に陣笠の勢子、割り竹を持ち、扣へゐる。一體、杜戸明神の鳥居先の道具。ドンチヤン、こいあいにて幕明く。

大勢　どつこい。

孫八　既に今日、富士の御狩の下稽古、拳かためのに臨んで

荒次　爰は所も杜戸の明神、眞先かけて犬坊丸祐友、父祐經どのは狩場にて、惣奉行たる御大役。

大藤　魑魅罔両もあらんかと、祈念に依つて斯く申す、吉備津の宮の大藤内成景まで、今日の社參と申し、これに連なる今日只今、梶原景茂の力試しは、御料の宮地にこれありし、古へ鎌倉權五郎景政が、腕に覺えの手玉石、奥野の狩の古事に習ひ、拳かための石投げは。

景茂　問ふに及ばず右大將頼朝公、伊東が館に御座の時、祐親君の勞苦をいさめ申さんため、奥野の狩を催ふしける。

小文　既に酒宴に及びし時、幕打廻せし眞中に、差出でたりし大石あり。

犬坊　人々あはれこの石の、相撲の席の妨げなりと、口々にこそ申しける。

景茂　その時股野進み出で、鞠ほどなるその石一つ、礫に打つとも苦にならじと、あたりをキッと見てあれば

犬坊　眞田の與市義貞は、遙かの谷をば通りける。

景茂　景久見るより聲をかけ、いざこの石をぞ參らせん、受けて見られよ與市どのとぞ申したり。

犬坊　與市その時會釋して、こはいかに股野どの、かさより落す大石を、谷にて誰れか受くべきや、御免あれとて行かんとする。

景茂　ヤア小癪なり與市どの、この石受けぬは一門の恥と、大きに嘲り云ひければ

犬坊　與市こらへぬ若者にて、一家の恥とは烏滸がましや、それしきの小石をば、一つも二つも早捨てよと、竹笠ちぎつてフワと捨て、大手を廣げて待ちかけたり。

景茂　サア、その古事を今爰で、持ち抱へたる手玉石、イザ參らさう、受けて見られよ。

犬坊　こは興がる梶原どの、今日た親祐經、この度の富士御狩、惣奉行を承れば、拳かための狩倉を、催ふす今日。

小文　股野が古事に事よせて、主人犬坊を若輩者と侮つてか。お側には宇佐美小文次附きそひ居れば、迂濶な事は罷りなりませぬぞ。

荒次　なんの差出たその一言、景茂どのには犬坊丸へ、拳定めのその爲に、折角用ゆるあの大石。

孫八　怪我過ちがあつてつまるものか。受け損なつて、ほんの元々。

大藤　武士にあるまい卑怯な一言。但しそれともあの石が、犬坊丸には怖いのか。

景茂　拳かためのの今日ゆゑ、眞田にたとへし犬坊丸、その身の卑下は取措いて、受けて見られよ手玉石

イデ一投げに

ト振上げる。この時向うにて

大姫　待つた。

皆々　なんと。

呼び　大姫君參詣。

ト呼ぶ。これにて舞臺皆々思ひ入れ。直ぐに三味線入り誂らへの鳴り物になり、向うより大姫、廣振り袖にて、金銀の扇を持ち、出てくる。跡より舞鶴、腰元の形にて、銀の駕籠真盆を持つて出る。跡より龜菊、同じく腰元にて、香爐を載せ、持ち出る。跡より二の宮、襠裲衣裳、三方に守護の木札を載せ、これを持つて出る。跡より成國、白髮かづら、麻上下にて、三方に繪圖面の箱を載せ、持つて出てくる。跡より勇之進、胡麻鹽かづら、麻上下にて、三方に錫の神酒徳利を載せ、これを持つて出る跡より黑羽織の侍ひ二人、草履取り一人附き、出て來り、この人數直ぐに舞臺へ來て、大姫、上の方へ通る。龜菊、毛氈を敷き、その上へ舞鶴、褥を敷き、これに住ふ。皆々並よく住ふ。犬坊丸、下へ下がつて手を突き

犬坊　大姫君さまには、只今御參詣

皆々　遊ばされましたか。

大姫　『みどり子の、親の心を知るゆゑに、杜戸の神とあとやなしけん。』爰は所も杜戸の宮、また春めいた海の景色。それは格別、今あれから見れば、まだうら若き犬坊へ、荒くれ事はよしない遊び

怪我過ちにも及びなばと、親の心を知るゆゑに、思ひ杜戸へ來合せし、この自らがとゞめしも、無事を祈りの神詣で。ソレ、彌太夫、双方ともに、よいやうに。

成國　ハッ、こは有り難き姫君の御諚。景茂さまにも、お嗜みなされませい。どう致してその石が受けられ申さう。只今姫君よりお止めでござれば、まづ〳〵お扣へなされたが、よろしうございます。

勇之　左やう〳〵、拳かためなぞと申して、富士の御狩の下稽古から致して、子供などには危ない事でござるて。拙者は又この神酒、和田の屋敷より、祐信申し譯の立つやうにと、祈念を受け、持つて歸るが拙者には、大切な役柄でござる。兎角双方、怪我の無いのがようござるて。

成國　何は兎もあれ、姫君より重さお詞。まづ〳〵梶原さまにも、この座ぎりがよろしうございませう

大藤　成る程、大姫君の御諚とあれば、手の附けやうは無けれども、親の威光を鼻にあらはす犬坊丸、これからは石投げの事は、姫君の御意を立てゝ、これぎりにも致さうが、蒔き直しての拳かため幸ひ拙者が持參いたした、奉納の木太刀、これを以て、姫君のお慰みに、竹刀打ちが拳かため。

景茂　こりやアようござらう。然らばこの三太郎景茂、身不肖ながら、お相手に罷りならうか。

ト竹刀を眞中へ直す。二の宮、こなしあつて

二宮　これは又、あられもない竹刀打ちを、姫君樣のお慰みとは、成景さまのお詞とも存じませぬ。譬

への節に申す如く、生兵法大疵の基とやら、どなたに怪我があるまいとも申されませぬ。それよりは何ぞ姫君様の……オヽ、それ〳〵、この濱傳ひに、お貝合せを遊ばすか。何ぞ和らかなお慰みが、ありさうなものでござりまする。なア、皆さん。

舞鶴 左様でござりまする。今日はお姫様にも、お氣結ぼれも出やうかと、お案じ申してのお氣晴らしの、御參詣ではござりませぬかいなア。

龜菊 それに又、石投げの竹刀打ちのと、平常聞いてゐるさへあるに、あんまりなその趣向。ひよつとあの三太郎さんが負けなさんしたら、ほんにをかしなものぢやわいなア。

景茂 ナニ、この景茂が負けたらをかしからうと。さう云はれちやアどこまでも、試合はねば武士が立たぬ。

大藤 左やう〳〵、申し出して、これぎりにも相成るまい。こりや、彌太夫どの、この竹刀打ちばかりは、御免のお取次を

成國 イカサマ、高の知れた竹刀打ち、怪我過ちと申す程の事もござるまい。姫君へは某が、よきやうに申し上げる間。併し、あまり荒氣でないやうに、双方ともに立合ひ召されい。

犬坊 さすればどうでも、この場に於て

景茂 必ずともに、容赦は御無用。

犬坊 然らば此まゝ

景茂 イザ

犬坊 イザ

兩人 イザ。

ト白囃子になり、兩人支度して竹刀打ちにかゝる。ちよつと立廻りあつて「ドツコイ」ととまる。三味線入り誂らへの白囃子になり、兩人存分にタテあつて、トヽ景茂、竹刀を打ち落され、犬坊丸、景茂を打ち据ゑる。景茂、口惜しき思ひ入れ。犬坊丸、思ひ入れあつて

犬坊 眞劍なれば、命は無いぞや。

女皆 やんや〳〵。

景茂 イヤ〳〵、今のは全く怪我といふものだ。サア、いま一勝負々々々。

二宮 これはしたり、たとへ怪我とあつても、負けたものは負けたに相違ござりませぬ。その甲乙があればこそ、遺恨も重なるその道理。古への河津股野も、相撲の遺恨と世の雜說、よしない事にお氣を揉まずと、もう好い加減になされたがようござりまする。

大姫 それ〳〵、自らが心を慰めの爲の今の試合ひ。この上ながら二人とも、必ず遺恨を殘すまいぞ。

ト思ひ入れ。成國、繪圖の箱を、三方のまゝ大姫の前へ持つて來り

成國 それは私し事。今日は、この狩場の繪圖、まつた工藤祐經が燒印据りし狩場の切手。

ト袱紗に包みし切手を懷中より取出し

斯くの如く、大姫君へ御覽に入れ、その上にて賴朝公へ差上ぐる、そのお取次は……ハテ、折惡しく梶原さまには御若輩。ハテどうぞ

ト思ひ入れ。二の宮、これを聞いて

二宮 アイヤ、そのお取次は、この二の宮の局が、受取り差上げませう。

ト成國こなしあつて

成國 イヤ〳〵、餘人は格別、この儀ばかりは、罷り成りませぬ。

二宮 そりや又、なぜでござりまするな。

ト此あたりより禪司坊出かゝり、樣子を窺ふ。

成國 イヤサ、申さば女儀の事。よしさうなくても、叶はぬと申すその仔細は、悲しいかな其許の御出生は、河津の娘。太郎朝忠へ緣組み致されたれども、力と賴む夫二の宮どのには病死いたされ、それより世を見限つて、大姫君へ一生奉公。すりやコレ、曾我にゆかりのある其許。まつた祐信の越度は、預かり置かれし逆澤瀉の鎧、祐成が揚げ代の代りに、町家へ預くるとは、これ輕からぬ身の越度。

大藤 まだその上に、箱根山にて友切丸紛失。同時に箱王丸は下山して、行くへ知れねば疑ひかゝり、今その詮議眞最中。

成國 彼れといひ、これといひ、迂濶に心許されぬ曾我のゆかり、どう致してこの二品が渡されう。

二宮 すりや、曾我にゆかりの繫がるゝ、この二の宮の局ゆゑ、お取次の儀は

成國 痩せ浪人の曾我殿原、叶はぬ事サ。田作の齒ぎしり

大藤 扣へ召されい。

禪司 そりや又あんまり。

ト思ひ入れ。成國、フツと禪司坊を見て

成國 ヤ、合點のゆかぬ乞食坊主め。うせう。

ト云ひながら禪司坊の襟髮を取つて、舞臺へ引摺り出し

サア、坊主め、むさい穢ないこの形で、なんで姫君の御前へ出た。それさへあるにたつた今、う

ぬが口からあんまりと、口走つたは合點がゆかぬ。サア、有やうに身許を吐かせ。

大藤　彌太夫どの、此奴、狂人かも知れませぬ。

成國　イヤ、氣の狂つた面つきでもござらぬ。サ、なんであんまりと口走つたのだ。

禪司　サア……その、あんまりと申しましたは、思はず知らずこれへ參りまするとあまり……サア、あまりに凶事の重なる曾我……樣とやらゆゑ、ツイ我れ知らずに

成國　それで、あんまりと吐かしたのか。此奴、口賢こく云ひ廻すな。それはそれにも致してくれうがわれの生國は、いづれだ。

禪司　ハイ〳〵、御免なされて下さりませ。私しは遠い北國の者でござりまする。

成國　ナニ北國だと申すか。オヽ、その北國が油斷がならぬ。先達て主人祐經、越後の國久上寺へ御寄附の金子、百兩差上げられしところ、その金子を奪ひ取つて、久上寺を逐電なせしは、河津が末の子、禪司坊。

トこれにて禪司坊、二の宮、惚りこなし。成國、兩人に目を附けサア、てつきり汝に違ひない。この上は屋敷へ引ッ立て拷問する。うしやアがれ。

ト引ッ立てようとする。禪司坊、その手に縋つて

禪司　モシ〳〵、マア〳〵お待ちなされて下さりませ。どう致しまして其やうな、恐ろしい事を致すやうな者ではござりませぬ。北國とは申したれども、信濃路より雪に凍えて、この鎌倉へやう〳〵と、杖を力にたどり〳〵、往來の人樣のお助けにて、露命を繋ぐ賤しい修行者。なにも怪しい者ぢやござりませぬ。どうぞ御免なされて下さりませ〳〵。

二官　成る程、見ましたところが、左樣な恐ろしい事を致すやうな、出家とも見えませぬ。こりやお免しなされて遣はされた方が、よろしうござりませう。

成國　なにサ〳〵、又してもいらざる詫び言。この上は、疑ひかゝつたこのづく入、包むに於てはぶりぶり責、拷問なして白狀させうか。

禪司　サア

成國　但しこの場で白狀するか。

禪司　サア

兩人　サア〳〵〳〵。

成國　坊主め、妄を動きやアがるな。

ト成國、禪司坊を引附け、打擲する。この途端に薄ドロ、成國の懷中にて轡の音する。禪司坊、二の

宮、皆々恟りする。成國驚き、ちやつと懐を押へる。二の宮こなしあつて

二宮　ハテ合點のゆかぬ。いま彌太夫さまの懐中にて動揺したるは、正しく河津の家に傳はりし、木枯と名けたる轡の一品、血筋の者に凶事ある時は、自然とその音を發するといふ。過ぎし安元二年の空、赤澤山にて祐安さま、御最期ありしその場所へ駈けつけ見れば、家に傳はる木枯の轡紛失又その場より逐電なせし、馬添ひの十内、慥かに彼奴が仕業ならんと、思うたばかり詮方なく、年月過す其うちに、今といふ今木枯の、轡の音に知らせしは、もしや工藤の家老職、小藤太どの の親御たる、彌太夫どのゝ懐中に、正しくその時失ひし、木枯の轡か

成國　ヤ。

ト恟りする。二の宮こなしあつて

二宮　とサア、疑ひかゝるこの場の始末。見るもいぶせき旅僧の、その詮議より差あたる、轡の詮議いたしませうか。

成國　サ、そりやア

二宮　荒立て云へばこの通り。但し繪圖面、切手とも、この局へお預けあるか。

成國　サア

二宮　轡の詮議いたしませうか。

成國　サア

兩人　サア〳〵

二宮　何とでござりまするな。

ト成國こなしあつて

成國　エ、、折惡い……成ら程、ようござる、然らば大切なる品なれども、切手の取次は姫の傳き、局役の二の宮どの、慥かに預け申したぞ。

ト切手を渡す。

二宮　大切なるこの切手、しつかりと預かりましてござりまする、また疑ひかゝりし旅僧は、思ひ設けぬ身の災難。

ト落ちたる裂れを取上げ

ハテ、合點のゆかぬ……見覺えのある藤蔓錦。こりやコレ、京の次郎祐俊さまが、越路へお出での時、慥かに持つて

トあらはに云へぬ思ひ入れあつて

そんなら、疑ひもなき、もしや久上の

成國　エヽ。

二宮　サア、久上……とやらでなければ、その身にかゝる凶事もなし、それと互ひに明石潟、汐の滿干も、くが……と沖、浪に漂ふ其うちに、惡い嵐に吹き散らされ、かゝる島なき今の難。ナ、それ名乘るも、ナ、のらぬも風次第、行きたい所へ、早う行きや。

ト藤蔓錦を禪司坊に渡す。禪司坊受取り、涙を隱して

禪司　段々のお情、有り難うござりまする。

ト大姫こなしあつて

大姫　ほんに、最前から見るところ、危ふい旅僧、今聞けば雪に凍えて、きつう難儀の樣子と聞く。一河の流れ他生の緣。コレ、二の宮。

二宮　ハッ。

大姫　皆々も一緒にあの旅僧、自らが祈念のうち、ナ、それ、布施物取らせてやりやいなう。

二宮　有り難う存じまする。

成國　大姫君には最前より、御退屈にもござりませう。イザ〳〵、御參詣あつて、然るべう存じまする。

大姫　それ〳〵、そんなら共々神職方へ。二の宮、案内。

皆々　まづ、入らせられませう。

ト唄になり、大姫先に舞鶴、龜菊。二の宮は禪司坊に思ひ入れあつて涙を隱し入る。禪司坊こなしあつて立たれぬ思ひ入れ。これを勇之進介抱して連れ立ち入る。跡より犬坊丸、景茂、孫八、荒次郎、小文次入る。成國、大藤内殘る。

大藤　彌太夫どの、只今の旅僧、形に似合はぬ爪はづれ、何とも怪しいとは存じ居つたが、何を云つても肝腎の時、降つて湧いたる貴殿の懷中。

成國　さればサ、既に二の宮めにと思ひしゆゑ、當座遁れに切手を渡し遣はしたが、あの坊主こそ、禪司坊に相違なけれど、押して詮議もなり難き、懷中の轡の音色。かゝる稀代の河津の重器、この轡があつては、なか〳〵河津を討つこと思ひもよらずと、十八年以前、河津が馬添ひの童、十内めを騙しすかし、暫らく轡を某へ渡し置けと、情ごかしに此方へ奪ひ取り置いたればこそ、柏ケ峠で河津を討つたその時に、凶事を知らせの憂ひもなく、まんまと某が矢尖にかゝり、命を落せし河津三郎。それより十内めは逐電なし、暫らく中絶いたせしに、この程參つて樣々と、身の成行きを悔むゆゑ、病死の八幡が跡役を、推擧いたして同腹中。斯ほど忠義を磨く我れ〳〵親子に

さのみ高祿をくれざる奇怪。その意趣晴らしと思ふうち、かねぐ〜貴殿と牒し合せし、かの一儀は。

ト大藤内、懐中より、小さき德利を出し

大藤　氣遣ひあるな。これこそは手蔓を以て、密かに手に入れしくじかの膳。この膳に鴆毒を加味なし服まする時は、卽座に眩暈の病となる稀代の祕法。アヽコレ、酒に浸して服ませるまでが手段の第一、折を見合せこの毒を、酒に浸して置きたいものだが。

ト云ふうち、下座より神主、烏帽子裝束にて、勇之進が持つて來たる三方の神酒德利を、其まゝ持つて出て來り

神主　勇之進さまには、どれへござつたか。祈念いたしたこの神酒、どうぞ手渡ししたいものだが……モシ〳〵、あなた方のうち、勇之進さまと仰しやるお方はございませぬか。

ト此うち成國、大藤内、こなしあつて

成國　成る程、その勇之進と申すは、拙者でござる。

神主　左樣なれば、あなたが勇之進さまでござりまするか。御面談いたさぬゆゑ、お顏は初めて。イザイザ、祈念いたした神酒、慥かにお手渡し仕りまする。頂戴なされ、御信心が肝要でございます

る。

ト成國受取り

成國　これは〳〵、拙者が只今參らうと存じたところ、これまで御持參、恐れ入ります。

神主　然らば、しかとお渡し申しました。

成國　これは御苦勞に存じまする。

ト神主、下座へ入る。兩人顏見合せ

大藤　明いた口へ餅にはあらぬこの神酒、斯う手番ひがうまく行くものか。

成國　事成就したやうな心持ちでござる。一刻も早くこの神酒へ、今の一藥、仕込み召されい。

大藤　心得ました。あたりへ心を

ト管絃になり、大藤内、片々の神酒德利へ、毒藥の包みを出して調合なし、德利へ仕込み、元の通り神酒の口をして

大藤　斯うして置けば、祐經めにおッくらわせるは、貴殿の計らひ。

成國　そこに如才があらうか。併し、ひよつと取違へまいものでもない。ちよつと印しに

ト上下より紅梅の梅を折つて來て德利へ挿し

この赤い方をおッくらわせれば、祐經は眩暈の病ひ。まだその上に、祐經が引いたる狩場の繪圖面、貴殿へ渡す上からは、祈念のその時、似せ物を拵らへ置き、鬼門の方へ御領の狩屋を引いたるは、祐經が越度となし、詰め腹切らせ、その虚に乘つて犬坊丸もおッ殺し、三ケの莊を横領なさん一つの手段。この上は右の趣き、梶原へ密かに申し遣はしたいものだが。

大藤　その儀は疾より、認め置いたこの一通。

ト出す。

成國　成る程、出來した。併し、宛名があつては一大事。

大藤　そこに如才はござらぬ。仰せの通り、名宛も知れぬ文言ばかり。

成國　然らば、拙者方より梶原へ、密かに送り遣はすでござらう。

ト成國、手紙を取つて懐中する。

大藤　斯くなる上は豫ねての通り、範頼公の御大望も、成就の道理。して、この大藤内には、

成國　お墨附は、おッつけ同腹中の、八幡の三郎持參いたせば、喜悦の眉も開くる道理。

大藤　エヽ、忝ない。それ承つて成景、心も浮々いたして參つた。

成國　何は兎もあれ、二の宮へ渡し置いた狩場の切手、此方へ取返す手段があれば、拙者はこれより神職方へ。

大藤　然らば、彌太夫さま。

成國　萬事は後刻。

ト大拍子になり、成國思ひ入れあつて、三方の神酒徳利を持ち、下座へ入る。向うにて

源太　待ちやアがれ〳〵。

ト直ぐにてんつゝ、通り神樂になり、向うより駕籠舁き、四つ手駕籠を舁き、出てくる。この駕籠に少將、着流しにて出てくる。これに若い者一人附き添ひ、跡より源太、柿の前垂れ、徳利を提げ、櫓拾ひの梶原にて、附いて出て來り、花道にて

源太　コレ〳〵、なんでもこの駕籠の内は、手越の少將に違ひない。逢はせてくれろ〳〵。

若者　とんだ事を云はつしやる。手越の少將さんが、なんで酒屋の御用に近附きがあるものだ。構はず

と、駕籠をやらつしやい〳〵。

ト云ひながら、舞臺へ駕籠を押してくる。源太、矢張り附いて舞臺へ來り

源太　このハツツケ野郎め、さう成らないと吐かしやアこの駕籠はやる事はならないワ。

ト駕籠を引下ろす。此うち下座より景茂出て來り

景茂　これは何事だ。

ト云ひながら源太を見て

ヤア、お前は兄貴の源太どのぢやねえか。

大藤　成る程、さう云へば源太どのか。勘當うけられて、樽拾ひとまで落ちぶれたが、金も築地と思ひの外、これも善次の約束か。

景茂　樽拾ひとは、あんまりな落ちぶれやう。

源太　これサ〳〵、愚痴な事を云つたものだ。二三年あとまでは、紙屑拾ひとまで成り下がつたが、ちつとこの春は出世じたところが、この通り樽拾ひよ。したが、去年は願人をするし、揚句の果には路地番までして、いろ〳〵苦勞をした所爲か、おれもうんじやうしたのよ。それについても、この駕籠に乘つてゐるのは、おれがだりむくりの始まり、手越の少將。邪が非でも引摺り出して嬶アにせにやアならねえ。サア、少將め、爰へ出やアがれ。

ト駕籠の垂れを上げ、内より少將を引摺り出す。これにて駕籠舁きは駕籠を擔ぎ、下座へ逃げて入る。

若者　さうはならない。

ト取つくを、毆り倒す。少將思ひ入れあつて

少將　そりやお前、無體といふものぢやわいなア。

源太　無體も糸瓜もあるものか。いつそのくされ三人寄つて、廻り燈籠と出かけるべいか。

景大　そいつは妙だ。

ト三人寄つて少將を押しこかす。若い者取つく毆りのける。此うち通り神樂、向うより朝比奈、胸あて、木綿やつし、三度飛脚、木綿の半のりかけ、三度笠、染め綿にて髭を隱し、出てくる。跡より彌藏、馬士にて、兩掛けの荷を擔ぎ出て來て

彌藏　サア親方、好い加減に酒手をくんなさい〳〵。

ト朝比奈これに構はず、足早に舞臺へ來て、皆々を毆りのけ、少將を圍ふ。皆々恟りして

源太　ヤア、うぬは何處からうせた

三人　三度飛脚だ。

朝比　イヤ、わしや大阪から來ましたわいなア。

ト京談にて云ふ。

源太　その又大阪から來た三度が、なんでおいらを

二人　殴り倒したのだ。

彌藏　これサ親方、わつちも先刻から、口を酸くして申しやす。極めの所から、四里も餘計に參りやした。それに酒手も寄越さず、駄賃も寄越さないで、暗雲に行かつしやるが、挨拶の仕やうが惡いと、この荷物をやる事はならないによ。

朝比　サテハテ、えいわいの〳〵。いま先へ行くと、錢かうてやるわいの。マア、なんであらうと、和田の屋敷までごんせいな。それだけの駄賃はしてやらうわいの。

ト源太思ひ入れあつて

源太　とんだ氣紛れが出てうしやアがつて、イケ邪魔をしやアがるな。もう汝にやア頓着はない。サア少將來い。

ト兩人、少將へかゝる。朝比奈、源太大藤内の利腕を取つていためる。

兩人　アヽ、痛い〳〵。

源太　とんだ馬鹿力のある三度めだ。

大藤　なんだか腕が、おッぺしよれるやうだ。

源太　アヽ、聞えた。うぬは、西の海から帆をかけた、節分の鬼か。

朝比　いんにや。

大藤　そんなら大阪者か。

朝比　いんにや。

源太　但し矢ッ張り江戸者か。

朝比　ウンエヽ。和田が三男、小林の朝比奈でござんす。皆さん御無事で、ヤレ〳〵、久しいなア。

ト笠を取る。皆々惘りして

源太　ヤア〳〵、うぬは朝比奈の貧乏野郎だな。父ッぽうに勘當うけ、せう事なしに上方へ行つたと聞いたが、そんなら島屋の上下にでもなつたのか。コレ、江戸の朝比奈といふ物は、厚板の衣裳で羽子板でも擔いで、和田が三男小林の、朝比奈だもサといふがお仕着だワ。それになんだ、うぬは、江戸ッ子のやうでもない。朝比奈でござんすわいなアとは、とんだ上方さいろくだ。

大藤　餘ッぽど淀川の水が浸み込んだな。これから少つと、水道の水を呑み習ふがよい。

三人　とんだ唐變木だ。

朝比　さいナ、わしもさうは思ふけれど、多勢に無勢ぢやわいな、聞いておくれや。四五年あちに居るうちナ、つい朝比奈々々と云ひ習うて、此方に居た時のやうにナ、とつとどえらい事も拋つて

置いて、何ぢややら、一向厄體ぢやわいな。

三人　イヤ、此奴は呆れたものだ。

源太　これから、皮足袋賣りの、荷擔ぎにでもなるがよい。

大藤　とんだ張合ひのない

景茂　大阪朝比奈だ。

三人　ハヽヽヽヽ。

ト笑ふ。この時下座より勇之進走り出て來て、朝比奈を見て

勇之　ヤレ〳〵、和子朝比奈さまでござりまするか。私しはあなたを待つて居りました。親旦那義盛さまが、迎ひの手紙を遣はされ、今日はお下りか、お戻りかと、お待ち申して居りました。お前が彼方へ上らつしやりまして、もう四五年、アヽ、年はよるまいもの、老耄いたして、一向厄體な事ばかり申します。私しは何を云はうが、毎日違ひます程に、さう思し召して下さりまし。さてさて、物覺えの惡くなるを思へば、干し大根は三ツ葉ぢやなア。

朝比　オヽ、片琴勇之進か。ヤレ〳〵、懷かしかつたわいの、聞いて下され。去年の春、木挽町へ下つて何ぢややら、父御の勘當もゆりず、あなた方のお叱りもあらうかと、わしや扣へて居ましたわいの。

勇之　モウ〳〵、その御勘當がゆりましてござりまする。こればつかりは忘れませぬ。

朝比　なんぢや、勘當がゆりたと云ふのかいの。

勇之　左樣でござります。お喜びなされませ〳〵。

朝比　ヤレ〳〵嬉しや。御勘當がゆりたとあれば、わしも上るまで、少つとは覺えて居た朝比奈ぜりふサア、これからは江戸ッ子をお目にかけるぞ。

三人　イヤア。

朝比　ヤイ、げぢ〳〵めら。うぬらはマア、口に借金がいらねえものだと思つて、骨箱をならしやアがつたな。今なんと吐かした。大阪朝比奈だなんぞと、よく苛めやアがつたな。斯う云ひ出すからはうぬらに苛められてつまるものか。これから地金を現はして、うぬら片ッ端から、鹽を附けずに食つてしまふぞ。出島座頭の横ッ倒しめら、覺悟してうしやアがれ。

三人　イヤア。

ト皆々氣味惡き思ひ入れ。彌藏慄へ出し

彌藏　ハイ〳〵、私しは、朝比奈さまとは存じませず、酒手の駄賃のと、おねだり申しましたが、何も

かもお貰ひ申したも同然でござりまする。あなたはお慈悲深いから、只今申しました事は、どうぞ堪忍なされて、お歸しなされて下さりませ。お慈悲でござりますく。

源太　おれも、この位な山はあらうと思つた。どうで朝比奈が來ちやア、毎歳毎年。

大藤　叶はぬ力で

彌藏　投げたり踏んだり

景茂　さつさとござれや。

彌藏　逃げるが一の手。

大藤　痛い目せぬうち

源太　さつさとござれや。

ト云ひながら、皆々慄へ〳〵下座へ入る。あと合ひ方。

朝比　ハ、、、、、口ほどにもない弱蟲めら、ハテ、好い心持ちだ。時に少將や、久し振りだ。マア、變る事もなくて、めでたい〳〵。

少將　ほんに嬉しうござんす、思ひ設けぬ今の難儀、どうなる事かと思うてゐた所へ、思はず笠を取らしやんすと、朝さんゆゑ、やう〳〵痞へが下りたわいなア。

朝比　それはさうと、おれも少つと聞きたい事がある。

ト思ひ入れあつて

コレ、勇之進、いま跡から行く程に、先へ行つて、神主と待つてゐやれ。

勇之　イカサマ、左樣いたしませう。其うち又、お屋敷へも知らせて遣はしませう。

若者　左樣なら私しも御一緒に、宮までお供いたしませう。

少將　わたしが事は、必ず案じなさんすな。

若者　どう致しまして、鬼神のやうな、朝比奈さま。

朝比　おれがしつかり預かつた。

若者　エ、、有り難うござります。

勇之　左樣なれば、朝比奈さま。

朝比　サア、行きやれ〳〵。

若者　サア、お出でなされませ。

ト大拍子になり、勇之進に若い者附いて下座へ入る。

朝比　時に、外の事でもないが、祐成や虎が事はどうなつた。

少將　サァ、その祐成さんの事について、大抵話しがござんすわいなァ。

朝比　なんぞ案じる事ぢやァないか。

少將　聞きなさんせ。祐成さんは、揚げ代の百兩といふもの、日々の催促に手づかへなさんして、鬼王さんを賴んで、逆澤瀉の鎧とやら、質入れなさんした。そのお咎めとあつて、祐信さまは和田さまへお預け。それゆゑ大磯へはお出でもないゆゑ、いとほしなけに虎さんは、願掛けやら斷ち物やら、涙のかはく隙はござんせぬわいなァ。今日爰へわたしが來たのも、みな虎さんの賴みゆゑでござんすわいなァ。

朝比　虎が賴みで、なんで、この明神へ。

少將　サァ、その仔細は、これでござんすわいなァ。

ト懷中より袱紗に包みし、絹地に祐成の姿が描きたるを出し、朝比奈に見せる。

朝比　オヽ、こりやァ祐成が人相書ぢやァないか。

少將　なんのいな、この頃はお咎めうけ、廓へござんせぬ祐成さんが懷かしさ、又は祈念のその爲と、此やうに祐成の姿繪を描かせて、杜戸の明神樣へ日毎の願ひ。廓へ歸ると虎さんは、座敷へ懸けて、心の憂を晴らしたいと、思ひ込んでのわたしへ賴み。それゆゑ虎さんの代參に來やんしたわいな。

朝比　成る程、それぢやァ虎が案じるも尤も。それより滿江や鬼王が身になつて見やれ。夜も晝も、ろく〳〵寢られまい。併し、この姿繪は、よく祐成に似せて描いたぢやァねえか。こりやァ大方豐國だらう。

ト云ひながら見るうち、風の音して、姿繪を吹きあげ、差し金にて後の幕の内へ落ちる。兩人惚りして

朝比　コレ、とんだ風ぢやァねえか。こればつかりは、力づくにもゆかねえ。

少將　差づめあの繪を失うては、虎さんへの云ひ譯立たず。こりやァマア朝さん、どうしたらよからうぞいなァ。

朝比　これサ、何も案じる事はない。今の繪は、慥かにこの幕の内に落ちたに違ひない。ドレ、おれがちよつと取つて來てやるべい。

ト云ひながら幕を絞り上げると、内より大姫、姿繪を持つて出る。跡より二の宮附いてくる。朝比奈惚りして

朝比　ヤァ、いま吹きあげし姿繪は

ト合ひ方。

大姫　嬉しい風が縁となり、思はず妾がこの膝へ、落ちて心をまどはせしは、日頃戀しい床しいと、思ひつめたる曾我の十郎祐成。まだ見ぬ戀にあくがれて、心の中のやる瀬なさ。縁に繋がる二の宮が手前、恥かしさをも姿繪に、押包まれぬ胸の内。蓮葉な者ぢやと、必ず笑うてたもんなや。

二宮　これは又、改まつたそのお詞。情なや姫君の、見ぬ戀にあくがれ給ふ祐成は、この二の宮の局が弟。

少將　エ、、そんならあなたが二の宮さま。

朝比　この朝比奈も、詞をかけたく思つたが、姫君の御前といひ、だんまりでゐたが、いま聞けば、祐成に打ッ惚れて、見ぬ戀にあくがれてゐた所へ、おつりきな風が吹いて、この手越が預かつて來た、虎が大事のその姿繪、姫君へ巻きあげられちやァ、可哀さうにこの手越が、虎に云ひ譯があるまい。なんと二の宮、爰は一番おれが頼まひだ。その姿繪を、返してやつちやァくれまいか。

二宮　それいなァ、譯を聞けば、虎どの、心一つ、と云うて姫君へ申し上げなば、折角思ひつめた祐成の姿繪が、今お手に入り早々に、どうぞお返し遊ばせと、云ふに云はれぬこの場の切なさ。

大姫　イヤ〳〵、大事ないわいの。なんぼ自らが思うたとて、とても屆かぬ戀衣、きつゝなれたる獨り寢の、枕の伽と思うた姿繪、その主こそは大磯の虎。誰れしも思ふ心は一つ。見れば見るほど思ひの種、早う返してたもいなう。

二宮　畏りましてござりまする。

ト姿繪を取上げる。少將とめて

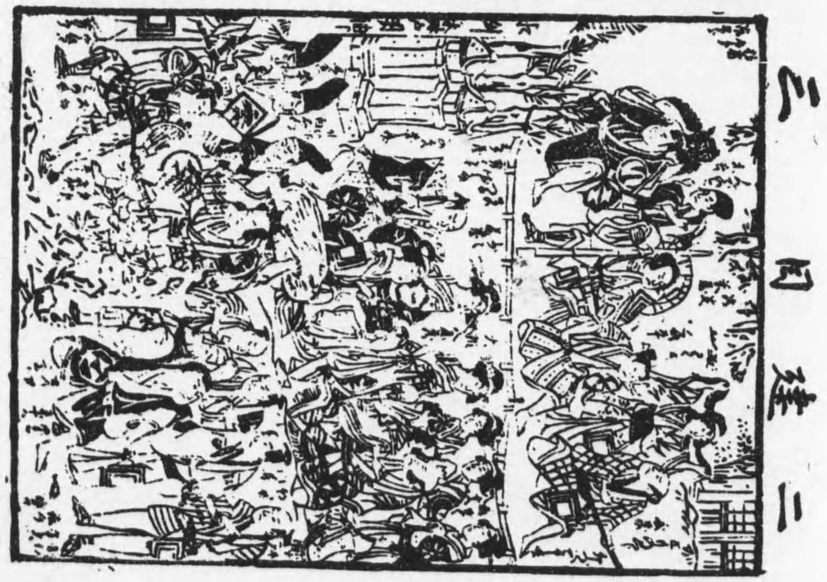
少將　マア〳〵、お待ちなされませ。憚りながら、賤しいこの身に有り難い、思はぬ今日のお目見得も元はといへばその姿繪。お心あり氣な今のお詞。世を恨みたるお心根が、おいとしうござりますこの譯を打明けて申しましたら、虎さんぢやと申して、海道一の遊君、なんの否がござりませう折角のお心が屆いたしるし。ようござります。私しが心一つで、憚りながら姫君樣の、お氣むすぼれも解くるやう、今宵はあなたへ祐成さんを、おとめ遊ばすがよろしうござりますわいなァ。

大姫　ヤ、、そんならそもじが、この姿繪を

少將　サア、あんまりお心根がおいとしさに、只何事も心一つで

大姫　ほんに優しい志し、嬉しいぞや。

朝比　成る程、流石は手越の少將だ。それで姫君のお心も屆き、虎が心も行屆く。心は二ツ、一人の祐成。女冥加に盡きにやァよいが。



大姫　ナニ二の宮、あの女中の志し、一夜流れの勤めの身に、又とあるまい心にほだされ、根曳き致して自らが、今日より改め抱へたい。

少將　エヽ、そんなら曉しい私しを

大姫　サア、今の詞にほだされて

少將　エヽ、有り難うござりまする。

二宮　然らば今日より改めて、姫君様の御諚に任せ、今より直ぐにお伽役。廓へは表向きより、申し遣はすでござりませう。隨分ともに、心を附けて御奉公。

朝比　コレ、廓と違つて行儀が第一。もう、酒も鰐腹は飲まれねえぞよ。

少將　そりや合點でござんすが、でも虎さんへこの事を

朝比　そりやアおれが呑み込んだ。姿繪の事は、恨みッこの無いやうに、十日がはりにでも勤めさせるがいゝ。

二宮　これといふのも、元の起りはあの祐成。

大姫　ヤ。

二宮　サア、それ程に思し召すお心なれば、先程お願ひ申したる、ナ、それ、この手越どの、廓の手を

切つて、ナ、それ、門を出口の柳ごし、この姿繪を、ちよつと狩場の

大姫　ハテ、何事も自らがこの胸に、收めて置くはこの姿繪。

ト懷へ入れる。バタ〳〵になり、下座より舞鶴、龜菊出て

舞鶴　姫君樣には、神職方にて奉幣の刻限。いざ〳〵

二人　お入り遊ばされませう。

大姫　そんならこれより、手越とやらも共々に

少將　お供いたしませうわいな。

朝比　ドリヤ、この朝比奈も、魚交りになるべいか。

二宮　左樣なれば、姫君樣には神前へ

大姫　皆、おぢや。

二宮　まづ

皆々　お入り遊ばしませ。

ト唄になり、大姫先に、少將へ思ひ入れ。少將こなしあつて入る。續いて舞鶴、龜菊、朝比奈、入る

二の宮殘り、跡見送り、懷中より切手を出し、兄弟へ遣りたいといふこなし。よき程に、通り神樂に

なり、向うより町人二人、團三郎の襟髪を取つて引摺り出てくる。團三郎、誂らへの形、風呂敷包みを抱へ、引摺られ出てくる。花道にて

團三　御免なされませ〳〵。間違ひでございます〳〵。

町甲　なんだ、間違ひだ。この野郎めは、いけッ太い奴でござるわえ。うぬが持つて駈け出した風呂敷包みを、出しやァがれ〳〵。

町乙　何食はぬ面つきで、この風呂敷の替へ玉を置いてうせたによつて、明けて見たれば、雑巾のやうな物を入れて置きやァがつた。

町甲　それ〳〵、なんでも此方の風呂敷包みにやァ、小袖が二つ入れてある筈だ。サァ、出しやァがれ出しやァがれ。

トこづき廻す。

團三　サァ、あげます〳〵。あまり急ぎましたゆゑ、つい取違へて持つて參りましてございます。サァサァ、お返し申しあげます。大きに無調法を致しました。御免なされませ〳〵。

町乙　それ見やァがれ、おいらが追ッつかねえと、すつかりしてやられるところであつた。太い野郎めでござるわえ。

町甲　それ〳〵、盗人猛々しいと、晝中においらが包みを、替へ玉にせうとは、うぬは新米の晝稼ぎだな。

團三　どう致しまして。

町乙　それに又、なんで包みを持つて駈け出したのだ。

團三　サァ。

兩人　エヽ、いけッ太い野郎だ。

トくらはす。

町甲　人を盲目にしたその代りは、斯うして〳〵。

ト兩人、團三郎を打つ事あつて

町乙　これで少つとは腹を癒ました。

町甲　ヤレ〳〵、好い心持ちだ。サァ、行きませう〳〵。

町乙　成る程、太い奴でござつた。サァ、ござれ〳〵。

ト捨ぜりふにて向うへ入る。團三郎こなしあつて

團三　いかに世につれる貧苦なればとて、空恐ろしいこの世渡り。どうぞして御兄弟を貢がんと……オ

オ、こりや云はいでも天道様や、いづれも様がよく御存じ。アヽ、思はず愚痴な心を出して、既に涙をこぼさうとした。ドリヤ、これから氣を持ちかへて、明神様へお詣り申さうか。

ト舞臺へ來て、思はず二の宮と顔見合せ

ヤア、あなたは二の宮さまでござりますか。

二宮　團三郎か。

ト顔を見て涙ぐみ

ほんに思へば、曾我の代にてもあらうなら、今の憂目は見まいものと、思へばいとしや其方や鬼王、さぞ口惜しうもあらうけれど、じつと辛抱してゐやる、その心根が思ひやられて

團三　これはしたり、二の宮さま、そりやどうした事でござりまする。常からのお心にも似合ひませぬそのお詞。たとへ兄弟は、どのやうになりますまでも、逆様な事を致しても、天道様は正直でござりまする。おしつけ又、花の咲く事もござりませう。あまりきな〳〵思し召さぬが、ようござりまする。

二宮　ほんに、それいの。イヤ、再び花咲く事と云へば、コレ、早速其方にも、喜ばす事があるわいなう。

團三　それは耳寄りな事でござりまする。まづ何は差おき、その仔細、早うお聞かせ下さりまし。

二宮　云はいでかいの。年頃日頃鬼王や、其方が願うて居やる狩場の切手、二枚とも手に入りましたわいの。

ト出して見せる。團三郎恟りして

團三　エヽ、これはマア、夢ではござりませぬか。エヽ、有り難い〳〵。日頃から盡す心が、諸神諸佛感應あつて、今日といふ今日狩場の切手、二枚とも手に入るは、御兄弟様の御運の強さ。祐經は縮まる命。お手柄なされまし た〳〵。片時も早う滿江さまや、御兄弟へお目にかけて、お喜びなさるお顔が見たうござりまする。ドレ、ちよつと私しが持つて參りませう。

ト取つて行かうとする。二の宮とめて

二宮　イヤ〳〵、切手は工藤家より、賴朝公に差上げる、初手に作りし二枚の切手。一旦武將へお目にかけぬ其うちは、妾が物にはならぬわいの。

團三　エヽ、そんならまだしつかりと、お手に入つたといふぢやござりませぬか。

二宮　サア、妾に如才があるものかいの。とつくりと折を見合せ、大姫君へ願うた上、また仕やうもやうがあるわいの。それについても、話さねばならぬ事は、最前爰へ、病み崩折れし旅僧、正しく

禪司坊に相違はない。どうぞ早う人目を除け、其方に逢はせて、委細の譯をも糺したさ。それにつけても、鬼王はどうしやつた。

團三 サア、兄鬼王は、鎧の申し譯立ち難く、曾我の屋敷に居る事叶はず、姉の月小夜どのゝ伯母たる小袋坂の隱れ家に居るとの事。箱王さまは、友切丸の紛失にて、その疑ひかゝるゆゑ、鎌倉中へは顏出しならぬ日影の御身、搗てゝ加へて、この上禪司坊さまのお身に凶事ある時は、猶さら濟まぬ曾我のお家。そのお話しの樣子では、禪司坊さまに相違ござりませぬ。これより直ぐにこのあたりを、お行くへ尋ねて

二宮 コレ、それとても表向き、打明け然うと名乘られぬ、その譯は。

ト團三郎に囁く。惚りして

團三 ヤヽヽヽ、そんなら昨日、その金子を

二宮 コレ。

ト思ひ入れ。團三郎、口へ手を當てる。二の宮、あたりへこなし。この途端よろしく、唄、通り神樂にて、ひやうし

幕

四建目

鬼王浪宅の場
片瀨川の場

役名——鬼王新左衞門。同弟、團三郎。鬼王女房、月小夜。曾我の母、滿江御前。馬士、刎ね畏の彌藏。質屋番頭、善八。醫者、似た山通庵。庄屋、李兵衞。尼、妙林。婆、おまご。久須美玄蕃。奴、丹平。一刀五郎兵衞。眞刀作平。吉岡吉右衞門。無敵武右衞門。市傳市藏。神影新五兵衞。浪人、關の畑右衞門 實は大友常陸之助頼國。

本舞臺、三間の間、二階附きの土藏造り、質屋の見世、戸を卸ろしたる體。下の方、木戸にて見切り。爰に彌藏、齒磨賣りの形、頰かむり、股引、日和下駄にて立つてゐる。仕出し大勢、提灯を持ち、取卷きゐる。てんつゝにて幕明く。

大勢 イヨ〳〵、高麗屋々々〳〵。

ト褒める。

彌藏 サア〳〵、御愛嬌には板三津に杜若。齒磨は僅か八文……サア、そこらにござりませんかな。

仕出 オイ〳〵、助高屋を一番聞きたい。

彌藏　助高屋は、誠に遣ひならひでござりまする。

ト齒磨を賣り、木戸の衆、聲色を遣ふ。皆々褒める。

次は大和屋杜若をお聞かせ申しませう。

仕出　杜若、よからう〳〵。

ト向うにて

月小　アイ〳〵、左樣ならば向うの町が、圓覺寺前でございますか。忝うございまする。

仕出　大和屋ア〳〵。

ト通り神樂になり、向うより月小夜、風呂敷包みを抱へ、出て來り

月小　ほんに、宿替へしたら、常來る道さへ知れぬわいの……それはさうと、先度あの馬士の彌藏が、畑右衞門からの文ぢやというて、無理に懷へ押込んで行つたこの狀。

ト手紙を出し

明けて見たれば、名越川へ金を埋めて置くといふ、梶原への密書。道ならぬ事ながら、鎧の手詰め。ヅッとする程怖い思ひで、拵らへた金。百兩あつても、もう二十兩足らぬばつかり、一日一日遲れる質請け。今日は是非々々請けねばならぬ手詰め。義理の惡い着物なれど、これなとやつて番頭どのを口說いて……それにしても、あの畑右衞門づらが、金の行場を氣取つて、尋ねて來ぬのも不思議。マア、何にせい、番頭どのが居てくれゝばよいが。

ト この時揚げ幕にて、「泥坊々々」と呼ぶ聲する。團三郎、一散に逃げてくる。舞臺の仕出し左右へ別れ、團三郎を追ひかけ入る。月小夜、舞臺へ來り

盜人さうぢや。油斷のならぬ。この包みでも取られぬうち

ト潛りを少し明け

モシ〳〵、番頭さん、ちとお目にかゝりたうございまする。

ト合ひ方になり、內より善八、手代の形、綱の手燭を持ち、出て來り

善八　誰れだ〳〵、いま藏へ行かうと思つてゐる所。どうで質屋へ來て呼び出す者に、ろくな奴はない

ト月小夜を見て

オヽ、月小夜どのか。

月小　番頭さん。ちつとお前に折入つて

善八　今のは、こなさんの事ではないよ。

月小　イエモウ、仰しやる通り、呼び出すに、ろくな事はございませぬ。その譯は、先頃、內からお賴

み申せし鎧の事。

善八 成る程、あの逆澤瀉は、元は百兩なれど、祐成どのに種なしを十五兩貸して、今ぢやァ利ぐるみ百二十兩無ければ出されぬと、先度、内から

月小 サァ、お斷わりでござりまするが、今宵は是非々々、無ければならぬ品ゆゑ、さま〴〵に都合いたしましたれど、夫鬼王は久しう病氣。女子の手一つ、やう〳〵とマァ才覺いたして、無理に借りた品。どの道返さにやならぬ程に、これをマァ、足しに取つて置いて

善八 鎧を返せと云はつしやるのか。

ト風呂敷包みをひろげ、見る事あつて

縞縮緬に結城、四品あれど、二十兩の抵當に、これがどうして。

月小 サァ、それぢやによつて、親方さんに知れぬやうに、お前を頼み。ほんの抵當に取つて置いて

善八 ハテ、口說を聞くも、大概あるものだ。

月小 そんなら、どのやうにお頼み申しても

善八 あつたら口に風。わしも無駄な事に關はつては居られぬ。

ト内へ入らうとする。此うち團三郎出て

團三 番頭どの、待たつしやれ。

月小 ヤ、お前は團三さん。

團三 成る程、二十兩へ、着物四つでは、得心でない筈。

ト懷より紙に包みし髓甲の櫛笄を出し

これぢやァどうか、納まりさうなものだがの。

善八 ト善八、よく〳〵見て

こりやァきついものだ。捨賣りにしても三十兩が代物。

團三 得心して下さるか。

善八 しないで、どうするものだ。質の出し入れをして下されば、質置き大明神樣だ。

月小 モシ、團三さん、そのマァ大枚の頭の道具、お前は何處から

團三 サァ、とんだ事サ。祐成さまのお供で、大磯へ行く度々、全盛の花魁と、姉御の前ぢやァ云ひ憎いが、つい色になつて、借りて來ました。

月小 そりやマァ幸ひ

團三 明いた口へ、入れ替への足し。